岩波文庫
2324—2325

平凡

他六篇

二葉亭四迷作

平　凡 ★★

作者は文学を自らの天職とすることにあくまでも懐疑的であった．これはその懺悔の書であり，晩年の風貌を伝える好個の資料である．



緑 110

岩 波 文 庫

2324—2325

平　　凡

他 六 篇

二葉亭四迷作



岩 波 書 店

目次

平凡

一

私は今年三十九になる。人世五十が通相場なら、まだ今日明日穴へ入らうとも思はぬが、しかし未來は長いやうでも短いものだ。過去つて了へば實に呆氣ない。まだ〳〵と云つてる中にいつしか此世の隙(ひま)が明いて、もうおさらばといふ時節が來る。其時になつて幾ら足搔(あが)いたつて藻搔いたつて追付かない。覺悟をするなら今の中だ。

いや、しかし私も老込んだ。三十九には老込みやうがチト早過ぎるといふ人も有らうが、氣の持方は年よりも老(ふ)けた方が好い。それだと無難だ。

如何(どう)して此樣(こん)な老人(としより)じみた心持になつたものか知らぬが、強ち苦勞をして來た所爲(せゐ)では有るまい。私位の苦勞は誰でもしてゐる。尤も苦勞しても一向苦勞に負(め)げぬ何時迄も元氣な人もある。或は苦勞が上辷りをして心に浸みないやうに、何時迄も稚氣(をさなぎ)の失せぬお坊さん質(だち)の人もあるが、大抵は皆私のやうに苦勞に負(め)げて、年よりは老込んで、意久地なく所帶染みて了ひ、役所の歸りに鮭(しやけ)を二切竹の皮に包むで提(さ)げて來る氣になる、それが普通だと、まあ、思つて自ら慰めてゐる。

もう斯うなると前途が見え透く。もう如何様に藻掻たとて駄目だと思ふ。殘念と思はぬではないが、思つたとて仕方がない。それよりは其隙で內職の賃譯の一枚も餘計にして、もう、これ、多が近いから、家內中に綿入れの一枚も引張らせる算段を爲なければならぬ。

もう私は大した慾もない。どうか忰が中學を卒業する迄首尾よく役所を勤めて居たい、其迄に小金の少しも溜めて、いつ何時私に如何な事が有つても、妻子が路頭に迷はぬ程にして置きたいと思ふだけだが、それが果して出來るものやら、出來ぬものやら、甚だ覺束ないので心細い……が、考へると、昔は斯うではなかつた。人並に血氣は壯だつたから、我より先に生れた者が、十年二十年世の鹽を踏むと、百人が九十九人まで、皆じめ〳〵と所帶染みて了ふのを見て、意久地の無い奴等だ。そんな平凡な生活をする位なら、寧そ首でも縊つて死ン了へ、などゝ蔭では嘲けつたものだつたが、嘲けつてゐる中に、自分もいつしか所帶染みて、人に嘲けられる身の上になつて了つた。

かうなつて見ると、浮世は夢の如しとは能く言つたものだと熟々思ふ。成程人の一生は夢で、而も夢中に夢とは思はない、覺めて後其と氣が附く。氣が附いた時には、夢はもう我を去つて、千里萬里を相隔てゝゐる。もう如何する事も出來ぬ。

もう十年早く氣が附いたらとは誰しも思ふ所だらうが、皆判で捺したやうに、十年後れて氣が附く。人生は斯うしたものだから、今私共を嗤ふ青年達も、軈ては矢張り同じ様に、後の青年達に嗤はれて、殘念がつて穴に入る事だらうと思ふと、私は何となく人間といふものが、果敢ない

やうな、味氣ないやうな、妙な氣がして、泣きたくなる……

あッ、はッ、は！……いや、しかし、私も老込んだ。こんな愚癡が出る所を見ると、愈老込んだに違ひない。

二

老込んだ證據には、近頃は少し暇だと直ぐ過去を憶出す。いや憶出しても一向憶出し榮のせぬ過去で、何一つ仕出來した事もない、どころぢやない、皆碌でもない事ばかりだ。が、それでゐて、其失敗の過去が、私に取つては何處か床しい處がある、後悔慚愧腸を斷つ想が有りながら、それでゐて何となく心が惹付けられる。

日曜に妻子を親類へ無沙汰見舞に遣つた跡で、長火鉢の側で徒然としてゐると、半生の悔しかつた事、悲しかつた事、乃至嬉しかつた事が、玩具のカレードスコープを見るやうに、紛々と目まぐるしく心の上面を過ぎて行く。初は面白半分に目を瞑つて之に對つてゐる中に、いつしか魂が藻脱けて其中へ紛れ込んだやうに、恍惚として暫く夢現の境を迷つてゐると、

「今日は！　桝屋でございます！」

と、ツイ障子一重其處の臺所口で、頓狂な酒屋の御用の聲がする。これで、私は夢の覺めたやうな面になる。で、ぼやけた聲で、

「まづ好かつたよ。」

酒屋の御用を逐返してから、おゝ、斯うしてもゐられん、と獨言を言つて、机を持出して、生計の足しの安飜譯を始める。外國の貯蓄銀行の條例か何ぞに、絞つたら水の出さうな頭を散々惱ませつゝ、一枚二枚は餘所目を振らず一心に筆を運ぶが、其中に曖昧な處に出會してグッと詰ると、まづ一服と舊式の烟管を取上げる。と、又忽然として懷かしい昔が眼前に浮ぶから、不覺其に現を脫かし、肝腎の飜譯がお留守になつて、晩迄に二十枚は仕上げる積の所を、十枚も出來ぬ事が折々ある。

かうどうも昔ばかりを憶出してゐた日には、內職の邪魔になるばかりで、卑しいやうだが、錢にならぬ。寧そのくされ、思ふ存分書いて見よか、と思つたのは先達ての事だつたが、其後――矢張り書く時節が到來したのだ――內職の賃譯が弗と途切れた。此暇を遊んで暮すは勿體ない。私は兎に角書いて見よう。

實は、極く內々の話だが、今でこそ私は腰辨當と人の數にも算まへられぬ果敢ない身の上だが、昔は是れでも何の某といや、或るサークルでは一寸名の知れた文士だつた。流石に今でも文壇に昔馴染が無いでもない。恥を忍んで泣付いて行つたら、隨分一肩入れて、原稿を何處かの本屋へ嫁けて、若干かに仕て呉れる人が無いとは限らぬ。さうすりや、今年の暮は去年のやうな事もあるまい。何も可愛い妻子の爲だ。私は兎に角書いて見よう。

さて、題だが‥‥題は何としよう？ 此奴には昔から附倦んだものだツけ‥‥と思案の末、礑と膝を拊つて、平凡！ 平凡に、限る。平凡な者が平凡な筆で、平凡な半生を叙するに、

平凡といふ題は動かぬ所だ、と題が極る。

次には書方だが、これは工夫するがものはない。近頃は自然主義とか云つて、何でも作者の經驗した愚にも附かぬ事を、聊かも技巧を加へず、有の儘に、だら〳〵と、牛の涎のやうに書くのが流行るさうだ。好い事が流行る。私も矢張り其で行く。

で、題は「平凡」、書方は牛の涎。

さあ、是からが本文だが、此處らで回を改めたが好からうと思ふ。

三

私は地方生れだ。戸籍を並べても仕方がないから、唯某縣の某市として置く。其處で生れて其處で育つたのだ。

子供の時分の事は最う大抵忘れて了つたが、不思議なもので、覺えてゐる事だと、判然と昨日の事のやうに想はれる事もある。中にも是ばかりは一生目の底に染付いて忘れられまいと思ふのは、十の時死別れた祖母の面だ。

今でも目を瞑ると、直ぐ顯然と目の前に浮ぶ。面長の、老人だから無論皺は寄つてゐたが、締つた口元で、段鼻で、なか〳〵上品な面相だつたが、眼が大きな眼で、女には強過る程權が有つて、古屋の——これが私の家の姓だ——古屋の隱居の眼といつたら、隨分評判の眼だつたさうだ。

成程然うい へば、何か氣に入らぬ事が有つて祖母が白眼でジロリと睨むと、子供心にも何だか無

氣味だつたやうな覺がまだ有る。

大抵の人は氣象が眼へ出ると云ふ。祖母が矢張り其だつた。全く眼色(めつき)のやうな氣象で、勝氣で、鋭くて、能く何かに氣の附く、口も八丁手も八丁といふ、一口に言へば男勝り……まあ、さういつた質の人だつたさうな、――私は子供の事で一向夢中だつたが。

生長後親類などの話で聞くと、それといふが幾分か境遇の然らしめた所も有つたらしい――といふのは、早く祖父に死なれて若い時から後家を徹(とほ)して來た。後家といふ者はいつの世でも兎角人に影口言れ勝の、割の惡いものだから、勝氣の祖母はこれが悔しくて堪らない。それで、何の、女でこそあれ、と氣を張る。氣を張て油斷をしなかつたから、一生人に後指を差されるやうな過失はなかつた代り、餘り人に愛しもされずに年を取つて了つて、父の代となつた。

父は祖母とは全(まる)で違つてゐた。如何(どう)して此人の腹に此樣(こん)な人がと怪しまれる程の好人物で、面(かほ)も薩張り似てゐなかつた。大きな、笑ふと目元に小皺の寄る、豐頰(ふつくり)した如何にも愛嬌のある圓顏で、形(なり)も大柄だつたが、何處か圓味が有り、心も其通り角が無かつた。快活で、蟠りがなくて、話が好きで、碁が好きで、暇さへあれば近所を打ち歩き、大きな噓を自慢にする程の罪のない人だつた。祖父が矢張然(やつぱりさ)うであつたと云ふから、大方其氣象を受繼いだのであらう。

父は此樣(こん)な人だし、母は――私の子供の時分の母は、手拭を姉樣冠りにして襷掛けで能くクレクレ働く人だつた。其頃の事を誰に聞いても、皆阿母(おつか)さんは能く辛抱なすつたとばかりで、其他に何も言はぬから、私の記憶に殘る其時分の母は、何時迄經つても矢張り手拭を姉樣冠りにして、

襷掛けで能くクレ〳〵働く人で、格別如何いふ人といふ事もない。

斯ういふ家庭だつたから、自然祖母が一家の實權を握つてゐた。家内中の事一から十迄祖母の方寸に捌かれて、母は下女か何ぞの樣に逐使はれる。父も一向家事には關係しないで、形式的に相談を受ければ、好うがせう、とばかり言つてゐる。然う言つてゐないと、祖母の機嫌が惡い、面倒だ。

母方の伯父で在方で村長をしてゐた人があつた。如何したのだか、祖母とは仲惡で、死後迄餘り好くは言はなかつたが、何かの話の序に、阿母さんもお祖母さんには隨分泣されたものだよ、と私に言つた事がある。成る程折々母が物蔭で泣いてゐると、いつも元氣な父が其時ばかりは困つた顏をして何か密々言つてゐるのを、子供心にも不審に思つた事があつたが、それが伯父の謂ふお祖母さんに泣かされてゐたのだつたかも知れぬ。

兎に角祖母は此通り氣難かし家であつたが、その氣難かし家の、死んだ後迄噂に殘る程の祖母が、如何いふものだか、私に掛ると、から意久地がなかつた。

四

何で祖母が私に掛ると、意久地が無くなるのだか、其は私には分らなかつた。が、兎に角意久地の無くなるのは事實で、評判の氣難かし家が、如何にでも私の思ふ樣になつて了ふ。

まづ何か欲しい物がある。それも無い物ねだりで、有る結構な干菓子は厭で、無い一文菓子が

欲しいなどと言出して、母に強求るが、許されない。祖母に強求る、一寸澁る、首玉へ嚙り付いて、よう〳〵と二三度鼻聲で甘垂れる、と、もう祖母は海鼠の樣になつて、お由――母の名だ――彼樣に言ふもんだから、買つて來てお遣りよ、といふ。祖母の聲掛りだから、母も不承々々起つて雨降でも私の口のお使に番傘傾げて出掛けようとする。斯うなると、流石の父も最う笑つてばかりは居られなくなつて、小言をいふ。私が泣く、祖母の機嫌が惡い。

「此樣小さい者を其樣に苛めて育てゝ、若しか俊坊の樣な事にでもなつたら、如何おしだ？　可哀さうぢやないか。」

といふのが口切で、ボツリ〳〵と始める。俊坊といふのは私の兄で、私も虛弱だつたが、矢張虛弱で、六ツの時偸られたのださうだ。それも急性胃加答兒で偸られたのだと云ふから、事に寄ると祖母が可愛がりごかしに口を愼ませなかつた祟かも知れぬ。併し虛弱な兒は大食させ付ると達者になると言はれて、然うかなと思ふ程の父だから、祖母の矛盾には氣が附かない。矢張有觸れた然う我儘をさせ付けては位の所で切脫けようとする。祖母も其は然う思はぬでもないから、内内自分が無理だと思ふだけに激する、言葉が荒くなる。もう此上憤らせると、又三日も物を言はなかつた擧句、ぷいと家を出て在の親類へ行つた切歸らぬといふ騷も起りかねまじい景色なので、父は默つて了ふ。母も默つて出て行く。と、もう廿分も經つと、私が兩手に豆捩を持つて雀躍して喜ぶ顏を、祖母が、眺めてほく〳〵する事になつて了ふ。

斯うして私の小さいけれど際限の無い慾が、每も祖母を透して遂げられる。それは子供心にも

薄々了解るから、自然家内中で私の一番好なのは祖母で、お祖母さん〳〵と跡を慕ふ。何となく祖母を味方のやうに思つてゐるから、祖母が内に居る時は、私は散々我儘を言つて、悪たれて、仕度三昧を仕散らすが、留守だと、萎靡るのではないが、餘程温順しくなる。

其癖私は祖母を小馬鹿にしてゐた。何となく奥底が見透されるから、祖母が何と言つたつて、些とも可怕くない。

それを又勝氣の祖母が何とも思つてゐない。反て馬鹿にされるのが嬉しいやうに、人が來ると、其話をして、憎い奴でございますと言つて、ほく〳〵してゐる。

兩親も其は同じ事で、散々私に悩まされながら、矢張何とも思つてゐない。唯影でお祖母さんにも困ると、お祖母さんの愚痴を零すばかり。

私は何方へ廻つても、矢張好い兒だ。

五

親馬鹿と一口に言ふけれど、親の馬鹿程有難い物はない。祖母は勿論、兩親とても決して馬鹿ではなかつたが、その馬鹿でなかつた人達が、私の爲には馬鹿になつて呉れた。勿體ないと言はずには居られない。

私に何の取得がある？　親が身の油を絞つて獲た金を、私の教育に惜氣もなく掛けて呉れたのは、私を天晴れ一人前の男に仕立てたいが爲であつたらうけれど、私は今眇たる腰辨當で、浮世

の片影に潜むでゐる。私が生きてゐたとて、世に寸益もなければ、死んだとて、妻子の外に損を受ける者もない。世間から見れば有つても無くても好い餘計な人間だ。財産なり、學問なり、技能なり、何か人より餘計に持つてゐる人は、其餘計に持つてゐる物を挾むで、傲然として空嘯いてゐても、人は皆其足下に平伏する。私のやうに何も無い者は、生活に疲れて路傍に倒れて居ても、誰一人振向いて見ても呉ない。皆素通して匆々と行つて了ふ。偶立止る者が有るかと思へば、熟々視て、金持なら、うゝ、貧乏人だと云ふ、學者なら、うゝ、無學な奴だと云ふ、詩人なら、うゝ、俗物だと云ふ、而して匆々と行つて了ふ。平生尤も親しらしい面をして親友とか何とか云つてゐる人達でも、斯うなると寄つて集つて、手ン手ンに腹散々私の缺點を算へ立てゝ、それで君は斯うなつたんだ、自業自得だ、諦め玉へ〳〵と三度囘向して、彼方向いて匆々と行つて了ふ。私は斯ういふ價値の無い平凡な人間だ。それを二つとない寶のやうに、人に後指を差されて迄も愛して呉れたのは、生れて以來今日迄何萬人となく人に出會つたけれど、其中で唯祖母と父母あるばかりだ。偉い人は之を動物的の愛だとか言つて擯斥されるけれど、平凡な私の身に取つては是程有難い事はない。

若し私の親達に所謂教育が有つたら、斯うはなかつたらう。必ず、動物的の愛なんぞは何處かの隅に竊と藏つて置き、例の靈性の愛とかいふものを擔ぎ出て來て、薄氣味惡い上眼を遣つて、天から振垂つた曖昧な理想の玉を眺めながら、親の權威を笠に被ぬ面をして笠に被て、其處ン處は體裁よく私を或型へ推込まうと企らむだらう。私は子供の天性の儘に、そんなふやけた人間が、

古本なんぞと首引して、道樂半分に拵へた、其癖無暗に窮屈な型なんぞへ入る事を拒むで、隙を見て逃出さうとする、どッこいと取捉まへて厭がる者を無理無體に、シャモを鷄籠へ推込むやうに推込む。私は型の中で出ようと藻掻く。知らん面してゐる。泣いて、喚いて、引掻いて出ようとする。知らん面してゐる。欺して出ようとする。其手に乘らない。百計盡きて、仕方がないと觀念して、性を矯め、情を矯め、生ながら木偶の樣な生氣のない人間になつて了へば、親達は始めて滿足して、漸く善良な傾向が見えて來たと曰ふ。世間の所謂家庭教育といふものは皆是ではないか。私は幸ひにして親達が無教育無理想であつたばかりに、型に推込まれる憂目を免れて、野育ちに育つた。野育ちだから、生來具有の百の缺點を臆面もなく暴け出して、所謂教育ある人達を顰蹙せしめたけれど、其代り子供の時分は、今の樣に矯飾はしなかつた。皆無教育な親達のお蔭だ。難有い事だと思ふ。眞に難有い事だと思ふ。

　しかし內擴がりの外窄まりと昔から能く俗人が云ふ。哲人の深遠な道理よりも、詩人の徹底した見識よりも、平凡な私共の耳には此方が入り易い。不思議な事には、無理想の俗人の言ふ事は皆活きて聞える。

　私が矢張其內擴がりの外窄まりであつた。

六

內ン中の鮑ッ貝、外へ出りや蜆ッ貝、と友達に囃されて、私は悔しがつて能く泣いたッけが、

併し全く其通りであつた。

如何いふものだか、内でお祖母さんが舐るやうにして可愛がつて呉れるが、一向嬉しくない。反て蒼蠅くなつて、出るなと制める袖の下を潜つて外へ駈出す。

しかし一歩門外へ出れば、最う浮世の荒い風が吹く。子供の時分の其は、何處にも有る苛めッ兒といふ奴だ。私の近處にも其が居た。

勘ちやんと云つて、私より二ッ三ッ年上で、獅子ッ鼻の、色の眞黒けな兒だつたが、斯ういふのに限つて亂暴だ。親仁は郵便局の配達か何かで、大酒呑で、阿母はお引摺と來てゐるから、常も鍵裂だらけの着物を着て、踵の切れた冷飯草履を突掛け、片手に貧乏徳利を提げ、子供の癖に尾籠な流行歌を大聲に唱ひながら、飛んだり、跳ねたり、曲駈といふのを遣り〳〵使に行く。始終使にばかり行つても居なかつたらうが、私は勘ちやんの事を憶出すと、何故だか常も其使に行く姿を想出す。

勘ちやんは家では何も貰へぬから、人が何か持つてさへゐれば、屹度欲しがつて、卒直にお呉ンなと云ふ。機嫌好く遣れば好し、厭だと頭振を振ると、顋を突出して、好いよ〳〵と云ふ。薄氣味惡くなつて遣らうとするが、最う受取らない。好いよ、呉れないと云つたね、好いよと、其許りを反覆して行つて了ふ。何となく氣になるが、子供の事だ、遊びに耄けて忘れてゐると、何時の間にか勘ちやんが、使の歸りに何處かで蛇の死んだのを拾つて來て、竊と背後から忍び寄て、卒然ピシヤリと叩き付ける。ワッと泣き聲揚げて此方は逃出す、其後姿を勘ちやんは

白眼で見送つて「樣ア見やがれ！」

私は散々此勘ちやんに苛められた。初こそ悔しがつて武者振り付いても見たが、勘ちやんは喧嘩の名人だ。直と足搦掛けて推倒して置いて、馬乘りに乘つてピシヤ〳〵打つ。私にはお祖母さんが附いてるから、内では親にさへ滅多に打たれた事のない頭だ。その大切にせられてゐる頭を、勘ちやんは遠慮せずにピシヤ〳〵打つ。

一度酷い目に遭つてから、私は勘ちやんが可怕くて〳〵ならなくなつた。勘ちやんが側へ來ると、最う私は恟々して、吳れと言はない中から持つてる物を遣り、勘ちやん、あの、賢ちやんがね、お前の事を泥棒だツて言つてたよと、餘計な事迄告口して、勉めて御機嫌を取つてゐた。斯うしてゐれば大抵は無難だが、それでも時々何の理由もなく、通りすがりに大切の頭をコツリと打つて行くこともある。

外は面白いが、勘ちやんが厭だ。と云つて、内でお祖母さんと睨めツこも詰らない。そこで、お隣のお光ちやんにお向ふのお芳ちやんを呼んで來る。お光ちやんは外齒のお出額で河童のやうな兒だつたけれど、お芳ちやんは色白の鈴を張つたやうな眼で、好兒だつた。私は飯事でお芳ちやんの旦那様になるのが大好だつた。お烟草盆のお芳ちやんが眞面目腐つて、貴方、御飯をお上ンなさいなと云ふ。アイと私が返事をする。アイぢや可笑いわ、ウンといふンだわ、と敎へられて、ぢや、ウンと言つて、可笑くなつて、不覺笑ひ出す。此方が勘ちやんに頭を打られるより餘程面白い。それに女の兒はこましやくれてゐるから、子供でも人の家だと遠慮する。私一人威張つて

ゐられる。間違つて喧嘩になつても、屹度敵手(あひて)が泣く、然うすればお祖母さんが謝罪(あやま)つて呉れる。

女の兒と遊ぶのは無難で面白いが、併しさう毎日も遊びに來て呉れない。すると、私は退屈するから、平地に波瀾を起して、拗(すね)て、じぶくツて、大泣に泣いて、而してお祖母さんに御機嫌を取つて貰ふ。

七

……が、待てよ。何ぼ自然主義だと云つて、斯う如何(どう)もダラ〳〵と書いてゐた日には、三十九年の半生を語るに、三十九年掛るかも知れない。も少し省略(はしよ)らう。

で、唐突ながら、祖母は病死した。

其時の事は今に覺えてゐるが、平常(いつも)の積で何心なく外から歸つて見ると、母が妙な顏をして奧から出て來て、常(いつ)になく小聲で、お前は、まあ、何處へ行ツてゐたい? お祖母さんがお亡(なく)なンなすツたよ、といふ。お亡なンなすツたよが一寸分らなかつたが、死んだのだと聞くと、吃驚(びつくり)すると同時に、急に何だか可怕(おつかな)くなつて來た。無論まだ死ぬといふ事が如何(どん)な事だか能くは分らなかつたが、唯何となく斯う奧の知れぬ眞暗な穴のやうな處へ入る事のやうに思はれて、日頃から可怕(おつかな)がつてゐたのだが、子供も人間だから矛盾を免れない。お祖母さんが死んだのは可怕(おつかな)いが、その可怕い處を見たいやうな氣もする。

で、母が來いと云ふから、跟に隨いて怕々(こはごは)奧へ行つて見ると、父は未だ居る醫者と何か話をし

てゐたが、私の面を見るなり、何處へ行つて居た。もう一足早かつたらなあ……と、何だか甚く殘念がつて、此處へ來てお祖母さんにお辭儀しろといふ。

　改まつてお祖母さんにお辭儀しろと言はれた事は滅多に無いので、死ぬと變な事をするものだ、と思つて、おツかな悚り側へ行くと、小屛風を逆にした影に祖母が寢てゐて、面に白い布片が掛けてある。父が徐かに其を取除けると、眼を閉ぢて少し口を開いた眠つたやうな祖母の面が見える……一目見ると厭な色だと思つた。長いこと煩つてゐたから、窶れた顏は看慣れてゐたが、此樣な色になつてゐたのを見た事がない。厭に白けて、光澤がなくて、死の影に曇つてゐるから、顏中が何處となく薄暗い。もう家のお祖母さんでは無いやうな氣がする。といつて、餘處のお祖母さんでもないが、何だか其處に薄氣味の惡い區劃が出來て、此方は明るくて暖かだが、向ふは薄暗くて冷たいやうで、何がなしに怕かつた。

「お辭儀をしないか。」

と父に催促されて、私は莞爾々々となつた。何故だか知らんが、莞爾々々となつて、ドサンと膝を突いて、遠方からお辭儀して、急いで次の間へ逃げて來て、矢張莞爾々々してゐた。

　其中に親類の人達が集まつて來る、お寺から坊さんが來る、其晩はお通夜で、翌日は葬式と、何だか家内が混雜するのに、觀る物聞く事皆珍らしいので、私は其に紛れて何とも思はなかつたが、軈て葬式が濟むで寺から歸つて來ると、手傳の人も一人歸り二人歸りして、跡は又家の者ばかりになる。薄暗いランプの蔭でト面を合せて見ると、お祖母さんが一人足りない。あゝ、お祖

母さんは先刻(さつき)穴へ入つて了つたが、もう何時迄待ても歸つて來ぬのだと思ふと、急に私は悲しくなつてシク／＼泣出した。

私の泣くのを見て母も泣いた。父も到頭泣いた。親子三人向合つて、默つて暫く泣いてゐた。

八

祖母に死別れて悲しかつたが、其頃はまだ子供だつたから、十分に人間死別の悲しみを汲分け得なかつた。その悲しみの底を割つたと思はれるのは、其後兩親に死なれた時である。

去る者日々に疎しとは一わたりの道理で、私のやうな浮世の落伍者は反て年と共に死んだ親を慕ふ心が深く、厚く、濃かになるやうだ。

去年の事だ。私は久振で展墓の爲歸省した。寺の在る處は舊(もと)は淋しい町端れで、門前の芋畠を吹く風も悲しい程だつたが、今は可なりの町並になつて居て、昔能く憩んだ事のある門脇の掛茶屋は影も形も無くなり、其跡が Barber's(バーバース) Shop(ショップ) と白ペンキの奇拔な看板を揚げた理髪店になつてゐる。

が、寺は其反對に荒れ果てゝ、門は左程でもなかつたが、突當りの本堂も、其側の庫裏も、多年の風雨に曝れて、處々壁が落ち、下地の骨が露はれ、屋根には名も知れぬ草が生えて、甚(ひど)く淋れてゐた。私は臺所口で寺男が內職に賣つてゐる樒を四五本買つて、掛戸へ掛つて、釣瓶(つるべ)繩(なは)が腐つて切れさうになつてゐるのを心配しながら、漸く水を汲上げた。手桶片手に、樒を提(さ)げて、本

堂をグルリと廻つて、後の墓地へ來て見ると、新佛が有つたと見えて、地尻に高い杉の木の下に、白張の提燈が二張ハタ〳〵と風に搖いでゐる。流石に微に覺えが有るから、確に彼の邊だなと見當を附けて置いて、さて昨夜の雨でぬかる墓場道を、蹴揚の泥を厭ひ〳〵、度々下駄を取られさうになりながら、それでも迷はずに先祖代々の墓の前へ出た。

祠堂金も納めてある筈、僅ばかりでも折々の附け屆も怠らなかつた積だのに、是はまた如何な事！　何時掃除した事やら、墓石は一杯に青苔が蒸して、石塔も白い痂のやうな物に蔽はれ、天邊に二處三處ベツトリと白い鳥の糞が附てゐる。勿論木葉は堆く積つて、雜草も生えてゐたが、花立の竹筒は何處へ行つた事やら、影さへ見えなかつた。

私は掃除する方角もなく、之に對して暫く悵然としてゐた。

祖母の死後數年、父母も其跡を追うて此墓の下に埋まつてから旣に幾星霜を經てゐる。墓石は戒名も讀め難る程苔蒸して、默然として何も語らぬけれど、今來つて面りに之に對すれば、何となく生きた人と面を合せたやうな感がある。懷かしい人達が未だ達者でゐた頃の事が、夫から夫と止度なく想出されて、祖母が緣先に圓くなつて日向ぼツこをしてゐる格構、父が眼も鼻も一つにして大な嚔を爲ようとする面相、母が襷掛で張物をしてゐる姿などが、顯然と目の前に浮ぶ。

颯と風が吹いて通る、木の葉がざわ〳〵と騷ぐ。木の葉の騷ぐのとは思ひながら、澄むだ耳には、聽き覺えのある皺嗄れた聲や、快活な高聲や、低い纖弱い聲が紛々と絡み合つて、何やら切りに慌しく話してゐるやうに思はれる。一しきりして礑と其が止むと、跡は寂然となる。

と、私の心も寂然となる。その寂然となつた心の底から、ふと戀しいが勃々と湧いて出て、私は我知らず泪含むだ。あゝ、成らう事なら、此儘此墓の下へ入つて、もう浮世へは戻り度ないと思つた。

九

先刻舊友の一人が尋ねて來た。此人は今でも文壇に籍を置いてる人で、人の面さへ見れば、君ねえ、ナチユラリーズムがねえと、グヅリ〳〵を始める人だ。

神經衰弱を標榜してゐる人だから耐らない。來ると、ニチヤ〳〵と飴を食つてるやうな辯で、直と自分の噂を始める。やあ、僕の理想は多角形で光澤があるの、やあ、僕の神經は錐の樣に尖がつて來たから、是で一つ神祕の門を突ついて見る積だのと、其樣事ばかり言ふ。でなきや、文壇の噂で人の全盛に修羅を燃し、何かしらケチを附けたがつて、君、何某のと、近頃評判の作家の名を言つて、姦通一件を聞いたかといふ。また始まつたと、うんざりしながら、いやそんな事僕は知らんと、ぶつきらぼうに言ふけれど、文士だから人の腹なんぞは分らない。人が知らんといふのに反つて調子づいて、祕密の話だよ、此場限りだよと、私が十人目の聽手かも知れぬ癖に、惡念を推して、その何某が友の何某の妻と姦通してゐる話を始める。何とかゞ如何とかして、掃溜の隅で如何とかしてゐる處を、犬に吠付かれて蒼くなつて逃げたとか、何とか、その醜穢なること到底筆には上せられぬ。それも唯其丈の話で、夫だから如何といふ事もない。君、モーパッ

サンの捉まへどこだね、といふ位が落だ。

これで最う歸るかと思ふと、なか〳〵以て！　君ねえ、僕はねえと、また僕の事になつて、其中に世間の俗物共を眼中に措かないで、一つ思ふ存分な所を書いて見ようと思ふといふ様な事を饒舌つて、文士で一生貧乏暮しをするのだもの、ねえ、君、責て後世にでも名を殘さなきやアと、堪らない事をいふ。プスリ〳〵と燻るやうな氣焔を吐いて、散々人を厭がらせた揚句に、僕は君に萬斛の同情を寄せてゐる、今日は一つ忠告を試みようと思ふ、といふから、何を言ふかと思ふと、「君も然う所帶染みて了はずと、一つ奮發して、何か後世へ殘し玉へ。」

こんなのは文壇でも流石に屑の方であらう。しかし不幸にして私の友人は大抵屑ばかりだ。こんな人のこんな風袋ばかり大きくても、割れば中から鮨の天神様が出て來るガラ〳〵のやうな、見掛倒しの、内容に乏しい、信切な忠告なんぞは、私は些とも聞き度ない。私の願は親の口から今一度、薄着して風邪をお引きでない、お腹が減いたら御飯にせうかと、詰らん、降らん、意味の無い事を聞きたいのだが……

その親達は最う此世に居ない。若し未だ生きてゐたら、私は……孝行をしたい時には親はなしと、又しても俗物は旨い事を言ふ。あゝ、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、憶出すのは親の事……それにポチの事だ。

十

ポチは言ふ迄もなく犬だ。

來年は四十だといふ、もう鬢に大分白髪もみえる、汚ない髭の親仁の私が、親に繼いでは犬の事を憶ひ出すなんぞと、餘り馬鹿氣てゐてお話にならぬ——と、被仰るお方が有るかも知れんが、私に取つては、ポチは犬だが……犬以上だ。犬以上で、一寸まあ、弟……でもない、弟以上だ。何と言つたものか？……さうだ、命だ、第二の命だ。恥を言はねば理が聞こえぬといふから、私は理を聞かせる爲に敢て恥を言ふが、ポチは全く私の第二の命であつた。其癖初めを言へば、欲しくて貰つた犬ではない、止むことを得ず……いや、矢張あれが天から授かつたと云ふのかも知れぬ。

忘れもせぬ、祖母の亡なつた翌々年の、春雨のしと〳〵と降る薄ら寒い或夜の事であつた。宵惑の私は例の通り宵の口から寢て了つて、いつ兩親は寢に就いた事やら、一向知らなかつたが、ふと目を覺すと、有明が枕元を朦朧と照して、四邊は微暗く寂然としてゐる中で、耳元近くに妙な音がする。ゴウといふかとすれば、スウと、或は高く或は低く、單調ながら拍子を取つて、宛然大鋸で大丸太を挽割るやうな音だ。何だらうと思つて耳を澄してゐると、時々其音が自分と自分の單調に饜いたやうに、忽ちガアと慣れた調子を破り、凄じい、障子の紙の共鳴りのする程の音を立てゝ、勢込んで何處かへ行きさうにして、忽ち物に行當つたやうに、礑と止む。と、しばらく闃寂となる——その側から、直ぐ又穩かにスウ〳〵といふ音が遠方に聞え出して、其が次第に近くなり、荒くなり、又耳元で根氣よくゴウ、スウ、ゴウ、スウと鳴る。

私は夜中に滅多に目を覺した事が無いから、初は甚く吃驚したが、能く研究して見ると、なに、父の鼾なので、漸と安心して、其儘再び眠らうとしたが、壯なゴウ〱スウ〱が耳に附いて中中眠付れない。仕方がないから、聞える儘に其音に聽入つてゐると、思做しで種々に聞える。或は遠雷のやうに聞え、或は浪の音のやうでもあり、又は火吹達磨が火を吹いてるやうにも思はれれば、ゴロタ道を荷馬車が通る音のやうにも思はれる。と、ふと晝間見た繪本の天狗が酒宴を開いてゐる所を憶出して、阿爺さんが天狗になつてお囃子を行つてるのぢやないかと思ふと、急に何だか薄氣味惡くなつて來て、私は頭からスポッと夜着を冠つて小さくなつた。けれども、天狗のお囃子は夜着の襟から潛り込んで來て、耳元に纏り付いて離れない。私は凝然と固くなつて其に耳を澄ましてゐると、何時からとなくお囃子の手が複雜で來て、合の手に遠くで幽かにキヤンキヤンといふやうな音が聞える。ゴウといふ凄じい音の時には、それに消壓されて聞えぬが、スウといふ溜息のやうな音になると、其が判然と手に取るやうに聞える。不思議に思つて益耳を澄ましてゐると、合の手のキヤン〱が次第に大きく、高くなつて、遂には鼾の中を脫け出し、其とは離ればなれに、確に門前に聞える。

かうなつて見ると、疑もなく小狗の啼き聲だ。時々咽喉でも締られるやうに、消魂しく啃々と啼き立てる其の聲尻が、軈てかぼそく悲し氣になつて、滅入るやうに遠い〱處へ消えて行く——かとすれば、忽ち又近くで堪へ切れぬやうに啼き出して、クン〱と鼻を鳴らすやうな時もあり、ギヤオと欠びをするやうな時もある。

十一

私は元來動物好きで、就中犬は大好だから、近所の犬は大抵馴染だ。けれども、此様纖弱い可愛げな聲で啼くのは一疋も無い筈だから、不思議に思つて、窃と夜着の中から首を出すと、

「如何したの？　寢られないのかえ？」

と、母が寢反りを打つて此方を向いた。私は此返答は差措いて、

「あれは白ぢやないねえ、阿母さん？　最と小さい狗の聲だねえ？　如何したんだらう？」

「棄狗さ。」

「棄狗ツて何？」

「棄狗ツて……誰かゞ棄てツたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄てツたンだらう？」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人が狗を棄てツたと、私は二三度反覆して見たが、分らない。

「如何して棄てツたンだらう？」

蒼蠅よ、などといふ母ではない。何處迄も相手になつて、其意味を說明して吳れて、もう晩いから默つてお寢と優しく言つて、又彼方向いて了つた。

私も亦夜着を被つた。狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるに隨れて、父の鼾が又蒼蠅く耳に附く。寢られぬ儘に、私は夜着の中で今聽いた母の説明を反覆し〳〵味つて見た。まづ何處かの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。小ぽけなむく〳〵したのが重なり合つて、首を擡げて、ミイ〳〵と乳房を探してゐる所へ、親犬が餘處から歸つて來て、其側へドサリと横になり、片端から抱へ込んでベロ〳〵舐ると、小さいから舌の先で他愛もなくコロ〳〵と轉がされる。轉がされては大騷ぎして起返り、又ヨチ〳〵と這ひ寄つて、ポッチリと黑い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、狼狽てチウと吸付いて、小さな兩手で揉み立て〳〵吸出すと、甘い溫かな乳汁が滾々と出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずお甘しい。と、腋の下からまだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込むで來る。奪られまいとして、產毛の生えた腕を突張り大騷ぎ行つてみるが、到頭奪られて了ひ、又其處らを尋ねて、他の乳首に吸付く。其中にお腹も滿くなり、親の肌で身體も溫まつて、溶けさうな好い心持になり、不覺昏々となると、含むだ乳首が脱けさうになる。夢心地にも狼狽て又吸付いて、一しきり吸立てるが、直に又他愛なく昏々となつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない…… 其時忽ち暗黑から、茸々と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がヌッと出て、正體なく寢入つてゐる所を無手と引摑み、宙に釣す。驚いて目をポッチリ明き、いたいげな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つて藻搔く中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息氣が塞りさうだから、出ようとするが、出られない。久しく藻搔いて居る中に、ふ

と足掻が自由になる。と、領元を撮まれて、高い〳〵處からドサリと落された。うろ〳〵として其處らを視廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で、誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打れて見る間に濡しよぼたれ、怕ろしく寒くなる。身慄ひ一つして、クン〳〵と親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、ヨチ〳〵と這出し、雨の夜中を唯一人、温かな親の乳房を慕つて悲し氣に啼廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へか彷徨つて行つたやうだつたが、其が何時か又戻つて來て、何處を如何潜り込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

十二

「阿母さん〳〵、門の中へ入つて來たやうだよ。」
と、私が何だか居堪らないやうな氣になつて又母に言掛けると、母は氣の無さゝうな聲で、
「さうだね。」
「出て見ようか！」
「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」
「だつてえ……　あら、彼様に啼てる……」
と、折柄絶入るやうに啼入る狗の聲に、私は我知らず勃然起上つたが、何だか一人では可怕いやうな氣がして、
「よう、阿母さん、行つて見ようよう！」

「本當に仕様がない兒だねえ。」

と、口小言を言ひ〲、母も澁々起きて、雪洞を點けて起上つたから、私も其後に隨いて、玄關——と云つてもツイ次の間だが、玄關へ出た。

母が履脫へ降りて格子戸の掛金を外し、ガラリと雨戸を繰ると、颯と夜風が吹込んで、雪洞の火がチラ〲と靡く。其時小さな鞠のやうな物が衝と軒下を飛退いたやうだつたが、軈て雪洞の火先が立直つて、一道の光がサッと戸外の暗黒を破り、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照出した所を見ると、ツイ其處に生後まだ一ヶ月も經たぬ、むく〲と肥つた、赤ちやけた狗兒が、小指程の尻尾を千切れさうに掉立つて、此方を瞻上げてゐる。形體は私が寢てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた割合に大きい耳から雫を滴し、ぽつちりと兩つの眼を青貝のやうに列べて光らせてゐる。

「おや〲、まあ、可愛らしい！……」と、母も不覺言つて了つた。

況や私は犬好だ。凝として視ては居られない。母の袖の下から首を出して、チョッ〲と呼んで見た。

と、左程畏れた樣子もなく、チョコ〲と側へ來て、流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でゝやる私の手を、下からグイ〲推上げるやうにして、ベロ〲と舐廻し、手を呉れる積なのか、頻に圓い前足を擧げてバタ〲やつてゐたが、果は和りと痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて〲堪まらない。母の面を瞻上げながら、少し鼻聲を出し掛けて、

「阿母さん、何か遣つて。」
「遣るも好いけど、居附いて了ふと仕方がないねえ。」
と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて來て呉れた。

　早速履脱へ引入れて之を當がふと、小狗は一寸香を嗅いで、直ぐ甘さうに先づピチヤ〳〵と舐出したが、汁が鼻孔へ入ると見えて、時々クシン〳〵と小さな嚔をする。忽ち汁を舐盡して、今度は飯に掛つた。他に爭ふ兄弟もないのに、切に小言を言ひながら、ガツ〳〵と喫べ出したが、飯は未だ食慣れぬかして、兎角上顎に引附く。首を掉つて見るが、其樣な事では中々取れない。果は前足で口の端を引掻くやうな眞似をして、大藻掻きに藻掻く。

　此隙に私は母と談判を始めて、今晩一晩泊めて遣つてと、雪洞を持つた手に振垂る。母は一寸澁つたが、もう斯うなつては仕方がない。阿爺さんに叱られるけれど、と言ひながら、詰り棧俵法師を捜して來て、履脱の隅に敷いて遣つた——は好かつたが、其晩一晩啼通されて、私は些とも知らなんだが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

十三

　犬嫌の父は泊めた其夜を啼明されると、うんざりして了つて、翌日は是非逐出すと言出したから、私は小狗を抱いて逃廻つて、如何しても放さなかつた。父は困つた顏をしてゐたが、併し其

も一時の事で、其中に小狗も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなる。と、逐出す筈の者に、何時しかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと父までが一緒に搜すやうになつて了つた。

父が斯うなつたのも、無論ポチを愛したからではない。唯私に覊されたのだ。私とてもポチを手放し得なかつたのは、强ちポチを愛したからではない。愛する愛さんは扨置いて、私は唯可哀さうだつたのだ。親の乳房に縋つてゐる所を、無理に無慈悲な人間の手に引離されて、暗い浮世へ突放された犬の子の運命が、子供心にも如何にも果敢なく情けないやうに思はれて、手放すに忍びなかつたのだ。

此忍びぬ心と、その忍びぬ心を破るに忍びぬ心と、二つの忍びぬ心が搦み合つた處に、ポチは旨く引掛つて、辛くも棒石塊の危ない浮世に彷徨ふ憂目を免れた。で、どうせ、それは、蜘蛛の巣だらけでは有つたらうけれど、兎も角も雨露を凌ぐに足る緣の下の菰の上で、甘くもなくとも朝夕二度の汁掛け飯に事缺かず、まづ無事に暢びりと育つた。

育つに隨れて、丸々と肥つて可愛らしかつたのが、身長に幅を取られて、ヒヨロ長くなり、面も甚くトギスになつて、一寸狐のやうな犬になつて了つた。前足を突張つて、尻をもつたてゝ、弓のやうに反つて伸をしながら、大きな口をアングリ開いて欠びをする所なぞは、誰が眼にも餘まり見とも好くもなかつたから、父は始終厭な犬だ〳〵と言つて私を厭がらせたが、私はそんな犬振りで情を二三にするやうな、そんな輕薄な心は聊かも無い。固より玩弄物にする氣で飼つたのでないから、厭な犬だと言はれる程、尚可愛ゆい。

「ねえ、阿母さん、此様な犬は何處へ行つたつて可愛がられやしないやねえ。だから家で可愛がつて遣るんだねえ。」

と、いつも苦笑する母を無理に味方にして、調戯ふ父と爭つた。

犬好は犬が知る。私の此心はポチにも自然と感通してゐたらしい。其證據には犬嫌ひの父が呼んでも、ほんの一寸お愛想に尻尾を掉るばかりで、振向きもせんで行つて了ふ事がある。母が呼ぶと、不斷食事の世話になる人だから、又何か貰へるかと思つて眼を輝かして飛んで來る、而して母の手中に其らしい物があれば、兎のやうに跳ねて喜ぶ。が、しかし、唯其丈の事で、其時のポチは矢張犬に違ひない。

その矢張犬に違ひないポチが、私に對ふと……犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか？……何方だか其は分らんが、兎に角互の熱情熱愛に、人畜の差別を撥無して、渾然として一如となる。

一如となる。だから、今でも時々私は犬と一緒になつて此様な事を思ふ、あゝ、儘になるなら人間の面の見えぬ處へ行つて、飯を食つて生きたいと。

犬も屹度然う思ふに違ひないと思ふ。

十四

私は生來の朝寢坊だから、毎朝二度三度覺されても、中々起きない。優しくしてゐては際限が

ないので、母が最後には夜着を剝ぐ。これで流石の朝寢坊も不承々々に床を離れるが、しかし大不平だ。額で母を睨めて、津蟹が泡を吐くやうに、沸々言つてゐる。ポチは朝起だから、もう其時分には疾くに朝飯も濟むで、一切り遊んだ所だが、私の聲を聽き付けると、何處に居ても一目散に飛んで來る。

これで私の機嫌も直る。急に現金に莞爾々々となつて、急いで庭へ降りる所を、ポチが透さず泥足で飛付く。細い人參程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立つて、嬉しさうに面を瞻上る。視下す。目と目と直たりと合ふ。堪まらなくなつて私が横抱に引ッ抱く。ポチは抱かれながら、身を藻搔いて大暴れに暴れ、私の手を舐め、胸を舐め、顋を舐め、頰を舐め、舐めても〳〵舐め足らないで、惡くすると、口まで舐める。父が面を顰めて汚い〳〵と曰ふ。成程、考へて見れば、汚いやうではあるけれども……しかし、私は嬉しい、止められない。如何して是が止められるもんか！　私が何も好い物を持つてゐるぢやなし、ポチも其は承知で爲る事だ。利害の念を離れて居るのだ、唯懷かしいといふ刹那の心になつて居るのだ。毎朝これでは着物が堪らないと、母は其を零すけれど、着物なんぞの汚れを厭つて、ポチの此志を無にする事が出來た話だか、話でないか、其處を一つ考へて貰ひたい。

理窟は扨置いて、この面舐めの一儀が濟むと、ポチも漸と是で氣が濟むだといふ形で、また庭先をうろ〳〵し出して、緣の下なぞを覗いて見る。と、其處に草鞋蟲の一杯依附つた古草履の片足か何ぞが有る。好い物を看附けたと言ひさうな面をして、其を咥へ出して來て、首を一つ掉る

と、草履は横飛にポンと飛ぶ。透さず追蒐けて行つて、又咥へてポンと抛る。其様な他愛もない事をして、活潑に元氣よく遊ぶ。

其隙に私は面を洗ふ、飯を食ふ。それが濟むと、今度は學校へ行く段取になるのだが、此時が一日中で一番私の苦痛の時だ。ポチが跟を追ふ。うツかり出ようものなら、何處迄も〳〵隨いて來て、逐つたつて如何したつて歸らない。こツそり出ようとしても、出掛ける時刻をチヤンと知つて居て、其時分になると、何時の間にか玄關先へ廻つて待つてゐる。仕方がないから、最終には取捉まへて否應なしに格子戸の内へ入れて置いては出るやうにしてゐたが、然うすると前足で格子を引掻いて、悲しい〳〵血を吐きさうな啼聲を立てゝ後を慕ひ、姿が見えなくなつても啼止まない。私もそれは同じ想だ。泣出しさうな面をして、バタ〳〵と驅出し、聲の聞えない處まで來て、漸くホツとして、普通の步調になる。而して常も心の中で反覆し〳〵此樣な事を思ふ、

「僕が居ないと淋しいもんだから、それで彼樣に跟を追ふンだ。可哀さうだなあ……僕あ學校なんぞへ行きたか無いンだけど……行かないと、阿父さんがポチを棄てツ了ふツて言ふもんだから、それでシヨウがないから行くンだけども……」

十五

ジヤン〳〵と放課の鐘が鳴る。今迄靜かだつた校舍内が俄に騷がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後して慌だしくパツ〳〵と開く。と、その狹い口から、物の眞黒な塊りがドツと廊下へ

吐出され、崩れてばら／＼の子供になり、我勝に玄關脇の昇降口を目蒐けて駈出しながら、口々に何だか喚く。只もう校舍を撼つてワーツといふ聲の中に、無數の圓い顏が默つて大きな口を開いて躍つてゐるやうで、何を喚いてゐるのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸込まれて、此處で又紛々と入亂れ重なり合つて、腋の下から才槌頭が偶然と出たり、外齒へ肱が打着かつたり、靴の踵が生憎と霜燒の足を踏むだりして、上を下へと揑返した揚句に、ワツと門外へ押出して、東西へ散々になる。

仲善二人肩へ手を掛合つて行く前に、辨當箱をポンと抛り上げてはチヨイと受けて行く頑童がある。其隣は往來の石塊を蹴飛ばし／＼行く。誰だか、後刻で遊びに行くよ、と喚く。蝗を取りに行かないか、といふ聲もする。君々と呼ぶ背後で、馬鹿野郎と誰かゞ誰かを罵る。あ、痛たツ、何でい、わーい、といふ聲が諤然と入違つて、友達は皆道草を喰つてゐる中を、私一人は駈脫けるやうにして側視もせずに切々と歸つて來る。

家の横町の角迄來て擽たいやうな心持になつて、竊と其方角を觀る。果してポチが門前へ迎へに出てゐる。私を看附るや、逸散に飛んで來て、飛付く、舐める。何だか「兄さん！」と言つたやうな氣がする。若し本包に、辨當箱に、草履袋で兩手が塞がつてゐなかつたら、私は此時ポチを捉まへて何を行つたか分らないが、其が有るばかりで、如何する事も出來ない。據どころなくほた／＼しながら頭を撫でゝ遣るだけで不承して、又歩き出す。と、ポチも忽ち身を曲らせて、横飛にヒヨイと飛んで駈出すかと思ふと、立止つて、私の面を看て滑稽た眼色をする。追付くと、

又逃げて又其眼色をする。かうして巫山戯ながら一緒に歸る。

玄關から大きな聲で、「只今！」といひながら、内へ駈込んで、卒然本包を其處へ抛り出し、慌てゝ辨當箱を開けて、今日のお菓の殘り——と稱して、實は喫べたかつたのを我慢して、半分殘して來た其物をポチに遣る。其れでも足らないで、お八ッにお煎を三枚貰つたのを、責つて五枚にして貰つて、二枚は喫べて、三枚は又ポチに遣る。

夫から庭で一しきりポチと遊ぶと、母が屹度お溫習をお爲といふ。このお溫習程私の嫌ひな事はなかつたが、之をしないと、直ポチを棄ると言はれるのが辛いので、澁々内へ入つて、形の如く本を取出し、少し許おんによご〱と行る。それでお終だ。餘り早いねと母がいふのを、空耳潰して、衝と外へ出て、ポチ來い、ポチ來いと呼びながら、近くの原へ一緒に遊びに行く。

これが私の日課で、ポチでなければ夜も日も明けなかつた。

十六

ポチは日増しにメキ〱と大きくなる。大きくはなるけれど、まだ一向に孩兒で、垣の根方に大きな穴を掘つて見たり、下駄を片足門外へ啣へ出したり、其樣惡戯ばかりして喜んでゐる。

それに非常に人懷こくて、門前を通掛りの、私のやうな犬好が、氣紛れにチョッ〱と呼んでも、直ともう尾を掉つて飛んで行く。況して家へ來た人だと、誰彼の見界はない、皆に喜んで飛付く。初ての人は驚いて、子供なんぞは泣出すのもある。すると、ポチは吃驚して其面を視てゐる。

人でさへ是だから同類は尚ほ戀しがる。犬が外を通りさへすれば屹度飛んで出る。喧嘩するのかと、私がハラ〳〵すれば、喧嘩はしない。唯壯に尻尾を掉つて鼻を嗅合ふ。大抵の犬は相手は子供だといふ面をして、其儘匆々と行かうとする。どつこいとポチが追蒐けて巫山戯かゝる。蒼蠅いと言はぬばかりに、先の犬は齒を剝いて叱る。すると、ポチは驚いて耳を伏せて逃げて來る。

ポチは此樣な無邪氣な犬であつたから、友達は直出來た。

友達といふのは黑と白との二匹で、いづれもポチよりは三ツ四ツも年上であつた。歷とした家の飼ひ犬でありながら、品性の甚だ下劣の奴等で、毎日々々朝から晩まで近所の掃溜を簽り歩き、二度の食事の外の間食ばかり貪つてゐる。以前から私の家の掃溜へも能く立廻つて來て、馴染の犬共ではあるけれど、ポチを飼ふやうになつてからは、尚ほ頻繁に立廻つて來る。ポチの喫剩しを食ひに來るので。

ポチは大樣だから、餘處の犬が自分の食器へ首を突込んだとて、怒らない。默つて快く食はせて置く。が、他の食ふのを見て自分も食氣附く時がある。其樣な時には例の無邪氣で、うツかり側へ行つて一緒に首を突込まうとする。無論先の犬は、馳走になつてゐる身分を忘れて、大に怒つて叱付ける。すると、ポチは驚いて飛退いて、不思議さうに小首を傾げて、其ガツ〳〵と食ふのを默つて見てゐる。

父は馬鹿だと言ふけれど、馬鹿氣て見える程無邪氣なのが私は可愛ゆい。尤も後には惡友の惡感化を受けて、友達と一緒に近所の掃溜へ首を突込み、鮭の頭を舐つたり、通掛りの知らん犬と

喧嘩したり、屑拾ひの風體を怪しむで押取圍んで吠付いたりした事も無いではないが、是れは皆友達の見やう見眞似に其尻馬に騎つて、譯も分らずに唯騒ぐので、ポチに些つとも惡意はない。であるから、獨りの時には、矢張元の無邪氣な人懐こい犬で、滑稽た面をして他愛のない事ばかりして遊んでゐる。惟ふに、私等親子の愛しみを受けて、曾て痛い目に遇つた事なく、暢氣に安泰に育つたから、それで此様に無邪氣であつたのだらうが、あゝ、想出しても無念でならぬ。何故私はポチを躾けて、人を見たら皆惡魔と思ひ、一生世間を睨め付けては居させなかつたらう？憖じ可愛がつて育てた爲に、ポチは此様に無邪氣な犬になり、無邪氣な犬であつた爲に、遂に残忍な刻薄な人間の手に掛つて、彼様な非業の死を遂げたのだ。

十七

或日の事。卑しい事を言ふやうだが、其日の辨當の菜は母の手製の鰹節でんぶで、私も好だが、ポチの大好きな物だつたから、我慢して半分以上殘したのが、チヤンと辨當箱に入つてゐる。早く歸つてこれが喫させたかつたので、待憧れた放課の鐘が鳴るや、大急ぎで學校の門を出て、友達は例の通り皆道草を喰つてゐる中を、私一人は切々と歸つて來ると、俄に行手がワツと騒がしくなつて、先へ行く兒が皆雪崩れて、ドツと道端の杉垣へ片寄つたから、驚いてヒヨイと向ふを見ると、ツイ四五間先を荷車が來る。瞥と見たばかりでは何の車とも分らなかつた。何でも可なり大きな箱車で、上から菰を被せてあつたやうだつたが、其を若い土方風の草鞋穿の男が、餘り

重さうにもなく、匆々と引いて來る。車に引添うてまだ一人、四十許りの、四角な面の、茸々と髭の生えた、人相の惡い、矢張草鞋穿の土方風の男が、古ぼけた茶だか鼠だか分らなくなつた、塵埃だらけの鉢卷もない帽子を阿彌陀に冠つて、手ぶらで何だか饒舌りながら來る。

道端の子供等は皆好奇の目を圓くして、此怪し氣な車を見迎へ見送つて、何を言ふのか、口々に譟然と喚いてゐる中から、忽ち一段際立つて甲高な、「犬殺しだい／＼！」といふ叫聲が其處此處から起る。と聞くより、私はハッとした。全身の血の通ひが急に一時に止つたやうな氣がして、襟元から冷りとする、足が竦む……と、忽ち心臟が破裂せむばかりに皷動し出す。「ポチは？……」といふ疑問が蟠つたやうな頭の中で、ちらりと電光のやうに閃いて又暗中に沒する時、ガタ／＼と車が前を通る。

後で聞けば、菰の下から犬の尻尾とか足とかゞ見えてゐたといふけれど、私が其時佶と目を据ゑて視たのでは、唯車が躍つて菰が魂の有るやうにゆさ／＼と搖るのが見えたばかりで、他には何も見えなかつた。或は最う目も霞むでゐたのかも知れぬ。

「おツそろしい餓鬼だなあ！　まだ彼樣に出て來やがら……」

と太い焼けたやうな野良聲で、――確に年上の奴に違ひないが、然う言ふのが聞えた。

ガタンと一つ小石に躍つて、車は行過ぎて了ふ。

跡は兩側の子供が又續々と動き出し、四邊が大黑帽に飛白の衣服で紛々となる中で、私一人は佇立つたまゝ、茫然として轅棒の先で子供の波を押分けて行くやうに見える車の影を見送つてゐ

た。

と、誰だか私の側へ來て、何か言ふ。顏は見覺えのある家の近所の何とかいふ兒だが、言つてる事が分らない。私は默つて其面を視たばかりで、又竊と車の行つた方角を振向いて見ると、最う車は先の横町を曲つたと見えて、此方を向いて來る澤山の子供の顏が見えるばかりだ。

「ねえ、君、君ン所のポチも殺されたかも知れないぜ。」

といふ聲が此時ふと耳に入つて、私はハッと我に反ると、

「嘘だい！　殺されるもんか！　札が附いてるもの……」

と狼狽て打消てから、始めて木村の賢ちやんといふ兒と話をしてゐる事が分つた。

「やあ……札が附いてたつて、殺されますから。へえ。僕ン所の阿爺さんが……」

と賢ちやんが言掛けると、仲善の友の言ふ事だが、私は何だか急に口惜しくなつて、赫と急込んで、

「何でい！　大丈夫だい!!……」

と怒鳴り付けた。賢ちやんが吃驚して眼を圓くした時、私は卒然バタ〳〵と駈出し、前へ行く兒にトンと衝當る。何しやがるンだいと、其兒に突飛されて、又誰だかに衝當る。二三度彼方此方で小突かれて、蹌踉として、危ふかつたのを辛と踏耐へるや、後をも見ずに逸散に宙を飛で家へ歸つた。

十八

門は明放し、草履は飛び〳〵に脫棄てゝ、片足が裏返しになつたのも知らず、「阿母さん〳〵！」と卒然內へ喚き込んだが、母の姿は見えないで、臺所で返事がする。誰だか來て居るやうで、話聲がしてゐるけれど、其樣な事に頓着しては居られない。學校道具を座敷の中央へ抛り出して置いて臺所へ飛んで行くなり、

「阿母さん！……ポチは？……」

と喘ぎ〳〵まづ聞いてみた。

母は默つて此方を向いた。常は滅入つたやうな蒼い面をしてゐる人だつたが、其時此方を向いた顏を見ると、微と紅くなつて、眼に潤みを持ち、どうも尋常の顏色でない。私は急に何か物に行當つたやうにうろ〳〵して、

「殺されたのかい？……」

と凝と母の面を視た時には、氣息が塞りさうだつた。

母は一寸躊躇つたやうだつたが、思切つて投出すやうに、

「殺されたとさ……」

逸散に駈て來て、ドカッと深い穴へ落ちたら、彼樣な氣がするだらうと思ふ。私は然う聞くと、ハッと內へ氣息を引いた。と、張詰めて破裂れさうになつてゐた氣がサッと退いて、何だか奥深い穴のやうな處へ滅入つて行くやうで、四邊が濛と暗くなると、母の顏が見えなくなつた……

「炭屋さんが見て來なすッたンだッてさ。」

といふ聲がふと耳に入ると、クワッとまた其處らが明るくなつて眼の前に丸髷が見える。母は又彼方向いて了つたのだ。

「ぢや、木村さん處の前で殺されたんですね？」と母の聲がいふ。

「へえ、」といふ者がある。機械的に其方へ面を向けると、腰障子の蔭に、舊い馴染の炭屋の爺やの、小鼻の脇に大きな黒子のある、皺だらけの面が見えて、前齒の二本脱けた間から、チョコチョコ舌を出して饒舌つてゐる聲が聞える。「丁度あの木村さんの前ン處なんで。手前は初めは何だと思ひました。棒を背後へ匿してましたから、遠くで見たんぢや、ほら、分りませんや。一寸見ると何だか土方のやうな奴で、其奴がかう手を背後へ廻しましてな、お宅の犬の寢てゐる側へ寄つてくから、はてな、何をするンだらう、と思つて見てゐますと、彼樣な人懷つこい犬だから、其奴の面を見て、何にも知らずに尻尾を掉つてましたよ。可哀さうに！　普通の者なら、何ぼ何でも其樣なにされちや、手を下せた譯合のもんぢやございません、――ね、今日人情としましても。それを、貴女……いや、どうも、あゝいふ手合に逢つちや敵ひませんて、卒然匿してた棒を取直して、おやッと思ふ間に、ポンと一つ鼻面を打ちました。さうするとな、お宅のは勃然起きましてな、キリ〳〵と二三遍廻つて、パタリと倒れると、仰向きになつてから四足を突張りましてな、尻尾でバタ〳〵地面を叩いたのは、あれは大方苦がつたンでせうが、傍で見てゐりや何だか喜んで尻尾を掉つたやうで、妙な鹽梅しきでしたがな、其處を、貴女、またポカ〳〵と三つ四つ咽喉ン處を打ちますとな、もう其切りで、ギヤッともスウとも聲を立て得ないで、貴女……」

私はもう後は聽いてゐなかつた。誰を憚る必要もないのに、竊と目立たぬやうに後方へ退つて、狐鼠々々と奥へ引込んだ。ベタリと机の前へ坐つた。キリ〳〵と二三遍廻つたといふ今聞いた話が胸に浮ぶと、そのキリ〳〵と廻つたポチの姿が、顯然と目に見えるやうな氣がする。熱い涙がほろ〳〵零れる、手の甲で擦つても〳〵、止度なくほろ〳〵零れる。

十九

ポチが殺されて、私は氣脱けしたやうになつて、翌日は學校も休むだ。何も自分が罪を犯したでもないのに、何となく友達に顏を見られるのが辛くツて……

午過にポチが殺されたといふ木村といふ家の前へ行つて見た。其處か此處かと尋ねて見たけれど、もう其らしい痕もない。私は道端に佇むで、茫然としてゐた。

炭屋の老爺やの話だと、うツかり寢轉んでゐる所を殺されたのだと云ふ。大方昨日も私の歸りを待ちかねて、此處らまで迎へに出てゐたのであらう。待草臥れて、ドタリと横になつて、角のポストの蔭から私の姿がヒヨツコリ出て來はせぬかと、其方ばかりを餘念なく眺めてゐる所へ、犬殺しが來たのだ。人間は皆私達親子のやうに自分を可愛がつて呉れるものと思つてゐるポチの事だから、犬殺しとは氣が附かない。何心なく其面を瞻上げて尾を掉る所を、思ひも寄らぬ太い棍棒がブンと風を截つて來て……と思ふと、又胸が一杯になる。

ヒウと悲しい音を立てゝ、空風が吹いて通る。跡からカラ〳〵に乾いた往來の中央を、砂烟が

濛と力のない渦を巻いて、捩れてひよろ〳〵と行く。

私は其行方を眺めて茫然としてゐた。と、何處かでキヤン〳〵と二聲三聲犬の啼聲がする……佶と耳を引立つて見たが、もう其切で聞えない。隣町あたりで凍けたやうな物賣の聲がする。

何だか今の啼聲が氣になる。ポチは殺されたのだから、もう此處らで啼いてる筈はない。餘所の犬だ〳〵、と思ひながら、何だか其儘聞流して了ふのが殘惜しくて、思はずバタ〳〵と駈出したが、餘所の犬ぢや詰らないと思返して、又頽然となると、足の運びも自然と遲くなり、そろりそろりと草履を引摺りながら、目的もなく小迷つて行く。

小迷つて行きながら、又ポチの事を考へてゐると、ふッと氣が變つて、何だか昨日からの事が皆嘘らしく思はれてならぬ。私が餘りポチばかり可愛がつて勉強をしなかつたから、父が萬一したら懲しめのため、ポチを何處かへ匿したのぢやないかと思ふ。さうすると、今の啼聲は矢張ポチだつたかも知れぬと、うろ〳〵とする目の前を、土耳古帽を冠つた十德姿の何處かのお祖父さんが通る。何だか親切さうな好いお祖父さんらしいので、此人に聞いたら、偶然とポチの居處を知つてゐて、敎へて呉れるかも知れぬと思つて、凝然と其顏を視ると、先も振向いて私の面を視て、莞爾して行つて了つた。

向ふから順禮の親子が來る。笈摺も古ぼけて、旅窶れのした風で、白の脚絆も埃に塗れて狐色になつてゐる。母の話で聞くと、順禮といふ者は行方知れずになつた親兄弟や何かを尋ねて、國國を經巡つて歩くものだと云ふ。此人達も斯樣な事で斯うして歩いてゐるのかも知れぬと思ふと、

私も何だか此仲間へ入つて一緒にポチを探して歩きたいやうな氣がして、立止つて其の後姿を見送つてゐると、忽ち背後でガラ〳〵と雷の落懸るやうな音がしたから、驚いて振向かうとする途端に、トンと突飛されて、私はコロ〳〵と轉がつた。

「危ねい！　往來の眞ン中を彷徨してやがつて……」とせい〳〵息を逸ませながら立止つて怒鳴りつけたのは、目の怕い車夫であつた。

車には黒い高い帽子を冠つて、温かさうな黄ろい襟の附いた外套を被た立派な人が乘つてゐたが、私が面を顰めて起上るのを尻眼に掛けて、髭の中でニヤリと笑つて、

「鎌藏、構はずに行れ。」

「へい……本當に冷りとさせやがつた。氣を付けろ、洟垂らしめ！……」

と車夫は又トツ〳〵と曳出した。

紳士は犬殺しでない。が、ポチを殺した犬殺しと此人と何だか同じやうに思はれて、クラ〳〵と目が眩むと、私はもう無茶苦茶になつた。卒然道端の小石を拾つて打着けてやらうとしたら、車は先の横町へ曲つたと見えて、もう見えなかつた。

パタリと小石を手から落した。と、何だか急に悲しくなつて來て耐らなくなつて、往來の眞中で私は到頭シク〳〵泣出した。

二十

ポチの殺された當座は、私は食が細つて瘦せた程だつた。が、其程の悲しみも子供の育つ勢には敵はない。間もなく私は又毎日學校へ通つて、友達を相手にキヤツ〱とふざけて元氣よく遊ぶやうになつた……

今日は如何したのか頭が重くて薩張り書けん。徒書でもしよう。

愛は總ての存在を一にす。

愛は味ふべくして知るべからず。

愛に住すれば人生に意義あり、愛を離るれば、人生は無意義なり。

人生の外に出で、人生を望み見て、人生を思議する時、人生は遂に不可得なり。

人生に目的ありと見、なしと見る、共に理智の作用のみ。理智の眼を抉出して目的を見ざる處に、至味存す。

理想は幻影のみ。

凡人は存在の中に住す、其一生は觀念なり。詩人哲學者は存在の外に遊離す、觀念は其一生なり。

凡人は聖人の縮圖なり。

人生の眞味は思想に上らず、思想を超脫せる者は幸なり。

二十世紀の文明は思想を超脫せんとする人間の努力たるべし。

此様な事ならまだ幾らでも列べられるだらうが、列べたつて詰らない。皆啌だ。啌でない事を一つ書いて置かう。

私はポチが殺された當座は、人間の顔が皆犬殺しに見えた。

是丈は本當の事だ。

二十一

小學から中學を終るまで、落第をも込めて前後十何年の間、毎日々々の學校通ひ、――考へて見れば面白くもない話だが、併し其を左程にも思はなかつた。小學校の中は、内で親に小蒼蠅く世話を燒かれるよりも、學校へ行つて友達と騷ぐ方が面白い位に思つてゐたし、中學へ移つてからも、人間は斯うしたものと合點して、何とも思はなかつた。

しかし、凡そ學科に面白いといふものは一つも無かつた。何の學科も〱、皆味も卒氣もない鬱陶する物ばかりだつたが、就中私の最も閉口したのは數學であつた。小學時代から然うだつたが、中學へ移つてからも、是ばかりは變らなかつた。此次は代數の時間とか、幾何の時間とかなると、もう其が胸に支へて、溜息が出て、何となく世の中が悲觀された。

算術は四則だけは如何やら斯うやら了解めたが、整數分數となると大分怪しくなつて、正比例で一寸息を吐く。が、其お隣の反比例から又亡羊し出して、按分比例で途方に暮れ、開平開立求積となると、何が何だか無茶苦茶になつて、詰り算術の長の道中を浮の空で通して了つたが、代

數も矢張り其通り。一次方程式、二次方程式、簡單なのは如何にかなつても、少し複雜のになると、AとBとが紛糾かつて、何時迄經つてもXに膠着いてゐて離れない。況や不整方程式には、頭も亂次になり、無理方程式を無理に強付けられてはげんなりして、便所へ立つてホッと一息吐く。代數も分らなかつたが幾何や三角術は尙分らなかつた。初の中は全く相合せ得る物の大さは相等しなどと眞顏で敎へられて、馬鹿扱にするのかと不平だつたが、其中に切賣の西瓜のやうな弓月形や、二枚屛風を開いたやうな二面角が出て來て、大きなお供に小さいお供が附着いてヤッサモッサを始める段になると、もう氣が逆上ッて了ひ、丸呑にさせられたギゴチない定義や定理が、頭の中でしやちこばつて、其心持の惡いこと一通りでない。試驗が濟むと、早速咽喉へ指を突込むで溜飮の黃水と一緒に吐出せるものなら、吐出して了つて淸々したくなる。

何の因果で此樣な可厭な想をさせられる事か、其は薩張分らないが、唯此可厭な想を忍ばなければ、學年試驗に及第させて貰へない。學年試驗に及第が出來ぬと、最終の目的物の卒業證書が貰へないから、それで誠に止むことを得ず、眼を閉つて毒を飮む氣で辛抱した。

尤も是は數學ばかりでない。何の學科も皆多少とも此氣味がある。味はつて樂むなどいふのは一つもない、又樂むでゐる暇もない。後から〳〵と他の學科が急立てるから、狼狽てゝ片端から及第のお呪ひの御符の積で鵜呑にして、而して試驗が濟むと、直ぐ吐出してケロリと忘れて了ふ。

二十二

今になつて考へて見ると、無意味だつた。何の爲に學校へ通つたのかと聞かれゝば、試驗の爲にといふより外はない。全く其頃の私の眼中には試驗の外に何物も無つた。試驗の爲に勉強し、試驗の成績に一喜一憂し、如何な事でも試驗に關係の無い事なら、如何なとなれと餘處に見て、生命の殆ど全部を擧げて試驗の上に繋けてゐたから、若し其頃の私の生涯から試驗といふものを取去つたら、跡は他愛のない烟のやうな物になつて了ふ。

これは、しかし、私ばかりといふではなかつた。級友といふ級友が皆然うで、平生の勉強家は勿論、金箔附の不勉強家も、試驗の時だけは、言合せたやうに、一色に血眼になつて……鵜の眞似をやる、丸呑に呑込めるだけ無暗に呑込む。尤も此連中は流石に平生を省みて、敢て多くを望まない、責めて及第點だけは欲しいが、貰へようかと心配する、而して常は事毎に教師に抵抗して青年の意氣の壯なるに誇つてゐたのが、如何した機でか急に殊勝氣を起し、敬禮も成る丈氣を附けて丁寧にするやうにして、それでも尙ほ危險を感ずると、運動と稱して、教師の私宅へ推懸けて行つて、哀れッぽい事を言つて來る。

私は我儘者の常として、見榮坊の、負嫌だつたから、平生も餘り不勉強の方ではなかつた。無論學科が面白くてゞはない、學科は何時迄經つても面白くも何ともないが、譬へば競馬へ引出された馬のやうなもので、同じやうな青年と一つ埒内に鼻を列べて見ると、負るのが可厭でいきり出す、矢鱈に無上にいきり出す。

平生さへ然うだつたから、況や試驗となると、宛然の狂人になつて、手拭を捻つて向鉢卷ばか

りでは間怠ッこい、氷嚢を頭へ載けて、其上から頰冠りをして、夜の目も眠ずに、例の鵜呑をやる。又鵜呑で大抵間に合ふ。間に合はんのは作文に數學位のものだが、作文は小學時代から得意の科目で、是は心配はない。心配なのは數學の奴だが、それをも無理に狼狽てた鵜呑式で押徹さうとする、又不思議と或程度迄は押徹される。尤も是はかね合もので、そのかね合を外すと、落こちる。私も未だ試驗慣れのせぬ中、ふと其かね合を外して落こちた時には、親の手前、學友の手前、流石に面目なかつたから、少し學校にも厭氣が差して、其時だけは一寸學校教育なんぞを齷齪して受けるのが、何となく馬鹿げた事のやうに思はれた。が、世間を見渡すと、皆此無意味な馬鹿げた事を平氣で懸命に行つてゐる。一人として躊躇してゐる者はない。其中で私一人其樣な事を思ふのは何だか薄氣味惡かつたから、狼狽てゝ、いや、馬鹿氣てゐるやうでも、矢張必要の事なんだらうと思直して、素知らん顔して、其からは落第の恥辱を雪がねば措かぬと發奮し、切齒して、扼腕して、果し眼になつて、又鵜の眞似を繼續して行つた。

　鵜の眞似でも何でも、試驗の成績さへ良ければ、先生方も滿足せられる、内でも親達が滿足するから、私は其で好い事と思つてゐた。然うして多く學んで殆ど何も得る所がない中に、いつしか中學も卒業して、卒業式には知事さんも「諸君は今回卒業の名譽を荷うて……」といつた。内でも赤飯を焚いて、お目出度い〳〵と親達が右左から私を煽がぬ許りにして吳れた。してみれば、矢張名譽でお目出度いのに違ひないと思つて、私も大に得意になつてゐた。

二十三

中學も卒業した。さて今後は如何するといふ愈胸の轟く問題になつた。まだ中學に居る頃からの宿題で、寐ても寤めても是ばかりは忘れる暇もなかつたのだが、中學を卒業してもまだ極らずに居たのだ。

極らぬのは私ではない。私は疾うに極めてゐた、無論東京へ行くと。

東京は如何な處だか、人の噂に聞く許で能くは知らなかつたが、私も地方育ちの青年だから、誰も皆思ふやうに、東京へ出て何處かの學校へ入りさへすれば、默つてゐても自然と運が向いて來て、或は海外留學を命ぜられるやうになるかも知れぬ。若し然うなつたら……と目を開いて夢を見てゐたのも昨日や今日の事ではないから、何でも角でも東京へ出たいのだが、さて困つた事には、珍らしくもない話だけれど、金の出處がない。

父は其頃縣廳の小吏であつた。薄給でかつ〳〵一家を支へてゐたので、月給だけでは私を中學へ入れる事すら覺束なかつたのだが、幸ひ親讓りの地所が少々と小さな貸家が二軒あつたので、其上りで如何にか斯うにか糊塗なつてゐたのだ。だから到底も私を東京へ遣れないといふ父の言葉に無理もないが、しかし……私は矢張東京へ出たい。

父は其頃未だ五十であつた。達者な人だけに氣も若くて、まだ〳〵十年や十五年は大丈夫生てゐると、傍の私達も思つてゐたし、自分も其は其氣でゐた。從つて世間の親達のやうに、早く

私を月給取にして、嫁を宛がつて、孫の世話でもしてゐたいなぞと、そんな氣は微塵もないが、何分にも當節は勤向が六かしくなつて、もう永くは勤まらぬといふ。成程父は教育といつても、昔の寺子屋教育ぎりで、新聞も漢語字引と首引で漸く讀み覺えたといふ人だから、今の學校出の若い者と机を列べて事務を執らされては、嘸辛い事もあらうと、其樣な事には浮の空の察しの無かつた私にも、話を聞けば能く分つて、同情が起らぬでもないが、しかし、それだからお前は縣廳へ勤めるなとして自分一人だけの事は爲て呉れと、言はれた時には情なかつた。父は然うして置いて、何ぞ他に氣骨の折れぬ力相應の事をして縣廳の方は辭職する、辭職しても當分はお前の世話にはなるまいと、財産相應の穩當な案を立てゝ、私の爲をも思つていふのは解つてゐるけれどしかし私は如何しても矢張東京へ出て何處かの學校へ入りたい。

で、親子一つ事を反覆すばかりで何日經つても話の纒まらぬ中に、同窓の何某はもう二三日前に上京したし、何某は此月末に上京するといふ話も聞く。私は氣が氣でないから、眼の色を異へて、父に逼り、果は血氣に任せて、口惜し紛れに、金がないと言はれるけれど、地面を賣れば如何にかなりさうなものだ、それとも私の將來よりも地面の方が大事なら、學資は出して貰はんでも好い、旅費だけ都合して貰ひ度い、私は其で上京して苦學生になると、突飛な事を言ひ出せば父は其樣な事には同意が出來ぬといふ、それは壓制だ、いや聞分ないといふものだと、親子顏を赤めて角芽立つ側で、母がおろ〳〵するといふ騷ぎ。

其時私の爲には頗る都合の好い事があつた。私と同期の卒業生で父も懇意にする去る家の

息子が、何處のも同じ様に東京行きを望むで、親に拒まれて、自棄を起し、或夜竊に有金を偸出して東京へ出奔すると、續いて二人程其眞似をする者が出たので、同じ様な息子を持つた諸方の親々の大恐慌となつた。父も此一件から急に我を折つて、彼方此方の親類を駈廻つた結果、金の工面が漸く出來て、最初は甚く行惱むだ私の遊學の願も存外難なく聽されて、遂に上京する事になつた時の嬉しさは今に忘れぬ。

二十四

愈〻出發の當日となつた。待ちに待つた其日ではあるけれど、今となつては如何やら一日位は延ばしても好いやうな心持になつてゐる中に、支度はズン〳〵出來て、さて改まつて父母と別れの杯の眞似事をした時には、何だか急に胸が一杯になつて不覺ホロリとした。母は固より泣いた、快活な父すら目出度い〳〵と言ひながら、頻に咳をして涕を拭むでゐた。

誂への俥が來る。性急の父が先づ狼狽て出して、座敷中を彷徨しながら、ソレ、風呂敷包を忘れるな、行李は好いか、小さい方だぞ、コヽコ蝙蝠傘は己が持つてツてやる、と固より見送つて與れる筈なので、自分も一臺の俥に乘りながら、何は載つたか、何は……ソレ、あの、何よ……と、焦心る程尙ほ想出せないで、何やら分らぬ手眞似をして獨り無上に車上で騷ぐ。

母も門口まで送つて出た。愈〻俥が出ようとする時、母は悲しさうに凝と私の面を視て、「ぢや、お前ねえ、カカ身體を……」とまでは言ひ得たが、後が言へないで、涙になつた。

私は故意と附元氣の高聲で、「御機嫌よう！」と一禮すると、俥が出たから、其儘正向になつて了つたが、何だか後髮を引かれるやうで、俥が橫町を出離れる時、一寸後を振向いて見たら、母はまだ門前に悄然と立つてゐた。

道々も故意と平氣な顏をして、往來を眺めながら、勉て心を紛らしてゐる中に、馴染の町を幾つも過ぎて俥が停車場へ着いた。

まだ發車には餘程間があるのに、もう場內は一杯の人で、雜然と騷がしいので、父が又狼狽て出す。親しい友の誰彼も見送りに來て吳れた。其面を見ると、私は急に元氣づいて、例になく壯に饒舌つた。何だか皆が私の擧動に注目してゐるやうに思はれてならなかつた。無論友達は家で立際に私の泣いたことを知る筈はないから……

軈て發車の時刻になつて、汽車に乘込む。手持無沙汰な落着かぬ數分も過ぎて、汽笛が鳴る。私が窓から首を出して挨拶をする時、汽車は動出して、父の眼をしよぼつかせた顏がチラリとして直ぐ後になる、見えなくなる。もうプラットフオームを出離れて、白ペンキの低い柵が走る、其向ふの後向きの二階家が走る、平家が走る。片側町になつて、人や車が後へ走るのが可笑しいと、其を見てゐる中に、眼界が忽ち豁然と明くなつて、田圃になつた。眼を放つて見渡すと、城下の町の一角が屋根は黑く、壁は白く、雜然と塊まつて見える向ふに、生れて以來十九年の間、毎日仰ぎ瞻たお城の天守が遙に森の中に聳えてゐる。あゝ、家は彼下だ……と思ふ時、始めて故鄕を離れることの心細さが身に染みて、悄然としたが、悄然とする側から、妙に又氣が勇む。何

だか籠のやうな狭隘しい處から、茫々と廣い明るい空のやうな處へ放されて飛んで行くやうで、何となく心臟の縮るやうな氣もするが、又何處か暢びりと、急に脊丈が延びたやうな氣もする。

かうした妙な心持になつて、心當に我家の方角を見てゐると、忽ち礚と物に眼界を鎖された。見ると、汽車は截割つたやうに急な土手下を行くのだ。

二十五

中後れたが、私は法學研究のため上京するのだ。

其頃の青年に、政治ではない、政論に趣味を持たん者は幾んど無かつた。私も中學に居る頃から其が面白くて、政黨では自由黨が大の贔負であつたから、自由黨の名士が遊説に來れば、必ず其演説を聽きに行つたものだ。無論板垣さんは自分の叔父さんか何ぞのやうに思つてゐた。

實際の政界の事情は些とも分つてゐなかつた。自由黨は如何いふ政黨だか、改進黨と如何違ふのだか、其樣な事は分つてゐるやうな風をして、實は些とも分つてゐなかつたが、唯初心な眼で局外から觀ると、何だか自由黨の人といふと、其人の妻子は屹度饑に泣いてゐるやうに思はれて、妻子が饑に泣く――人情忍び難い所だ。その忍び難い所を忍んで、妻や子を棄てゝ置いて、而して自分は藝者狂ひをするのぢやない、四方に奔走して、自由民權の大義を唱へて、探偵に跟隨られて、動もすれば腰繩で暗い冷たい監獄へ送られても、屈しない。偉いなあ！ と、かう思つてゐたから、それで好きだつた。

好きは好きだつたが、しかし友人の誰彼のやうに、今直ぐ其眞似は仕度くない。も少し先の事にしたい。兎角理想といふものは遠方から眺めて憧憬れてゐると、結構な物だが、直ぐ實行しようとすると、種々都合の悪い事がある。が、それでは何だか自分にも薄志弱行のやうに思はれて、何だか心持が悪かつたが、或時何かの學術雜誌を讀むと、今の青年は自己の當然修むべき學業を棄てゝ、動もすれば身を政治界に投ぜんとする風ありと雖も、是れ以ての外の心得違なり、青年は須らく客氣を抑へて先づ大に修養すべし、大に修養して而して後大に爲す所あるべし、といふ議論が載つてゐた。私は嬉しかつた。早速此持重説を我物にして了つて、之を以て實行に逸る友人等を非難し、而して竊に自ら辯護する料にしてゐた。

斯ういふ事情で此樣な心持になつてゐたから、中學卒業後尚ほ進んで何か專門の學問を修めようといふ場合には、勢ひ政治學に傾かざるを得なかつた。父が上京して何をやりたいのだと言つた時にも、言下に政治學と答へた。飛んだ事だといつて父が夫では如何しても承知して呉なかつたから、ぢや、法學と政治學とは從兄弟同士だと思つて、法律をやりたいと言つて見た。法律學は其頃流行の學問だつたし、縣の大書記官も法學士だつたし、それに親戚に、私立だけれど法律學校出身で、現に私達の眼には立派な生活をしてゐる人が二人あつた。一人は何處だつたか記憶がないが、何でも何處かの地方で代言をして、藝者を女房にして贅澤な生活をしてゐて、今一人は内務省の屬官でこそあれ、好い處を勤めてゐる證據には、曾て歸省した時の服裝を見ると、地方では奏任官には大丈夫踏める素晴しい服裝で、何しても金の時計をぶら垂げてゐたと云ふ。そ

れで父も法律なら好からうと納得したので、私は遂に法學研究のため斯うして汽車で上京するのだ。

二十六

東京へ着いたのは其日の午後の三時頃だつたが、便つて行くのは例の金時計をぶら垂げてゐたといふ、私の家とは遠緣の、變な苗字だが、小狐三平といふ人の家だ。招魂社の裏手の知れ難い家で、車屋に散々こぼされて、辛と尋ね當てゝ見ると、門構は門構だが、潛門で、國で想像してゐたやうな立派な冠木門ではなかつた。が、標札を見れば此家に違ひないから、潛りを開けて中に入ると、直ぐもう其處が格子戶作りの上り口で、三度四度案內を乞うて漸と出て來たのを見れば、顏や手足の腫起むだやうな若い女で、初は膝を突きさうだつたが、私の風體を見て中止にして、立ちながら、何ですといふ。はてな、家を間違へたか知らと、一寸狼狽したが、標札に確に小狐三平とあつたに違ひないから、姓名を名告つて今着いた事を言ふと、若い女は怪訝な顏をして、一寸お待ちなさいと言つて引込むだぎり、中々出て來ない。車屋は早く仕て吳れといふ。私は氣が氣でない。が、前以て書面で、世話を賴む、引受けたと、話が着いてから出て來たのだし、今日上京する事も三日も前に知らせてあるのだから、今に伯母さんが――私は家では此家の夫人を伯母さんと言ひつけてゐた――伯母さんが出て來て好いやうに仕て吳れると、其を賴みにしてゐると、久らくして伯母さんではなくて、今の女が又出て來て、お上ンなさいといふ。荷物が有

りますと、口を尖がらかすと、荷物が有るならお出しなさい、といふから、車屋に手傳つて貰つて、荷物を玄關へ運び込むと、其女が片端から受取つて、ズン〳〵何處かへ持つて了つた。

　車屋に極めた賃錢を拂はうとしたら、骨を折つたから增を吳れといふ。餘所の車は風を切つて飛ぶやうに走る中を、のそ〳〵と步いて來たので、些とも骨なんぞ折つちやゐない。田舍者だと思つて馬鹿にするなと思つたから、厭だといつた。すると、車屋は何だか譯の分らぬ事を際限もなくベラ〳〵と饒舌り立つて、段々大きな聲になるから、私は其大きな聲に驚いて、到頭言ひなり次第の賃錢を拂つて、東京といふ處は厭な處だと思つた。

　車屋との悶着を默つて衝立つて視てゐた女が、其が濟むのを待兼たやうに、此方へ來いといふから、其跟に隨いて玄關の次の薄暗い間へ入ると、正面の唐紙を女が此時ばかりは一寸膝を突いてスッと開けて、默つて私の面を視る。私は如何して好いのだか、分らなかつたから、

「中へ入つても好いんですか？」

と狼狽して案內の女に應援を乞うた時、唐紙の向ふで、勿體ぶつた女の聲で、

「さあ、此方へ。」

　私は急に氣が改まつて、小腰を屈めて、遠慮勝に中へ入つた。と、不意に簞笥や何や角や澤山な奇麗な道具が燦然と眼へ入つて、一寸目眩しいやうな氣がする中でも、長火鉢の向ふに、三十だか四十だか、其樣な悠長な研究をしてる暇はなかつたが、何でも私の母よりもグッと若い女の人が、厚い座布團の上にチンと澄してゐる姿を認めたから、狼狽して卒然其處へドサリと膝を突

くと、眞紅になつて、倒さになつて、
「初めまして……」

二十七

伯母さん——といつては何だか調和(うつり)が悪い、奥様は一寸會釋して、
「今お着きでしたか？」
「は、」と固くなる。
「何ですか、お國では阿父(おとう)さんも阿母(おかあ)さんもお變りは有りませんか？」
「は。」
と矢張(やつぱり)固くなりながら、訥辯でポツリ〱と兩親の言傳(ことづて)を述べると、奥様は聽いてゐるのか、ゐないのか、上調子ではあ〱と受けながら、厭に赤ちやけた出がらしの番茶を一杯注(つ)いで呉れたきりで、一向構つて呉れない。氣が附いて見ると、座蒲團も呉れてない。
何時迄經つても主人(あるじ)が顔を見せぬので、
「伯父さんはお留守ですか？」
と不覺(つい)言つて了つた顔を、奥様はジロリと尻目に掛けて、
「主人はまだ役所から退(ひ)けません。」
主人と厭に力を入れて言はれて、ぢや、伯父さんぢや不好(いけなか)つたのか知ら、と思ふと、又私は眞

紅になつた。

ところへバタ〳〵と緣側に足音がして、障子が端手なくガラリと開いたから、ヒヨイと面を擧ると、白い若い女の顏――とだけで、其以上の細かい處は分らなかつたが、何しろ先刻取次に出たのとは違ふ白い若い女の顏と衝着つた。是が噂に聞いた小狐の獨娘の雪江さんだなと思ふと、私は我知らず又固くなつて、狼狽てゝ俯向いて了つた。

「阿母さん〳〵」と雪江さんは私が眼へ入らぬやうに挨拶もせず、華やかな若い艶のある美い聲で、「矢張私の言つた通だわ。明日が樂だわ。」

「まあ、さうかい、」と吃驚した拍子に、今迄の奧樣がヒヨイと奧へ引込んで、矢張尋常の阿母さんになつて了つた。

「厭だあ私……だから此前の日曜にしようと言たのに、阿母さんが……」といひながら座敷へ入つて來て、始めて私が眼へ入つたのだらう。ジロ〳〵と私の風體を視廻して、膝を突いて、母の顏を見ながら、「誰方？」

「此方が何さ、阿父樣からお話があつた古屋さんの何さ。」

「さう。」

といつて雪江さんは此方を向いたから、此處らでお辭儀をするのだらうと思つて、私は又倒さになつて一禮すると、殘念ながら又眞紅になつた。

雪江さんも一寸お辭儀したが、直ぐと彼方を向いて了つて、

「私厭よ。阿母さんが彼様な事言つて行かなかつたもんだから……」

「だつて仕方がなかつたンだわね。私だつて彼様な窮屈な處へ行くよか、芝居へ行つた方が幾ら好いか知れないけど、石橋さんの奥様に無理に誘はれて辭り切れなかつたンだもの。好いわね、其代り阿父様に願つて、お前が此間中から欲しい〳〵てツてる彼ね？」と娘の面を視て、薄笑ひしながら、「彼を買つて頂いて上げるから……仕方がないから。」

「本當？」と雪江さんも急に莞爾々々となつた。私は見ないでも雪江さんの擧動は一々分る。「本當？　そんなら好いけど……ちよいと〳〵、其代り……」と小聲になつて、「ルビー入りよ。」

「不好ません〳〵！　ルビー入りなんぞツて、其様な贅澤な事が阿父様に願へますか？」

「だつてえ……尋常のぢあ……」と甘たれた嬌態をする。

「そんならお止しなさいな。尋常ので厭なら、何も強ひて買つて上げようとは言はないから。」

「あら！……」と忽ち機嫌を損ねて、「だから阿母さんは嫌ひよ。直あゝだもの。尋常のぢや厭だつて誰も言てやしなくつてよ。」

「そんなら、其様な不足らしい事お言ひでない。」

「へえ〳〵、恐れ入りました、」と莞爾して、「ぢや、尋常のでも好いから、屹度よ。ねえ、阿母さん、欺しちや厭よ。」

「誰がそんな……」

「まあ、好かつた！」と又莞爾して一寸私の面を見た。

二十八

私は先刻から存在を認めてゐられないやうだから、其隙に窃そり雪江さんの面を視てゐたのだ。雪江さんは私よりも一つ二つ、それとも三つ位年下かも知れないが、お出額で、圓い鼻で、二重顋で、色白で愛嬌が有ると謂へば謂ふやうなものゝ、醉程に器量は美くなかつた。が、若い女は何處となく好くて、私がうッかり面を視てゐる所を、不意に其面が此方を向いたのだから、私は驚いた。驚いて又俯向いて、膝前一尺通りの處を佶と視据ゑた。

雪江さんは又更めて私の様子をジロ〱視てゐるやうだつたが、

「部屋は何處にするの？」

と阿母さんの方を向く。

「え？」と阿母さんは雪江さんの面を視て、「あの、何のかい？　玄關脇の四疊が好からうと思つて。」

「あんな處!?……」

と雪江さんが一寸驚くのを、阿母さんが眼に物言はせて、了解ませて、

「彼處が一番明るくッて好いから。」

「さう、」と一切の意味を面から引込めて、雪江さんは澄して了つた。

「おゝ、さうだつけ、」と阿母さんの奥様は想出したやうに私の方を向いて、「荷物がまだ其儘で

したつけね。今案内させますから、彼方へ行つて荷物の始末でもなさい。雪江、お前一寸案内してお上げ。」

雪江さんが起つたから、私も起つて其跟に隨いて今度は緣側へ出た。雪江さんは私より脊が低い。ふツくりした束髮で、リボンの色は——彼は樺色といふのかしら。若い女の後姿といふものは惡くないものだ。

緣側を後戾りして又玄關へ出ると、成程玄關脇に何だか一間ある。

「此處よ。」

と雪江さんが衝と其處と入つたから、私も續いて中へ入つた。奥樣は明るいといつたけれど、何だか薄暗い長四疊で、入るとブクツとして變な足應へだつたから、先づ下を見ると、疊は茶褐色だ。西に明取りの小窓がある。雪江さんが其を明けて呉れたので、少し明るくなつたから、尙ほ能く視廻すと、壁は元來何色だつたか分らんが、今の處では濁黑い變な色で、一ケ所壞れを取繕つた痕が目立つて黃ろい球を描いて、人魂のやうに尾を曳いてゐる。無論一體に疵だらけで、處處鉛筆の落書の痕を留めて、腰張の新聞紙の剝れた蔭から隱した大疵が窃と面を出してゐる。天井を仰向いて視ると、彼方此方の雨漏りの暈したやうな染が化物めいた模樣になつて浮出してゐて、何だか氣味の惡いやうな部屋だ。

「何時の間にか掃除したんだよ。それでも奇麗になつたわ、」と雪江さんは部屋の中を視廻してゐたが、ふと片隅に積んであつた私の荷物に目を留て、「貴方の荷物つて是れ？」と、臆面もなく人

の面を視る。

私は狼狽てゝ壁を視詰めて、

「然うです。」

「机が無いわねえ。私ン所に明いてるのが有るから、貸て上ませうか？」

「なに、好いです、明日買つて來るから、」と矢張壁を視詰めた儘で。

「私要らないンだから、使つても好くつてよ。」

「なに、好いです、買つて來るから。」

「本當に好くつてよ、然う遠慮しないでも。今持つて來てよ、」と蝶の舞ふやうに翩然と身を翻して、部屋を出て姿は直ぐ見えなくなつたが、其處らで若い華やかな聲で、「其代り小さくッてよ、」といふのが聞えて、輕い足音がパタ〳〵と緣側を行く。

私は荷物の始末を忘れて、雪江さんの出て行つた跡をうつかり見てゐた。事に寄ると、口を開いてゐたかも知れぬ。

二十九

荷物を解いてゐると、雪江さんが果して机を持つて來て呉れた。成程小さい――が、折角の志を無にするも何だから、借りて置く事にして、禮をいつて窓下に据ゑると、雪江さんが、それよか入口の方が明るくッて好からうといふ。入口では出入りの邪魔になると思つたけれど、折角

の助言を聽かぬのも何だから、言ふ通りに据直すと、雪江さんが、矢張窓の下の方が好いといふ。で、矢張窓の下の方へ据ゑた。

早速私が書物を出して机の側に積むのを見て、雪江さんが、

「本箱もなかつたわねえ。私ン所に二つ有るけど、皆塞がつてゝ、貸して上げられないわ。」

「なに、買つて來るから、好いです。」

「そんならね、晩に勸工場で買つてらッしやいな。」

「え？」と私は問直した、――勸工場といふものは其時分まだ國には無かつたから。

「小川町の勸工場で。」

「勸工場ッて？」

「あら、勸工場を知らないの？　まあ！……」

と雪江さんは吃驚した面をして、突然破裂したやうに笑ひ出した。娘といふものは壺口をして、氣取つて、オホヽと笑ふものとばかり思つてる人は訂正なさい。雪江さんは娘だけれど、口を一杯に開いて、アハヽヽと笑ふのだ。初め一寸仰向いて笑つて、それから俯向いて、身を揉むで、胸を叩いて苦しがつて笑ふのだ。私は眞紅になつて默つてゐた。

先刻取次に出た女は其後漸く下女と感付いたが、此時障子の蔭からヒヨコリお龜のやうな笑面を出して、

「何を其様に笑つてらッしやるの？」

「だつて……アハヽヽヽ！……　古屋さんが……アハヽヽ！……」
「あら、一寸、此方が如何かなすつたの？」
無禮者奴がヅカ／＼部屋へ入つて來た、而して雪江さんの笑ひが止らないで、些とも要領を得ない癖に、譯も分らずに、一緒になつてゲラ／＼笑ふ。
其時ガラ／＼といふ車の音が門前に止つて、ガラッと門が開くと同時に、大きな聲で、威勢よく、
「お歸りッ！」
形勢は頓に一變した。下女は急に眞面目になつて、雪江さんを棄てゝ置いて、急いで出て行く。雪江さんもまだ可笑がりながら泪を拭き／＼、それでも大に落着いて後から出て行く。
主人の歸りとは私にも覺れたから、急いで起ち上つて……竊そり窓から覗いて見た。歸つた人は丁度潜りを潜る所で、先づ黒の山高帽がヌッと入つて、續いて縞のヅボンに靴の先がチラリと見えたかと思ふと、澁紙色した髭面が勃然仰向いたから、急いで首を引込めたけれど、間に合はなかつた。見附かッちやッた。
お歸り遊ばせ／＼、と口々に喋々しく言ふ聲が玄關でした。奥樣――も何だか變だ、雪江さんの阿母さんの聲で何か言ふと、ふう、さうか、ふう／＼、といふ聲は主人に違ひない。私の話に違ひない。
惡い事をした、窓からなんぞ覗くんぢやなかつたと、閉口してゐる所へ下女が呼びに來て、愈く

閉口したが、仕方がない。どうせ志を立てゝ郷關を出た男兒だ、人間到る處で極りの悪い想ひする、と腹を据ゑて奥へ行つて見ると、もう歸つた人は和服に着易へて、曾て雪江さんの阿母さんが占領してゐた厚蒲團に坐つてゐる。私は誰でも逢ひつけぬ人に逢ふと、屹度眞紅になる癖がある。で、此時も眞赤になつて、一度國で逢つた人だから、久濶といつて例の通り倒さになると、先方は心持首を動かして、若し聲に腰が有るなら、その腰と思ふ邊に力を入れて、「はい」といふ。父も母も宜しく申しましたといふと、又「はい」といふ。何卒何分願ひますといふと、一段聲を張揚げて、「はアい」といふ。

三十

晩餐になつて、其晩だけは私も奥で馳走になつた。花模様の丸ボヤの洋燈の下で、隅ではあつたが、皆と一つ食卓に對ひ、若い雪江さんの罪の無い話を聽きながら、阿父さん阿母さんの莞爾莞爾した面を見て、賑かに食事して、私も何だか嬉しかつたが……

軈て食事が濟むと、阿父さんが又主人になつて、私に對つて徐々小むづかしい話を始めた。何でも物價高直の折柄、私の入る食料では到底も賄ひ切れぬけれど、外ならぬ阿父さんの達ての頼みであるに因つて、不足の處は自分の方で如何にかする決心で、謂はゞ義侠心で引受けたのであれば、他の學資の十分な書生のやうに、悠長な考へでゐてはならぬ、何でも苦學すると思つて辛抱して、品行を愼むは勿論、勉強も人一倍するやうにといふ話で、聽いてゐても面白くも變哲も

ない話だから、雪江さんは話半に小さな欠びを一つして、起つて何處へか行つて了つた。私は少し本意なかつたが、やがて奧まつた處で琴の音がする。雪江さんに違ひない。雪江さんはまだ習ひ初めだと見えて、琴の音色は何だかボコン、ボコン、ベコン、ボコンといふやうに聞えて妙だつたけれど、私は鳴物は大好だ。何時聽いても惡くないと思つた。

で、遠音に雪江さんの琴を聽きながら、主人の勘定高い話を聽いてゐると、琴の音が食料に搦むだり、小遣に離れたりして、六圓がボコン、三圓でベコンといふやうに聞えて、何だか變で、話も能く分らなかつたが、分らぬ中に話は進んで、

「で、家も下女一人外使うて居らん。手不足ぢや。手不足の處で君の世話をするのぢやから、客扱ひにはされん。そりや手紙で阿父さんにも能う言うて上げてあるから、君も心得てるぢやらうな？」

「は。」

「からして勉強の合間には、少し家事も手傳うて貰はんと困る。なに、手傳ふというても、大した事ぢやない。まあ、取次位のものぢや。まだ何ぞ角ぞ他に賴む事も有らうが、なに、皆大した事ぢやない。行つて貰へような？」

「は、何でも僕に出來ます事なら……」

「そ、そ、その僕が面白うない。君僕といふのは同輩或は同輩以下に對うて言ふ言葉で、尊長者に對うて言ふべき言葉でない、そんな事も注意して、僕といはずに私というて貰はんとな……」

「は……不知氣が附きませんで……」

「それから、も一つ言うて置きたいのは我々の呼方ぢや。もう君の年配では伯父さん伯母さんでは可笑しい。これは東京の習慣通り、矢張私の事は先生と言うたが好からう。先生、此方が御面會を願はれます、先生、お使に行つて參りませう――一向可笑しうない。先生というて貰はう。」

「は、承知しました。」

「で、私を先生といふ日になると、勢ひ家内の事は奧さんといはんと權衡が取れん。先生に對する奧さんぢや。な、私が先生、家内が奧さん、――宜しいか？」

「は、承知しました。」

　これで一通り訓戒が濟むで、後は自慢話になつた。先生も法律は晩學で、最初は如何にも辛かつたが、その辛いのを辛抱したお蔭で、今日では內務の一等屬、何とかの係長たることを得たのだといふ話を長々と聽かされて、私は痺が切れて、耐へ切れなくなつて、泣出しさうだつた。

　辛と放免されて、暗黑を手探りで長四疊へ歸つて來ると、下女が薄暗い豆ランプを持つて來て、お前さん床を敷つたら忘れずに消すのですよと、朋輩にでも言ふやうに、粗率に言置いて行つて了つた。

　國を出る時、此家の伯父さんの先生は、昔困つてゐた時、家で散々世話をして遣つた人だから、惡いやうにはして吳れまいと、父は言つた。私も矢張其氣で便つて來たのだが、便つて來てみれば事每に案外で、あゝ、何だか妙な氣持がする。

私は家が戀しくなつた……

三十一

私は翌日早速錦町の某私立法律學校へ入學の手續を濟ませて、其處の生徒になつて、珍らしい中は熱心に勉強もしたが、其中に段々怠り勝になつた。それには種々原因もあるが、第一の原因は家の用が多いからで。

伯父さんの先生――私は口惜しいから斯ういふ――伯父さんの先生は、用といつても大した事ぢやないと言つた。成程一命に關はるやうな大した事ではないが、併し其大した事でない用が間斷なく有る。まづ朝は下女と殆ど同時に覺されて、雨戸を明けさせられる。伯母さんの奥さんと分擔で座敷の掃除をさせられる。其が濟むと、今度は私一人の專任で、庭から、玄關先から、門前から、勝手口まで掃かせられる。少しでも塵芥が殘つてゐると、掃直しを命ぜられるから、丁寧に奇麗に掃かなきやならん。是が中々の大役の上に、時々其處らの草むしり迄やらされて萎靡する事もある。

朝飯を濟せて伯父さんの先生の出勤を見送つて了ふと、學校は午後だから、其迄は身體に一寸隙が出來る。其暇に自分の勉強をするのだが、其さへ時々急ぎの謄寫物など吩咐つて全潰になる。

夕方學校から歸ると、伯父さんの先生はもう疾うに役所から退けてゐて、私の歸りを待兼たやうに、後から〳〵と用を吩咐る。それ、郵便を出して來いの、やれ、お客に御飯を出すのだから、

急いで仕出し屋へ走れのと、純臺所用の外は、何にでも私を使ふ。時には何の用だか知れもせぬ用に、手紙を持たせられて、折柄の雨降にも用捨なく、遠方迄使ひに遣られて、つく〴〵辛いと思つた事もある。さもなくば内で取次だが、此奴が餘所目には樂なやうで、行つて見ると中々樂でない。漸く刑法講義の一枚も讀むだかと思ふと、もう頼まうと來る。聞えん風も出來ぬから、澁々起つて取次に出て、倒さになる。私のお辭儀は家内の物議を惹起して度々喧しく言はれてゐるけれど、面倒臭いから、構はず倒さになる。でも、相手が立派な商人か何かだと、取次榮がして好い。伯父さんの先生、其樣な時には、ふう〳〵と二つ返事で、早速お通し申せと來る。上機嫌だ。其代り其樣な客の歸る所を見ると、持つて來た物は屹度持つて歸らない。立派な髭の生えた人もまだ好い。そんなのに限つて尊大振つて、私が倒さになつても、首一つ動かさぬ代り、取次いでも小言を言はれる氣遣ひはない。反て伯父さんの先生狼狽てゝ迎へに飛んで出る事もある。一番六かしいのは風體の餘り立派でない人で、就中帽子を冠らぬ人は、之を取次ぐに大に警戒を要する。自筆の名刺か何かを出されて、之を持つて奧へ行くと、伯父さんの先生名刺を一見するや、面を顰めて、居るといつたかといふ。居るものを居ないと言はれますか、と腹の中では議論を吹懸けながら、口へ出しては大人しく、はい、然う申しましたといふと、チョッと舌打して、此樣な者を取次ぐ奴が有るか、君は人の見別が出來んで困ると、小言を言つて、居ないと言つて返して了へといふ。私は脹れ面をして容易に起たない。すると、最終には澁々會ひはするが、後で金を持てかれたといつて、三日も沸々言つてゐる。

沸々言つたつて闘はないが、斯ういふ處を傍から看たら、誰が眼にも私は立派な小狐家の書生だ。伯父さんの先生の畜生、自分からが其氣で居ると見えて、或時人に對つて家の書生がといつてゐた。既に相手方が右の始末だから、無理もない話だが、出入の者が皆矢張私を然う思つて、書生扱にする。不平で〳〵耐らないが、一々辯解もして居られんから、私は誠に據どころなく不承々々に小狐家の書生にされて了つて、而して月々食料を拂つてゐた。

が、今となつて考へて見ると、不平に思つたのは私が未だ若かつたからだ。監督を頼まれたから、引受けて、序に書生にして使ふ、――これが即ち親切といふもので、此の外に別に親切といふものは、人間に無いのだ。有るかも知れんが、私は一寸見當らない。

三十二

體好く書生にされて私は忌々しくてならなかつたが、しかし其でも小狐家を出て了ふ氣にはならなかつた。初の中は國元へも折々の便に不平を漏して遣つたが、其も後には弗と止めて了つた。さればといつて家での取扱ひが變つたのではない。相變らず書生扱にされて、小ッ甚くコキ使はれ、果は下女の擔任であつた靴磨きをも私の役に振替へられて了つた。無論其時は私は憤激した、餘程下宿しようかと思つた、が、思つたばかりで、下宿もせんで、爲せられる儘に靴磨きもして、而して國元へは其を隱して居た。少し妙のやうだが、なに、妙でも何でもない。私は實は雪江さんに惚れてゐたので。

惚れては居たが、夫だから雪江さんを如何しようといふ氣はなかつた。其時分は私もまだ初心だつたから、正直に女に惚れるのは男児の恥辱と心得てゐた。女を弄ぶのは何故だか左程の罪悪とも思つて居なかつたが、苟も男児たる者が女なんぞに惚れて性根を失ふなどゝ、そんな腐つた、そんなやくざな根性で何が出來ると息巻いてゐた。が、口で息巻く程には心で思つてゐなかつたから、自分もいつか其程に擯斥する戀に囚はれて了つたのだが、流石に囚はれたのを恥て、明かに然うと自認し得なかつた氣味がある。から、若其頃誰かゞ面と向つて私に然うと注意したら、私は屹度、失敬な、惚なんぞするものか、と眞紅になつて怒つたに違ひない。が、實は惚れたとも思はぬ中に、いつか自分にも内々で、こつそり、次序なく惚れて了つてゐたのだ。

惚れた證據には、雪江さんが留守だと、何となく歸りが待たれる。家に居る時には心が藻脱けて雪江さんの身に添うてゞも居るやうに、奥と玄關脇と離れてゐても、雪江さんが、今何の座敷で何をしてゐるかが大抵分る。

雪江さんは宵ッ張だから、朝は大層眠たがる、阿母さんに度々起されて、しどけない寢衣姿で、脛の露はになるのも氣にせず、眠さうな面をしてふら〳〵と部屋を出て來て、指の先で無理に眼を押開け、眶の裏を赤く反して見せて、「斯うして居ないと、附着いて了つてよ、」といつて皆を笑はせる。

雪江さんは一ッ橋のさる學校へ通つてゐたから、朝飯を濟ませると、急いで支度をして出て行く。髮は常も束髮だつたが、履物は背が低いからッて、高い木履を好いて穿いてゐた。紫の包を

抱へて、長い柄の蝙蝠傘を持つて出て行く後姿が私は好くつて堪らなかつたから、いつも其時刻には何喰はぬ顔をして部屋の窓から外を見てゐると、雪江さんは大抵は見られてゐるとは氣が附かずに、一寸お尻を撫でゝから、髪を壞すまいと、低く屈むで徐と門を潜つて出て行くが、時とすると潜る前にヒヨイと後を振向いて私と顔を看合せる事がある。さうすると、雪江さんは奇麗な歯並をチラリと見せて、何の意味もなく莞爾する。私は疾から出さうな莞爾を顔の何處かへ押込めて、强ひて眞面目を作つてゐるのだから、雪江さんの笑顔に誘はれると、耐へ切れなくなつて不覺矢張莞爾する。かうして莞爾に對するに莞爾を以てするのを一日の樂みにして、其をせぬ日は何となく物足りなく思つてゐた。いや、罪の無い話さ。

三十三

午後はいつも私が學校へ行つた留守に、雪江さんが歸つて來るので、掛違つて逢はないが、雪江さんは歸ると、直ぐ琴のお稽古に近所のお師匠さんの處へ行く。私は一度何かで學校が早く終つた時、態々廻道をして其前を通つて見た事がある。三味線のお師匠さんと違つて、琴のお師匠さんの家は格子戸作りでも、履脱に石もあつて、何處か上品だ。入口に琴曲指南山勢門人何とかの何枝と優しい書風で書いた札が掛けてあつた。窃と格子戸の中を覗いて見ると、赤い鼻緒や海老茶の鼻緒のすがつた奇麗な駒下駄が三四足行儀よく並んだ中に、一足紫紺の鼻緒の可愛らしいのが片隅に遠慮して小さく脱棄てゝある。之を見違へてなるものか、雪江さんのだ。大方駒下駄

の主も奥の座敷に取繕つてチンと澄してゐるに違ないと思ふと、そのチンと澄してゐる處が一目なりと見たくなつたが、生憎障子が閉切つてあるので、外からは見えない。唯琴の音がするばかりだ。稽古琴だから騒々しいばかりで趣は無いけれど、それでも琴は何處か床しい。雪江さんは近頃大分上手になつたけれど、雪江さんではないやうだ。大方まだ濟ないンだらう、なぞと思ひながら、うッかり覗いてゐたが、ふッと氣が附くと、先刻から側で何處かの八ッばかりの男の兒が、青洟を啜り〳〵、不思議さうに私の面を瞻上げてゐる、子供でも極りが悪くなつて、匆々に其處の門口を離れて歸つて來た事も有つたつけが……

夕方は何だか混雑して落着かぬ中にも、一寸好い事が一つある。ランプ掃除は下女の役だが、夕方之に火を點けて座敷々々へ配るのは私の役だ。其時だけは私は公然雪江さんの部屋へ入る權利がある。雪江さんの部屋は奥の四疊半で、便所の側だけれど、一寸小奇麗な好い部屋だ。本箱だの、机だの、ガラス戸の箱へ入た大きな人形だの、袋入りの琴だの、寫眞挾みだの、何だの角だの體裁よく列べてあつて、留守の中は整然と片附いてゐるけれど、歸つて來ると、書物も出放しにしたり、毛絲の球を轉がしたりして引散かす。何かに紛れてランプ配りが晩くなつた時などは、もう夕闇が隅々へ行渡つて薄暗くなつた此の部屋の中に、机に茫然頬杖を杖いてる雪江さんの眼鼻の定からぬ顔が、唯圓々と微白く見える。何となく詩的だ。

「晩くなりました。」

とぶつきらぼうの私も雪江さんだけには言ひつけぬお世辭も不覺出て、机の上の毛絲のランプ敷

へ締とランプを載せると、

「いゝえ、まだ要らないわ。」

雪江さんは屹度斯ういふ。これが伯父さんの先生でも有らうものなら、口を尖がらかして、「もッと手廻して早うせにゃ不好！」と來る所だ。大した相違だ。だから、家で人間らしいのは雪江さんばかりだと言ふのだ。

其儘出て來るのが、何だか飽氣なくて、

「今日貴孃の琴のお師匠さんの前を通りました。一寸好い家ですね。」

「あら、さう、」と雪江さんがいふ。心持首を傾げて、「何時頃？」

「さうさなあ……四時ごろでしたか。」

「ぢや、私の行つてた時だわねえ。」

「えゝ、」と私は何だか極りが悪くなつて俯向いて了ふ。

此話が發展したら、如何な面白い話になるのだか分らんのだけれど、其様な時に限つて生憎と、茶の間邊で伯母さんの奥さんの意地悪が私を呼ぶ、

「古屋さん！　早くランプを……何を愚圖々々してるンだらうねえ。」

殘惜しいけれど、仕方がない。其切りで私は雪江さんの部屋を出て了ふ。

三十四

一番樂しみなのは日曜だ。それも天氣だと、朝から客が立込んで私は目が眩る程忙しいし、雪江さんもお友達が遊びに來たり、お友達の處へ遊びに行つたりして、私の事なんぞ忘れてゐるから、天氣は糞だ。雨降りに限る。就中伯父さんの先生は何か餘儀ない用事があつて朝から留守、雪江さんは一日家、といふ雨降の日が一番好い。

其樣な日には雪江さんは屹度思切て朝寢坊をして、私なんぞは徐々晝飯が戀しくなる時分に、漸う起きて來る。顏を洗つて、御飯を喰べて、其から長いこと掛つて髮を結ふ。結ひ了ふ頃は最う午砲だけれど、お晝はお腹が滿くて喰べられない。「私廢してよ、」といふ。

部屋で机の前で今日の新聞を一寸讀む。大抵續物だけだ。それから編棒と毛絲の球を持出して、暫くは默つて切々と編物をしてゐる。私が用が有つて部屋の前でも通ると、「古屋さん、これ何になると思つて？」と編掛けを翳して見せる。私が見たんぢや、何だか圓い變なお猪口のやうな物で、何になるのだか見當が附かないから、分らないといふと、でも、まあ、當てゝ見ろといふ。熟考の上、「巾着でせう？」といふと、「いゝえ、」と頭振を振る。巾着でないとすると、手袋には小さし、靴下でもなさゝうだし、「あゝ、分つた！　匂袋だ、」と圖星を言つた積でいふと、雪江さんは吃驚して、「まあ、可厭だ！　匂袋だなんぞツて‥‥　其樣な物は編物にはなくツてよ。」匂袋でもないとすると、もう私には分らない。降參して了ふと、雪江さんは莞爾ともしないで、「これ、人形の手袋。」

雪江さんは一つ事を何時迄もしてゐるのは大嫌ひだから、私がまだ自分の部屋の長四疊へ歸る

か歸らぬ中に、もう編物を止めて琴を浚つてゐる。近頃では最うポコンのペコンでも無くなつた。斯うして聽いてゐると、如何しても琴に違ひないと、感心して聽惚れてゐると、十分と經たぬ中に、ジャカ〳〵ジャンと引掻廻すやうな音がして、其切パタリと、琴の音は止む……ともう茶の間で若い賑かな雪江さんの聲が聞える。

忽ちドタ〳〵〳〵と緣側を駈けて來る音がする。下女の松に違ひない。後からパタ〳〵と追蒐けて來るのは、雪江さんに極つてる。玄關で追付いて、何を如何するのだか、キヤッ〳〵と騷ぐ。松が敵はなくなつて、私の部屋の前を駈脫けて臺所へ逃込む。雪江さんが後から追蒐けて行つて、また臺所で一騷動やる中に、ガラ〳〵ガチヤンと何かゞ壞れる。阿母さんが茶の間から大きな聲で叱ると、臺所は急に火の消えたやうに閴寂となる。

私は、國に居る時分は、お向ふのお芳ちやん——子供の時分に能く飯事をして遊んだ、あのお芳ちやんが好きだつた。お芳ちやんは小さい時には活潑な兒だつたが、大きくなるに隨れて、大層落着いて品の好い娘になつて、私は其樣子が何となく好きだつたが、雪江さんはお芳ちやんとは正反對だ。が、雪江さんも惡くない、なぞと思ひながら、茫然机に頰杖を突てゐる脊中を、誰だかワッといつてドンと撞く。吃驚して振反ると、雪江さんがキヤッ〳〵といひながら、逃げて行くしどけない後姿が見える。私は思はず莞爾となる。

莞爾となつた儘で、尙ほ雪江さんの事を思續けて、果は思ふ事が人に知れぬから、好いやうなものゝ、怪しからん事を內々思つてゐると、茶の間の緣側あたりで、オーといふ例の艷のある美

い聲が聞える。初は地聲の少し大きい位の處から、段々に甲高に競上げて行つて、絲のやうに細くなつて、何かを突脱けて、遠い〳〵何處かへ消えて行きさうになつて、又段々競下つて來て、果はパッと擴げたやうな太い聲になつて、餘念がない。雪江さんが肉聲の練習をしてゐるのだ。

三十五

私は其時分吉田松陰崇拜であつた。將來の自由黨の名士を以て自任してゐるのなら、グラッドストンかコブデン、ブライトあたりに傾倒すべきだが、如何した機だつたか、松陰先生に心醉して了つて、書風まで力めて其人に似せ、竊に何囘猛士とか僭して喜んでゐた迄は罪がないが、困つた事には、斯うなると世間に餘り偉い人が無くなる。誰を見ても、先づ松陰先生を差向けて見ると、一人として手應のある人物はない。皆一溜りもなく敗亡する。それを松陰先生の後に隱れて見てゐると、相手は松陰先生に負るので、私に負るのではないが、何となく私が勝つたやうな氣がして、大臣が何だ、皆門下生ぢやないか。自由黨の名士だつて左程偉くもない。況や學校の先生なんぞは只の學者だ、皆降らない、なぞと鼻息を荒くして、獨りで威張つてゐた。私なぞの理想はいつも人に迷惑を懸ける許りで、一向自分の足になつた事がないが、側から見たら嘸苦々しい事であらう。兎も角もかうして松陰先生大の崇拜で 留魂錄は暗誦してゐた程であつたが、しかし此松陰崇拜が、不思議な事には、些とも雪江さんを想ふ邪魔にならなかつたから、其時分私の眼中は天下唯松陰先生と雪江さんと有るのみだつた。

で、いつも學校の歸りには此二人の事を考へ〳〵歸るのだが、或日――たしか土曜日だつたかと思ふ、土曜日は學校も早仕舞なので、三時頃にさうして二人の事を考へながら歸つて見ると、主人夫婦はいつも茶の間だのに、其日は茶の間に居ない。書齋かと思つて書齋へ行かうとすると、緣側の盡頭の雪江さんの部屋で、雪江さんの聲で、

「誰？」

といふ。私は思はず立止つて、

「私です。」

「古屋さん？」

といふ聲と共に、部屋の障子が颯と開いて、雪江さんが面だけ出して、

「今日は皆留守よ。」

「え？」と私は耳が信ぜられなかつた。

「阿父さんも阿母さんもね、先刻出懸けてよ。」

「さうですか、」と何氣なく言つたが、內々は何だか急に嬉しくなつて來て、

「松は？」

「松はお湯へ行つて未だ歸つて來ないの。」

「ぢや、貴女お一人？」

「えゝ……一寸入らッしやいよ、此處へ。好い物があるから。」

と手招をする。斯うなると、松陰先生崇拜の私もガタ〳〵と震ひ出した。

三十六

前にも斷つて置いた通り、私は曾て眞劒に雪江さんを如何かしようと思つた事はない。それは決して無い。度々怪しからん事を想つて、人知れず其を樂しむで居たのは事實だけれど、勸業債劵を買つた人が當籤せぬ先から胸算用をする格で、ほんの妄想だ。が、誰も居ぬ留守に、一寸入らッしやいよ、と手招ぎされて、驚破こそと思ふ拍子に、自然と體の震ひ出したのは、即ち武者震ひだ。千載一遇の好機會、逸してなるものか、といふやうな氣になつて、必死になつて武者震ひを喰止めて、何喰はぬ顔をして、呼ばれる儘に雪江さんの部屋の前へ行くと、屈むでゐた雪江さんが、其時勃然面を擧げた。見ると、何だか口一杯頬張つてゐて、私の面を見て何だか言ふ。言ふ事は能く解らなかつたが、側に燒芋が山程盆に載つてゐたから、夫で察して、禮を言つて、一寸躊躇したが、思切つて中へ入つて了つた。

雪江さんはお薩が大好物だつた。私は好物ではないが、何故だか年中空腹を感じてゐるから、食後だつて十切位はしてやる男だが、此時ばかりは芋どころでなかつた。切に勸められるけれど、難有う〳〵とばかり言つてゝ、手を出さなかつた。何だかもう赫となつて、夢中で、何だか霧にでも包まれたやうな心持で、是から先は如何なる事やら、方角が分らなくなつたから、彷徨してゐると、

「貴方は遠慮深いのねえ。男ッて然う遠慮するもンぢやなくつてよ。」

と何にも知らぬ雪江さんが燒芋の盆を突付ける。私は今其處どころぢやないのだが、手を出さぬ譯にも行かなくなつて手を出すと、生憎手先がぶる〳〵と震へやがる。

「如何して其樣に震へるの？」

と雪江さんが不審さうに面を視る。私は愈狼狽して、又眞紅になつて、何だか譯の分らぬ事を口の中で言つて、周章てゝ頬張ると、

「あら、皮ごと喰べて……皮は取つた方が好いわ。」

「なに、構はんです、」と仕方が無いから、皮ぐるみムシヤ〳〵喰りながら、「何は……何處へ入らしッたンです？」

「吉田さんへ、」と雪江さんは皮を剝く手を止めて、「私些とも知らなかつたけど、今晩が春子さんのお輿入なんですつて。そら、媒人でせう家は？　だから、阿父さんも阿母さんも早めに行つてないと不好つて、先刻出て行つたのよ。」

これで漸く合點が行つたが、それよりも爰に一寸吹聽して置かなきやならん事がある。私は是より先春色梅曆といふ書物を讀むだ。一體小說が好きで、國に居る時分から軍記物や仇討物は耽讀してゐたが、まだ人情本といふ面白い物の有ることを知らなかつた。これの知り初めが即ち此春色梅曆で、神田に下宿してゐる友達の處から、松陰傳と一緒に借りて來て始て讀むだが、非常に面白かつた。此梅曆に據ると、斯ういふ場合に男の言ふべき文句がある。何でも貴孃は浦山敷

思はないかとか、何とか、ヒョイと輕く戲談を言つて水を向けるのだ。思切つて私も一つ言つて見ようか知ら……と思つたが、何だか、どうも……ソノ極りが惡い。

「大變立派なお支度よ。何でもね、簞笥が四棹行くンですつて。それからね、まだ長持だの、挾箱だの……」

あゝ、もう駄目だ。長持や挾箱の話になつちや大事去つた、と後悔しても最う追付かない。雪江さんは、何處が面白いのだか、その長持や挾箱の話に夢中になつて了つて、其から其と話し續けて、盛返したくも盛返す隙がない。仕方が無いから、今に又機會も有らうと、雪江さんの話は浮の空に聞いて、只管其機會を待つてゐると、忽ちガラッと障子が開いて、

「あら、おたのしみ！……」

吃驚して振反ると、下女の松めが何時戻つたのか、見ともない面を罅裂さうに莞爾つかせて立つてやがる。私は餘程飛蒐つて橫面をグワンと毆曲げてやらうかと思つた。腹が立つて〳〵……

三十七

千載一遇の好機會も松に邪魔を入れられて滅茶々々になつて了つたが、松が交つて二つ三つ話をしてゐる中に、間もなく夕方になつた。夕方は用が有るから、三人ばら〳〵になつて、私はランプ配りやら、戸締りやら、一切り立働いて、例の通り部屋で晩飯を濟すと、また身體に暇が出來た。雪江さんは一番先に御飯を喰べて、部屋へ籠つた儘音沙汰がない。唯松ばかり後仕舞で忙

しさうで、臺所で器物を洗ふ水の音がボシヤ〳〵と私の部屋へ迄聞える。

私は部屋で獨りランプを眺めて徒然としてゐるやうで、心は中々忙しかつた。婚禮に呼ばれて行つたとすると、主人夫婦の歸るのには未だ間が有る。歸らぬ中に今一度雪江さんと差向ひになりたい。差向ひになつて何をするのだか、それは私にも未だ極らないが、兎に角差向ひになりたい、是非なりたい、何か雪江さんの部屋へ行く口實はないか、口實は……と藻搔くけれど、生憎口實が看附からない。うづ〳〵して獨りで焦心てゐると、ふと縁側にバタリ〳〵と足音がする。其足音が玄關へ來る。確かに雪江さんだ。部屋の前を通越して臺所へ行くか、それとも萬一障子が開くかと、成行を待つ間の一分に心の臟を縮めてゐると、驚破、障子がガタ〳〵と……開きかけて、グッと支へたのを其儘にして、雪江さんが隙間から覗込みながら、

「勉强？」

と一寸首を傾げた。これが何を聞く時でも雪江さんの爲る癖で、看慣れては居るけれど、私は常も可愛らしいと思ふ。不斷着だけれど、荒い縞の着物に飛白の羽織を着て、華美な帶を締めて、障子に摑まつて斜に立つた姿も何となく目に留まる。

あゝ求むる者に與へられたのだ。神よ……といひたいやうな氣になつて、無論莞爾々々となつて、

「いゝえ……まあ、お入ンなさい。」

「ぢや、私話して行くわ。奥は一人で淋しいから。」

珍客々々！　之を優待せん法はない。よ、よ、と雪江さんが掛聲をして障子を明けようとするけれど、開かないのを、私は飛んで行つて力任せにウンと引開けた。何だか領元からぞく〳〵する程嬉しい。

生憎と火鉢は私の部屋には無かつたけれど、今迄敷いてゐた赤ゲットを、四ツに疊むだのを中央へ持出して、其でも裏反しにして勸めると、遠慮するのか、それとも小汚いと思つたのか、敷いて呉れないから、私は默つて部屋を飛出した。雪江さんは後で定めて吃驚してゐたらうが、私は雪江さんの部屋へ座布團を取りに行つたので、是だけは我ながら一生の出來だつたと思ふ。

席が出來ると、雪江さんが、

「貴方、御飯が喰べられて？　私何ぼ何でも喰べられなかつたわ、餘り先刻詰込んだもんだから。」

と微笑する。何時見ても奇麗な齒並だ。

私も矢張り莞爾して、

「私も喰べられませんでした……」

大嘘！　實は平生の通り五杯喰べたので。

雪江さんは國産れでも東京育ちだから、

「……にもお芋が有つて？」

「有りますとも。」

「ぢや、歸つても不自由はないわねえ。」

と又微笑する。

私も高笑ひをした。雪江さんの言草が可笑かつたばかりぢやない、實は胸に餘る嬉しさやら、何やら角やら取交ぜて高笑ひしたのだ。

それから國の話になつて、國の女學生は如何な風をしてゐるの、英語は何位の程度だの、洋樂は流行るかのと、雪江さんは其樣な事ばかり氣にして聞く。私は大事の用を控へてゐるのだ。其處ぢやないけれど、仕方がないから相手になつてゐると、チヨツ、また松の畜生が邪魔に來やがつた。

三十八

松が來て私はうんざりして了つたが、雪江さんは反て差向の時よりはずみ出して、果は松の方へ膝を向けて了つて、松ばかりを相手に話をする。私は居るか居ないか分らんやうになつて了つた。初は少からず不平に思つたが、しかし雪江さんを觀てゐるのには、反て此方が都合が好い。で、母屋を貸切つて、庇で滿足して、雪江さんの白いふツくりした面を飽かず眺めて、二人の話を聽いてゐると、松も能く饒舌るが、雪江さんも中々負てゐない。話は詰らん事ばかりで、今度開店した小間物屋は安賣だけれど品が惡いの、お湯屋のお神さんのお腹がまた大きくなつて來月が臨月だの、八百屋の猫が兒を五疋生むで二疋喰べて了つたさうだの、要するに愚にも附かん話ばかりだが、しかし雪江さんの樣子が好い。物を言ふ時には絶えず首を搖かす、其度にリボン

が瓢々と一緒に搖く。時々は手眞似もする。今朝結つた束髮がもう大分亂れて、後毛が頰を撫でるのを蒼蠅さうに搔上げる手附も好い。其樣な時には彼は友禪メリンスといふものだか、縮緬だか、私には分らないが、何でも赤い模樣や黃ろい形が雜然と附いた華美な襦袢の袖口から、少し紅味を帶びた、白い、滑こさうな、柔かさうな腕が、時とすると二の腕まで露はれて、も少し持上げたら腋の下が見えさうだと、氣を揉むでゐる中に、又舊の位置に戻つて了ふ。雪江さんは處女だけれど、乳の處がふツくりと持上つてゐる。大方乳首なんぞは薄赤くなつてるばかりで、有るか無いか分るまい……なぞと思ひながら、雪江さんの面ばかり見てゐると、いつしか私は現實を離れて、恍惚となつて、雪江さんが何だか私の……妻でもない、情人でもない……何だか斯う其樣なやうな者に思はれて、兎に角私の物のやうに思はれて、今は斯うして松といふ他人を交ぜて話をしてゐるけれど、今に時刻が來れば、二人一緒に斯う奧まつた座敷へ行く。と、もう其處に床が敷つてある。夜具も郡內か何かだ。私が着物を脫ぐと、雪江さんが後からフワリと寢衣を着せて吳れる。今晚は寒いわねえとか雪江さんがいふ。む、む、寒いなあとか私も言つて、急いで帶をグル〳〵と卷いて床へ潛り込む。雪江さんが私の脫棄を疊むでゐる。其樣な事は好加減にして早く來て寢なと私がいふ。あいといつて雪江さんが私の面を見て微笑する……

「ねえ、古屋さん、然うだわねえ―」

と雪江さんが此方を向いたので、私は吃驚して眼の覺めたやうな心持になつた、何でも何か私の同意を求めてゐるのに違ひないから、何だか仔細は分らないけれど、

「さうですとも……」

と跋を合はせる。

「そら、御覧な。」

と雪江さんは又松の方を向いて、又話に夢中になる。

私はホツと溜息をする。今の續きを其儘にして了ふのは惜しい。もう一度、幻想でも何でも構はんから、もう一度、今の續きを考へて見たいと思ふけれど、もう氣が散つて其心持になれない。仕方がないから、默つて話を聽いてゐる中に、又いつしか恍惚と腑が脱けたやうになつて　雪江さんの面が右を向けば、私の面も右を向く。雪江さんの面が左を向けば、私の面も左を向く。上を向けば上を向く、下を向けば下を向く……

三十九

パタリと話が休むだ。雪江さんも默つて了ふ、松も默つて了ふ。何處でか遠方で犬の啼聲が聞える。所謂天使が通つたのだ。雪江さんは欠びをしながら、序に伸もして、

「もう何時だらう？」

「まだ早いです、まだ……」

と私が狼狽てゝ無理に早い事にして了ふ心を察しないで、

「もう九時過ぎたでせうよ。」

「阿父さんも阿母さんも遲いのねえ。何を爲てるンだらう？」と又欠びをして、「あゝ〱、古屋さんの勉强の邪魔しちやッた。私もう奥へ行くわ。」

私は些とも邪魔な事はないといつて止めたけれど、最う斯うなつては留らない、雪江さんは出て行つて了ふ。松も出て行く。私一人になつて了つた。詰らない‥‥

ふと雪江さんの座蒲團が眼に入る‥‥　之れを見ると、何だか捜してゐた物が看附つたやうな氣がして、卒然引浚つて、急いで起上つて雪江さんの跡を追つた。

茶の間の先の暗い處で雪江さんに追付いた。

「なあに？‥‥」

と雪江さんの吃驚したやうな聲がして、大方振向いたのだらう、面の輪廓だけが微白く暗中に見えた。

「貴孃の座布團を持つて來たのです。」

「あ、さうだッけ。忘れちやつた。爰へ頂戴。」と手を出したやうだつた。

私は狼狽てゝ座布團を後へ匿して、

「好いです、私が持つてくから。」

「あら、何故？」

「何故でも‥‥好いです‥‥」

「さう‥‥」

と何だか變に思つた樣子だつたが、雪江さんは又暗中を動き出す。暗黑で能くは分らないけれど、其姿が見えるやうだ。私も跡から探足で行く。何だか氣が焦る、今だ、今だ、と頭の何處かで喚く聲がする。如何か爲なきやならんやうな氣がして、むず〳〵するけれど、何だか可怕くて如何も出來ない。咽喉が乾いて引付きさうで、思はずグビリと堅唾を呑むだ……と、段々明るくなつて、雪江さんの姿が瞭然明るみに浮出す。もう雪江さんの部屋の前へ來て、雪江さんの姿は衝と障子の中へ入つて了つた。

其を見ると、私は差寵した。惜しいやうな氣のする一方で、何故だか、まづ好かつたと安心した氣味もあつた。で、續いて中へ入つて、持つて來た座布團を机の前に敷いて、其處を退くと、雪江さんは禮を言ひながら、入替はつて机の前に坐つて、

「遊んでらッしやいな。」

と私の面を瞻上げた。えゝとか、何とかいつて踟蹰してゐる私の姿を、雪江さんはジロ〳〵視てゐたが、

「まあ、貴方は此地へ來てから、餘程大きくなつたのねえ。今ぢや私とは屹度一尺から違つてよ。」

「まさか……」

「あら……屹度違ふわ。一寸然うしてらッしやいよ……」

といひながら、衝と起つたから、何を爲るのかと思つたら、ツカ〳〵と私の前へ來て直と向合つた。前髮が顋に觸れさうだ。芬と好い匂が鼻を衝く。

「ね、ほら、一尺は違ふでせう?」と愛度氣ない白い面が何氣なく下から瞻上げる。

私はわな〳〵と震ひ出した。目が見えなくなつた。胸の鼓動は腦へまで響く。息が逸んで、足が竦むで、もう凝として居られない。抱付くか、逃出すか、二つ一つだ。で、私は後の方針を執つて、物をも言はず卒然雪江さんの部屋を逃出して了つた……

四十

何故彼時私は雪江さんの部屋を逃出したのだといふと、非常に怕ろしかつたからだ。何が怕ろしかつたのか分らないが、唯何がなしに非常に怕ろしかつたのだ。

生死の間に一線を劃して、人は之を越えるのを畏れる。必ずしも死を忌むからではない。死は止むを得ぬと觀念しても、唯此一線が怕ろしくて越えられんのだ。私の逃出したのが矢張それだ。女を知らぬ前と知つた後との分界線を俗に皮切りといふ。私は性慾に驅られて此線の手前迄來て、これさへ越えれば望む所の性慾の滿足を得られると思ひながら、此線が怕ろしくて越えられなかつたのだ。越えたくなくて越えなかつたのではなくて、越えたくても越えられなかつたのだ。其後幾年か經つて再び之を越えむとした時にも矢張怕ろしかつたが、其時は酒の力を藉りて、半狂氣になつて、漸く此怕ろしい線を踏越した。踏越してから醉が醒めると、何とも言へぬ厭な心持になつたから、又酒の力を藉りて強ひて纔に其不愉快を忘れてゐた。此樣な厭な想ひをして迄も性慾を滿足させたかつたのだ。是は相手が正當でなかつたから、卽ち賣女であつたからかといふ

に、さうでない。相手は正當の新婦と相知る場合にも、人は大抵皆然うだと云ふ。殊に婦人が然うだといふ。何故だらう？

之と緣のある事で今一つ分らぬ事がある。人は皆隱れてエデンの果を食つて、人前では是を語ることさへ恥る。私の樣に斯うして之を筆にして憚らぬのは餘程力むから出來るのだ。何故だらう？　人に言はれんやうな事なら、爲んが好いぢやないか？　敢てするなら、誰の前も憚らず言ふが好いぢやないか？　敢てしながら恥るとは矛盾でないか？　矛盾だけれど、矛盾と思ふ者も無いではないか？　如何いふ譯だ？

之を靈肉の衝突といふか？　しからば、靈肉一致したら、如何なる？　男女相知るのを怕ろしいとも恥かしいとも思はなくなるのか？　畜生と同じ心持になるのか？

トルストイは北方の哲人だと云ふ。此哲人は如何な事を言つてゐる。クロイツエル・ソナタの跋に、理想の完全に實行し得べきは眞の理想でない。完全に實行し得られねばこそ理想だ。不犯は基督教の理想である。故に完全に實行の出來ぬは止むを得ぬ、唯基督教徒は之を理想として終生追求すべきである、と言つて、世間の夫婦には成るべく兄妹の如く暮せよと勸めてゐる。

何の事だ？　些とも分らん。完全を求めて得られんなら、悶死すべきでないか？　不犯が理想で、女房を貰つて、子を生ませてゐたら、普通の墮落に輪を掛た墮落だ。加之も一旦貰つた女房は去るなと言ふでないか？　女房を持つのが墮落なら、何故一念發起して赤の他人になッ了へといはぬ。一生離れるなとは如何いふ理由だ？　分らんぢやないか？

今食ふ米が無くて、ひもじい腹を抱て考へ込む私達だ。そんな伊勢屋の隱居が心學に凝り固まつたやうな、そんな暢氣な事を言つて生きちやゐられん！

四十一

其後間もなく雪江さんのお婿さんが極つた。お婿さんが極ると、私は何だか雪江さんに欺かれたやうな心持がして、口惜しくて耐らなかつたから、國では大不承知であつたけれど、口實を設けて體よく小狐の家を出て下宿して了つた。

馬鹿な事には下宿してから、雪江さんが萬一鬱いではゐぬかと思つて、態々様子を見に行つた事が二三度ある。が、雪江さんはいつも一向鬱いで居なかつた。反ッてお婿さんが極つて怡々してゐるやうだつた。それで私も愈忌々しくなつて、もう餘り小狐へも足踏せぬ中に、伯父さんが去る地方の郡長に轉じて、家族を引纏めて赴任して了つたので、私も終に雪江さんの事を忘れて了つた。これでお終局だ。

餘り平凡だ、下らない。こんなのは單純な性慾の發動といふもので、戀ではない、戀はも少と高尚な精神的の物だと、高尚な精神的の人は言ふかも知れん、然うかも知れん。唯私のやうな平凡な者の戀はいつも斯うだ。先づ無意識或は有意識に性慾が動いて滿足を求めるから、理性や趣味性が動いて其相手を定めて、始めて其處に戀が成立する、初から性慾の動かぬ場合に戀はない。異性でも親兄弟に戀をせぬのは其爲だ。青年の時分には、性慾が猛烈に動くから、往々理性や趣

味性の手を待たんで、自分と盲動して撞着つた者を直相手にする。私の雪江さんに於けるが、即ち殆ど其だ。私共の戀の本體はいつも性慾だ。性慾は高尙な物ではない、が、下劣な物とも思へん。中性だ、インヂフエレントの物だ。私共の戀の下劣に見えるのは、下劣な人格が反映するので、本體の性慾が下劣であるのではない。

で、私の性慾は雪江さんに戀せぬ前から動いてゐた。から、些とも不思議でも何でもないが、雪江さんといふ相手を失つた後も、私の戀は依然として胸に殘つてゐた。唯相手のない戀で、相手を失つて彷徨してゐる戀で、其本體は矢張り滿足を求めて得ぬ性慾だ。露骨に言つて了へば、誠に愛想の盡きた話だが、此猛烈な性慾の滿足を求むるのは、其時分の私の生存の目的の——全部とはいへぬが、過半であつた。

これは私ばかりでない、私の友人は大抵皆然うであつたから、皆此頃からポツ〱所謂「遊び」を始めた。私も若し學資に餘裕が有つたら、矢張「遊」んだかも知れん。唯學資に餘裕がなかつたのと、神經質で思切つた亂暴が出來なかつたのとで、遊びたくも遊び得なかつた。

友人等は盛に「遊」ぶ、亂暴に無分別に「遊」ぶ。其を觀てゐると、羨ましい。が、弱い性質の癖に、極めて負惜しみだつたから、私は一向羨ましさうな顏もしなかつた。年長の友人が誘つても私が應ぜぬので、調戯に、私は一人で墮落して居るのだらうといふやうな事を言つた。恥かしい次第だが、推測通りであつたので、私は赫となつた。血相を變へて、激論を始めて、果は毆合までして、遂に其友人とは絕交して了つた。

斯うして友人と喧嘩迄して見れば、意地としても最う「遊」ばれない。で、不本意ながら謹直家になつて、而して何ともえたいの知れぬ、謂れのない煩悶に囚はれてゐた。

四十二

あゝ、今日は又頭がふら〳〵する。此様な日にや碌な物は書けまいが、一日抜くも残念だ。向鉢巻でやツつけろ！

で、私の性慾の満足を求めても得られなかつたので、煩悶してゐた。何となく世の中が悲觀されてならん。友人等は「遊」ぶ時には大に「遊」んで、勉强する時には大に勉强して、何の苦もなく、面白さうに、元氣よく日を送つてゐる。それを觀てゐると、私は癪に觸つて耐らない。私の煩悶して苦むのは何となく友人等の所爲のやうに思はれる。で、責めてもの腹慰せに、薄志の弱行のと口を極めて友人等の公然の墮落を罵つて、而して私は獨り超然として、内々で墮落してゐた。若し友人等の墮落が陽性なら、私の墮落は陰性だつた。友人等の墮落が露骨で、率直で、男らしいなら、私の墮落は……あゝ、何と言はう？　人間の言葉で言ひやうがない。私は畜生だつた……

が、こつそり一人で墮落するのは餘り沒趣味で、どうも夫では趣味性が滿足せぬ。どうも矢張異性の相手が欲しい。が、其相手は一寸得られぬので、止むを得ず當分文學で其不足を補つてゐた。文學なら人聽も好い。これなら左程錢も入らぬ。私は文學を女の代りにして、文學を以て墮

落を潤色してゐたのだ。

私の謂ふ文學は無論美文學の事だ。殊に小説だ。小説は一體如何いふものだか、知らん、唯私の眼に映ずる小説は人間の墮落を潤色するものだ。通人の話に、道樂の初は唯色を漁する、膏肓に入ると、段々贅澤になつて、唯色を漁するのでは面白くなくなる、惚れたとか腫れたとか、情合で異性と絡むで、唯の漁色に趣を添へたくなると云ふ。其處だ、其處が即ち文學の需要の起る所以だ。少くも私は然うであつた。で、此目的で、最初は小狐に居た頃喰付いた人情本を引續き耽讀して見たが、數を累ねると、段々贅澤になつて、もう人情本も鼻に附く。同じ性慾の發展の描寫でも、も少し趣味のある描寫を味はつてみたい。そこで、種々と小説本を渉獵して、終に當代の大家の作に及んで見ると、流石は明治の小説家だ、性慾の發展の描寫が巧に人生觀などで潤色されてあつて、趣味がある、面白い。斯ういふ順序で私の想像で墮落する病は益膏肓に入つて、終には西洋へ迄手を出して、ヂッケンスだ、サッカレーだ、ゾラだ、ユゴーだ、ツルゲーネフだ、トルストイだ、といふ人達の手を藉りて、人並にしてゐれば、中性のインヂフエレントの性慾を無理に不自然な病的の物にして、クラフトエービングやフオレールの著書中に散見するやうな色情狂に想像で成濟まして、而して獨り高尚がつてゐた。

いや、獨り高尚がつてゐたのでない。それには同氣相求めて友が幾人も出來た。同縣人で豫備門から後文科へ入つた男が有つたが、私は殊に其感化を受けた。あゝ、皆自分が惡かつたので、人を怨むではすまないが、私は今でも此男に逢ふと、何とも言へぬ厭な心持になる。儘になるな

ら刺違へて死で了ひたく思ふ事もある。

四十三

私が感化を受けた友といふのは私より一つ二つ年上であつた。文學が專門だから、文學書は私より餘計讀でゐたといふ丈で、何でもない事だが、それを私は大層偉いやうに思つてゐた。まだファウストを讀まぬ時、ファウストの話を聽される。なに、友は愚にも附ん事を言つてゐるのだが、其愚にも附かん事を、人生だ、智慾だ、煩悶だ、肉だ、墮落だ、解脫だ、といふやうな意味の有り氣な言葉で勿體を附て話されると、何だか難有くなつて來て、之を語る友は偉いと思つた。こんな馬鹿氣た話はない。友は唯私より少し早くファウストといふ古本を讀だ丈の事だ。讀むで分つた所で、ファウストが何程の物だ？　技巧の妙を除いたら、果してどれ程の價値がある？　況や友はあやふやな語學の力で分らん處を飛ばし〳〵讀むだのだ、讀むで幼稚な頭で面白いと感じた丈だ、それも聞怯して、從頭面白いに極めて掛つて、半分は雷同で面白いと感じた丈だ。讀むで十分に味はひ得た所で、どうせ人間の作つた物で、左程の物でもあるまいに、それを此樣な讀方をして、難有がつて、偶之を讀まぬ者を何程劣等の人間かのやうに見下し、得意になつて語る友も友なら、其を聽いて敬服する私も私だ。心ある人から觀たら、嘸ぞ苦々しく思はれたらう。

此友から私は文學の難有い譯を種々と說き聽かされた。今ではもう大抵忘れて了つたけれど、

何でも文學は眞理に新しい形を賦して其生命を直接に具體的に再現するものだ、とか聽かされて、感服した。自然の眞相は普通人に分らぬ、詩人が其主觀を透して描いて示すに及んで、始めて普通人にも朧氣に分つて人間の寶となる、とか聽かされて、又感服した。戀には人間の眞髓が動く、とか聽かされて、又感服した。其他まだ種々聽かされて一々感服したが、此樣な事は皆愚言だ、世迷言だ。空想に生命を託して人生を傍觀するばかりで、古本と首引して瞑想するばかりで、人生に生命を託して人生と共に浮沈上下せんでも、人生の活機に觸れんでも、活眼を以て活勢を機微の間に察し得んでも、如何かして人生が分るものとしても、友のいふやうな其樣な文學は、何處かで誰かゞ空想した文學で、文學の實際でない。文學の實際は人間の墮落を潤色して、懦弱な人間を更に懦弱にするばかりだ。私の觀方は偏してゐるといふか？　唯弊を見て利を見ぬといふか？　しかし利よりも弊の勝つたのが即ち文學の實際ではないか？　私の觀方より文學の實際が既に弊に偏して居るではないか？

あゝ、しかし、文學を責めるより、友を責めるより、自ら責めた方が當つてゐよう。私のやうな斗筲な者は、例へば聖賢の遺書を讀むでも、矢張害を受けるかも知れん。私は自然だ人生だと口には言つてゐたけれど、唯書物で其樣な言葉を覺えたゞけで、意味が能く分つてゐるのではなかつた。意味も分らぬ言葉を弄んで、いや、言葉に弄ばれて、可惜浮世を夢にして渡つた。詩人と名が附きや、皆普通の人より勝つてるやうに思つてゐた。小說、殊に輸入小說には人生の眞相が活字の面に浮いてゐるやうに思つてゐた。西洋の詩人は皆東洋の詩人に勝るやうに思つてゐた。

作の新舊を論じて其價値を定めてゐた。自分は此樣に下らん眞似をしてゐながら、他の額に汗して着實の浮世を渡る人達が、偶文壇の事情に通ぜぬと、直ぐ俗物と罵り、俗衆と罵つて、獨り自ら高しとしてゐた。獨り自ら高しとする一方で、想像で姦淫して、一人で墮落してゐた。

あゝ、恥かしくて顏が熱る。何たる苦々しい事であつた。私を當時の事を想ひ出す度に、人通りの多い十字街に土下座して、通る人每に、踏んで、蹴て、唾を吐懸けて貰ひ度やうな心持になる……

四十四

文學の毒に中られた者は必ず終に自分も指を文學に染めねば止まぬ。私達が卽ち然うであつた。先づ友が何か下らぬ物を書いて私に誇示した。すると私も直ぐ卑しい負ぬ氣を出して短篇を書いた。どうせ碌な物ではない。筋はもう忘れて了つたが、何でも自分を主人公にして、雪江さんが相手の女主人公で、紛紜した舉句に幾度となく姦淫するのを、あやふやな理想や人生觀で紛らかして、高尙めかしてすぢり捩つた物であつたやうに記憶する。自惚は天性だから、書上げると、先づ自分と自分に滿足して、これなら當代の老大家の作に比しても左して遜色は有るまい、友に示せたら必ず驚くと思つて、示せたら、友は驚かなかつた。好い處もあるが、もう一息だと言ふ樣なことをいふ。私は非常に不平だつた。が、局量の狹い者に限つて、人の美を成すを喜ばぬ。人を褒れば自分の器量が下るとでも思ふのか、人の爲た事には必ず非難を附けたがる、非難を附

けてその非難を附けたのに必ず感服させたがる。友には其癖があつたから、私は友の評を一概に其癖の言はせる事にして了つて、實に卑劣な奴だと思つた。

　何とかして友に鼻を明させて遣りたい。それには此短篇を何處かの雜誌へ載せるに限ると思つた。雜誌へ載せれば、私の名も世に出る、萬一したら金も獲られる、一擧兩得だといふやうな、愚劣な者の常として、何事も自分に都合の好い樣にばかり考へるから、其樣な蟲の好い事を思つて、友には内々で種々と奔走して見たが、如何しても文學の雜誌に手蔓がない。其中に或人が其は既に文壇で名を成した誰かに知己になつて、其人の手を經て持込むが好いと教へて呉れたので、成程と思つて、早速手蔓を求めて某大家の門を叩いた。

　某大家は其頃評判の小說家であつたから、立派な邸宅を構へてゐようとも思はなかつたが、定めて瀟洒な家に住つて閑雅な生活をしてゐるだらうと思つて、根岸の其宅を尋ねて見ると、案外見すぼらしい家で、文壇で有名な大家のこれが住居とは如何しても思はれなかつた。家も見窄らしかつたが、主人も襟垢の附た、近く寄つたら惡臭い匂が紛としさうな、銘仙か何かの衣服で、銀縁眼鏡で、汚い髯の處斑に生えた、土氣色をした、一寸見れば病人のやうな、陰氣な、くすんだ人で、ねち〳〵とした辯で、面を看合せると急いで俯向いて了ふ癖がある。通されたのは二階の六疊の書齋であつたが、庭を瞰下すと、庭には樹から樹へ紐を渡して襁褓が幕のやうに列べて乾してあつて、下座敷で赤兒のピイ〳〵泣く聲が手に取るやうに聞える。

　私は甚く輕蔑の念を起した。殊に庭の襁褓が主人の人格を七分方下げるやうに思つたが、求む

る所があつて來たのだから、質樸な風をして、誰も言ふやうな世辭を交ぜて、此人の近作を讀むで非常に敬服して敎へを乞ひに來たやうにいふと、先生疊を凝と視詰めて、あれは咄嗟の作で、書懸けると親類に不幸が有つたものだから、といふやうな申譯めいた事を言つて、言外に、落着いて書いたら、といふ餘意を含める。私は腹の中で下らん奴だと思つたが、感服した顏をして媚びたやうな事を言ふと、先生萬更厭な心持もせぬと見えて、稍調子付いて來て、夫から種々文學上の事に就いて話して吳れた。流石は大家と謂はれる人程あつて、驚くべき博覽で、而も一家の見識を十分に具へてゐて、ムッツリした人と思ひの外、話が面白い。後進の私達は何の點に於ても敬服しなければならん筈であるが、それでも私は尙ほ輕蔑の念を去る事が出來なかつた。で、終局に只ほんの看て貰へば好いやうに言つて、雜誌へ周旋を賴む事は噯にも出さないで、持つて行つた短篇を置いて、下宿へ歸つて來てから、又下らん奴だと思つた。

四十五

某大家は兎に角大家だ。私は靑二才だ。何故私は此人を輕蔑したのか？　襟垢の附いた着物を着てゐたとて、庭に襁褓が乾してあつたとて、平生名利の外に超然たるを高しとする私の眼中に、貧富の差は無い筈である。が、私は實際先生の貧乏臭いのを看て、輕蔑の念を起したのだ。矛盾だ。矛盾ではあるが、矛盾が私の一生だ。

醫者の不養生といふ。平生思想を性命として、思想に役せられてゐる人に限つて、思想が薄弱

で正可の時の用に立たない。私の思想が矢張り其だつた。

けれど、思想々々と大層らしく言ふけれど、私の思想が一體何んだ？　大抵は平生親しむ書卷の中から拾つて來た、謂はゞ古手の思想だ。此蒼褪めた生氣のない古手の思想が、意識の表面で凝つて髣髴として別天地を拓いてゐる處を見ると、理想だ、人生觀だといふやうな種々の觀念が美しい空想の色彩を帶びて其中に浮游してゐて、腹が減いた、錢が欲しいといふ現實界に比べれば、逈に美しいやうに見える。浮氣な不眞面目な私は直ぐ好い處を看附けたといふ氣になつて、此別天地へ入り込んで、其處から現實界を眺めて罵つてゐたのだ。我存在の中心を古手の思想に託して、夫で自ら高しとしてゐたのだ。が、私の別天地は譬へば塗盆へ吹懸けた息氣のやうな物だ。現實界に觸れて實感を得ると、他愛もなく剝げて了ふ、剝げて木地が露はれる。古手の思想は木地を飾つても、木地を蝕する力に乏しい。木地に食入つて吾を磨くのは實感だのに、私は第一現實を輕蔑してゐたから、その實感を得る場合が少く、偶ま得た實感も其取扱を誤つてゐたから、木地の吾を磨く足にならなかつた。從つて何程古手の思想を積んで見ても、木地の吾は矢張故のふやけた、秩序のない、陋劣な吾であつた。

かうして別天地と木地の吾とは別々であつたから、別天地に遊んでゐる時と、吾に戻つた時とは、勢ひ矛盾する。言行は始終一致しない。某大家に對しても、未だ會はぬ中は多少の敬意を有つてゐたけれど、一たび其人の土氣色した顏が見え、襟垢が見え、襤褸が見えて、想像中の人が現實の人となると、木地の吾が、貧乏だから下らんと、別天地では流行せぬ論法で論斷して之を

輕蔑して了つたのだ。

唯當時私はまだ若かつたから、陋劣な吾にしても、私の吾には尙ほ多少の活氣が有つて、多少の活機を捉へ得た。文壇の大家になると、古手の思想が凝固まつて、其人の吾は之に壓倒せられ、纔に殘喘を保つてゐるやうなのが幾らもある。斯ういふ人が現實に觸れると、氣の毒な程他愛の無い人になる。某大家が卽ち其であつた。だから、人生を論じ、自然を說いて、微を拆き、幽を闡く頭はあつても、目前で靑二才の私が輕蔑してゐるのが、先生には終に見えなかつたのだ。

四十六

二三日して行つて見ると、先生も友と同じ樣に、好い處も有るが、もう一息だといふやうな事を言ふ。嘘だ。好い處も何も有るのぢやない。不出來だと直言が出來なくて斯う言つたのだ。先生も目が見えん人だが、私も矢張自分の事だと目が見えんから、其を眞に受けて、書直して持つて行くと、先生が氣の毒さうに趣向をも少し變へて見ろと云ふ。言ふ通りに趣向をも少し變へて持つて行くと、もう先生も仕方がない、不承々々に、是で好いと云ふ。なに、是で好い事は些も無いのだが、先生は氣が弱くて、もう然う〳〵は突戾し兼たのだ。先生に曰はせると、之を後進に對する同情だといふ。何の同情の事が有るものか！　少しでも同情が有るなら、頭から叱付けて、文學などに斷念させるが好いのだ。是が同情なら、同情は「煮え切らん」の別名だ。どうせ思想に囚はれて活機の分らぬ人の爲る事だから、お飾の思想を一枚剝れば、下からいつも此樣な

愛想の盡きた物が出て來るに不思議はないが、此方も此方だ、其樣な事は少しも見えない。本當に是で好い事だと思つて、其言葉の尾に縋つて、何處かの雜誌へ周旋をと賴むだ。こんなのを盲目の紛れ當りと謂ふのだらう。機を制せられて、先生も仕方がなさゝうに是も受込む。私達の應對は活きた人には側で聽いてゐられたものであるまい。

一月程して私の處女作は或雜誌へ出た。初戀が霜げて物にならなかつた事を書いたのだからとて、題は初霜だ。雪江さんの紀念に雪江と署名した。先生が筆を加へて私の文は行方不明になつた處も大分あつたが、兎も角も自分の作が活字になつたのが嬉しくて〳〵耐らない。雜誌社から送つて來るのを待ちかねて、近所の雜誌店へ驅付けて買つて來て、何遍か繰返して讀んでも〳〵讀飽かなかつた。眞面目な人なら、此處らで自分の愚劣を悟る所だらうが、私は反て自惚れて、此分で行けば行々は日本の文壇を震駭させる事も出來ようかと思つた。

聊かながら稿料も貰へたから、二三の友を招いて、近所の牛肉店で祝宴を開いて、其晩遂に「遊び」に行つた。其時案外不愉快であつたのは曾て記した通り。皆嬉しさの餘りに前後も忘却したので。

これが私の小說を書く病付きで又「遊び」の皮切であつたが、それも是も緣の無い事ではない。私の身では思想の皮一枚剝れば、下は文心卽淫心だ。だから、些とも不思議はないが、同時に兩方に夢中になつてる中に、學校を除籍された。なに、月謝の滯りが原因だつたから、復籍するに造作はなかつたが、私は考へた、「寧その事小說家になつて了はう。法律を學んで望み通り政治家

になれたつて、仕方がない。政治家になつて可惜一生を物質的文明に獻げて了ふより、小説家になつて精神的文明に貢獻した方が高尚だ。其方が好い……」どうも仕方がない。活眼を開いて人生の活相を觀得なかつた私が、例の古手の舊式の思想に捕はれて、斯う思つたのは仕方がないが、夫にしても、同じ思想に捕はれるにしても、も少し捕へられ方が有りさうなものだつた。物心一如と其樣な印度臭い思想に捕はれろではないが、所謂物質的文明は今世紀の人を支配する精神の發動だと、何故思はれなかつたらう？ 物質界と表裏して詩人や哲學者が顧みぬ精神界が別にあると、何故思はれなかつたらう？ 人間の意識の表面に浮だ別天地の精神界と違つて、此精神界は着實で、有力で、吾々の生存に大關係があつて、政治家は即ち此精神界を相手に仕事をするものだと、何故思はれなかつたらう？ 此道理をも考へて、其上で去就を決したのなら、眞面目な決心とも謂へようが……あゝ、しかし、何の道思想に捕はれては仕方がない。私は思想で、自ら欺いて、其樣な淺墓な事を思つてゐたが、思想に上らぬ實際の私は全く別の事を思つてゐた。如何な事を思つてゐたかは、私の言ふ事では分らない、是から追々爲る事で分る。

四十七

私は其時始て文士にならうと決心した、トサ後には人にも話してゐたけれど、事實でない。私は生來未だ曾て決心をした事の無い男だ。いつも形勢が既に定つて動かすべからずなつて、其形勢に制せられて始て決心するのだから、學校を除籍せられたばかりでは、未だ決心が出來なかつ

た。唯下宿に臥轉んでグヅリ〳〵として文士に爲りさうになつてゐたのだ。

始めて決心したのは、如何してか不始末が國へ知れて父から驚いた手紙の來た時であつた。行懸りで愚圖々々はしてゐられなくなつたから、始めて斯うと決心して事實を言つて同意を求めてやると、父からは怒つた手紙が來る、母からは泣いた手紙が來る。親達が失望して情ながる面は手紙の上に浮いて見えるけれど、かうなると妙に剛情になつて、因襲の陋見に囚はれてゐる年寄の白髮頭を冷笑してゐた。親戚の某が用事が有つて上京した序に、私を連れて歸らうとしたが、私は頑として動かなかつた。そこで學資の仕送りは絕えた。

かうなると最初から知れてゐながら、私は弱つた。仕方がないから、例の某大家に縋つて書生に置いて貰はうとすると、先生は相變らずグヅリ〳〵と煮切らなかつたが、奥さんが飽迄不承知で、先生を差措いて、御自分の口から斷然斷られた。私は案外だつた。賴めば二つ返事で引受けて吳れるとばかり思つてゐたから、親戚の者が連れて行かうとした時にも、言はでもの廣言迄吐いて拒むだのだが、から斷られて見ると、何だか先生夫婦に欺かれたやうな氣がして、腹が立つて耐らなかつた。世間の人は皆私の爲に生きてゐるやうな氣でゐたからだ。

もう斯うなつては、仕方がない、書けても書けんでも、筆で命を繫ぐより外仕方がない。食ふと食はぬの境になると、私でも必死になる。必死になつて書いて〳〵書捲つて、その度に、惡感情は抱いてゐたけれど、仕方がないから、某大家の所へ持つて行つて、筆を加へて貰つた上に、賣つて迄貰つてゐた。其が爲には都合上門人とも稱してゐた。然うして一二年苦しむでゐる中に、

どうやら曲りなりにも一本立が出來るやうになると、急に此前奥さんに斷られた時の無念を想出して、夫からは根岸のお宅へも無沙汰になつた。もう先生に餘り用はない。先生は或は感情を害したかも知れないが、先生が感情を害したからつて、世間が一緒になつて感情を害しはすまいし……と思つたのではない、決して其樣な輕薄な事は思はなかつたが、私の行爲を後から見ると、詰り然う思つたと同然になつてゐる。

先生には用は無くなつたが、文壇には用が有るから、私は廣く交際した。大抵の雜誌には一人や二人の知己が出來た。かうして交際を廣くして置くと、私の作が出た時に、其知己が餘り酷くは評して呉れぬ。無論感服などする者は一人もない。私などに感服しては見識に關はる。何かしら瑕疵を見付けて、其で自分の見識を示した上で、しかし、まあ、可なりの作だと云ふ。褒る時には屹度然う云ふ。私は局量が狹いから、批評家等が誰も許しもせぬに、作家よりも一段上座に坐り込んで、其處から曖昧な鑑識で輕卒に人の苦心の作を評して、此方の鑑定に間違ひはない、其通り思うて居れ、と言はぬばかりの高慢の面付が癪に觸つて耐らなかつたが、其を彼此言ふと、局量が狹いと言はれる。成程其は事實だけれど、さう言はれるのが厭だから、始終默つて憤つてゐた。其癖批評家の言ふ所で流行の趨く所を察して、勉めて其に後れぬやうにと心掛けてゐた……いや、心掛けてゐたのではない、其樣な不見識な事は私の尤も擯斥する所だつたが、後から私の行爲を見ると矢張然う心掛けたと同然になつてゐる。

四十八

久らく文壇を彷徨してゐる中に、當り作が漸く一つ出來た。批評家等は筆を揃へて皆近年の佳作だと云ふ。私は書いた時には左程にも思はなかつたが、然う言はれて見ると、成程佳作だ。或は佳作以上で、傑作かも知れん。私は不斷紛々たる世間の批評以外に超然としてゐる面色をしてゐて、實は非難されると、非常に腹が立つて、少しでも褒められると、非常に嬉しかつたのだ。

當り作が出てからは、默つてゐても、雜誌社から賴みに來る、書肆から賴みに來る。私は引張凧だ……トサ感じたので、なに、二三軒からの申込が一時一寸累なつたのに過ぎなかつた。

嬉しかつたので、調子に乘つて又書くと、又評判が好い。斯うなると、世間の注目は私一身に叢まつてゐるやうな氣がして、何だか嬉しくて〳〵耐らないが、一方に於ては此評判を墜しては大變といふ心配も起つて來た。で、平生は眼中に置かぬらしく言つてゐた批評家等に褒られたいが一杯で、愈文學に熱中して、明けても暮れても文學の事ばかり言ひ暮らし、眼中唯文學あるのみで、文學の外には何物もなかつた。人生あつての文學ではなくて、文學あつての人生のやうな心持で、文學界以外の人生には殆ど何の注意も拂はなかつた。如何なる國家の大事が有つても、左程胸に響かなかつた代り、文壇で鼠がゴトリといふと、大地震の如く其を感じて騷ぎ立てた。之を又眞摯の態度だとかいつて感服する同臭味の人が廣い世間には無いでもなかつたので、私は老人がお宗旨に凝るやうに、愈文學に凝固まつて、政治が何だ、其日送りの遣繰仕事ぢやない

て永久が別に有りでもするやうな事を言つて、傲然として一世を睥睨してゐた。か？　文學は人間の永久の仕事だ。吾々は其高尙な永久の仕事に從ふ天の選民だと、其日を離れ

文學上では私は寫實主義を執つてゐた。それも研究の結果寫實主義を是として寫實主義を執たのではなくて、私の性格では勢ひ寫實主義に傾かざるを得なかつたのだ。

寫實主義については一寸今の自然主義に近い見解を持つて、此様な事を言つてゐた。

寫實主義は現實を如實に描寫するものではない。如實に描寫すれば寫眞になつて了ふ。現實の(眞とは言はなかつた)眞味を如實に描寫するものである。詳しく言へば、作家のサブジェクチウヰチー即ち主觀に攝取し得た現實の眞味を如實に再現するものである。

人生に目的ありや、歸趨ありや？　其様な事は人間に分るものでない。智の力で人生の意義を掴まむとする者は狂せずんば、自殺するに終る。唯人生の味なら、人間に味へる。味つても／＼味ひ盡せぬ。又味はへば味はふ程味が出る。旨い。苦中にも至味はある。其至味を味はひ得ぬ時、人は自殺する。人生の味ひは無限だけれど、之を味はふ人の能力には限りがある。

唯人は皆同じ様に人生の味を味はふとは言へぬ。能く料理を味はふ者を料理通といふ。能く人生を味はふ者は藝術家といふ。料理通は料理人でない如く、能く人生を味はふ藝術家は能く人生を經理せんでも差支へはない。

道德は人生を經理するに必要だらうけれど、人生の眞味を味はふ助にはならぬ。藝術と道德とは竟に沒交涉である。

是が私の見解であつた。淺薄はさて置いて、此樣な事を言つて、始終言葉に轉ぜられてゐたから、私は却て普通人よりも人生を觀得なかつたのである。

四十九

私の文學上の意見も大業だが、文學については先あ其樣な他愛のない事を思つて、浮れる積もなく浮れてゐた。で、私の意見のやうにすると、味はるゝものは人生で、味はふものは作家の主觀であるから、作家の主觀の精粗に由て人生を味はふ程度に深淺の別が生ずる。是に於て作家は如何しても其主觀を修養しなければならん事になる。

私は行々は大文豪になりたいが一生の願だから、大に人生に觸れて主觀の修養をしなければならん。が、漠然人生に觸れるの、主觀を修養するのと言つてる中は、意味が能く分つてゐるやうでも、愈實行する段になると、一寸まごつく。何から何如手を着けて好いか分らない。政治や實業は人生の一現象でも有らうけれど、其樣な物に大した味はない筈である。といつて教育でもないし、文壇は始終觸れてゐるし、まあ、社會現象が一番面白さうだ。面白いといふのは其處に人生の味が濃かに味はゝれる謂である。社會現象の中でも就中男女の關係が最も面白さうだが、其面白味を十分に味はゝうとするには、自分で實驗しなければならん。それには一寸相手に困る。人の戀をするのを傍觀するのは、宛も人が天麩羅を喰つてるのを觀て其味を想像するやうなものではあるけれど、實驗の出來ぬ中は傍觀して滿足するより外仕方がない。が、新聞の記事では輪

廓だけで內容が分らない。內容を知るには、戀する男女の間に割込んで、親しく其戀を觀察するに限るが、戀する男女が其處らに落ちても居ない。すると、當分まづ戀の可能（ポツシビリチイ）を持つてゐる若い男女を觀察して滿足して居なければならん。が、若い男を觀察したつて詰らない。若い男の心持なら、自分でも大抵分る。戀の可能（ポツシビリチイ）を持つてゐる若い女の觀察が當面の急務だ。と、から考へ詰めて見ると、私の人生研究は詰り若い女の研究に歸着する。

で、歸着點は分つたが、矢張（やつぱり）實行が困難だ。若い女を研究するといつて、往來に衝立つてゐて通る女に一々觸れもされん。勢ひ私の手の屆く所から研究に着手する外はない。が、私の手の屆く所だと、まづ下宿屋のお神さんや下女になる。下宿屋のお神さんは大抵年を喰つてる。若いお神さんはうツかり觸れると危險だ。剩す所は下女だが、下女ではどうも喰ひ足りない。忙がしさうにしてゐる所を捉（つか）まへて、一つ二つ物を言ふと、もう何番さんかでお手が鳴る。ヘーイと尻上りに大きな聲で返事をして、跡をも閉めずにドタ／＼と座敷を駈出して行くのでは、餘り沒趣味だ。下女が沒趣味だとすると、私の身分ではもう賣女に觸れて研究する外はないが、これも大店は金が掛り過るから、小店で滿足しなければならん。が、小店だと、相手が越後の國蒲原郡何村の產の鼻ひしやげか何かで、私等（わしら）が國さでと、未だ國訛が取れないのになる。往々にして下女にも劣る。尤も是は少し他に用事も有つたから、其用事を兼ねて私は絶えず觸れてゐたが、どうしても、どう考へて見ても、是では喰ひ足らん。どうも素人（しろうと）の面白い女に撞着（ぶつか）つて見たい。今なら直ぐ女學生といふ所だが、其時分は其樣（そん）な者に容易に接近されなかつたから、私は非常に煩悶し

てゐた。

馬鹿なッ！　其様な事を言つて、私は女房が欲しくなつたのだ。

五十

人生の研究といふやうな高尙な事でも、私なぞの手に掛ると、詰り若い女に撞着りたいなぞといふ愚劣な事になつて了ふ。普通の人なら靑年の中は愚を意識して隨分愚な眞似もしようけれど、私は其を意識しなかつた。矢張私共でなければ出來ぬ高尙な事のやうに思つて、切に若い女に撞着りたがつてゐる中に、望む所の若い女が遂に向ふから來て撞着つた。

それは小石川の傳通院脇の下宿に居る時であつた。此下宿は體裁は餘り好くなかつたが、それでも所謂高等下宿で、學生は大學生が一人だつたか、二人だつたか、居たかと思ふ。餘は皆小官吏や下級の會社員ばかりで、皆朝から辨當を持つて出懸けて、午後は四時過でなければ歸つて來ぬ連中だから、晝の中は家内が寂然とする程靜かだつた。

私は此家で一番上等にしてある二階の八疊の部屋を占領してゐた。なに、一番上等といつても、元來下宿屋に建てた家だから、建前は粗末なもので、動もすると障子が乾反つて閉閉に困難するやうな安普請ではあつたが、形の如く床の間もあつて、年中鐵舟先生やら誰やらの半折物が掛けてあつて、花活に花の絕えたことがない……といふと結構らしいが、其代り眞夏でも寒菊が活てあつたりする。造花なのだ。これは他の部屋も大同小異だつたが、唯た一つ他の部屋にはなくて、

此部屋ばかりにある、謂はゞ此部屋の特色を成す物があつた。それは姿見で、唐草模樣の浮出した紫檀贋ひの緣の、對ふと四角の面も長方形になる、勸工場仕込の安物ではあつたけれど、兎も角も是が上等室の標象として恭しく床の間に据ゑてあつた。下にもまだ八疊が一間あつたが、其處には姿見がなかつた。同じやうな部屋でありながら、間代が其處より此處の方が三割方高かつたのは、半分は此姿見の爲だつたかとも思はれる。

部屋は此通り餘り好くなかつたが、取得は南向で、冬暖かで夏涼しかつた。其に一番盡頭の部屋で階子段にも遠かつたから、他の客が通り掛りに横目で部屋の中を睨むで行く憂ひはなかつた。も一つ好い事は——部屋の事ではないが、此家は下宿料の取立が寛大だつた。亭主は居るか居ないか分らんやうな人で、お神さん一人で繰廻してゐるやうだつたが、快活で、腹の大きい人で、少し居馴染むだ者には、一月二月下宿料が滯つても、宜しうございます、御都合の好い時で、といつてビリ〳〵しない。收入の不定な私には是が何よりだつたから、私は二年越此家に下宿して居た。

或日朝から出て晝過に歸ると、帳場に看慣れぬ女が居る。後向だつたから、顏は分らなかつたが、根下りの銀杏返しで、黑縮緬だか何だかの小さい紋の附いた羽織を着て、ペタリと坐つてる後姿が何となく好かつたが、私がお神さんと物を言つてる間、其女は振向いても見ないで、默つて彼方向いて煙草を喫つてゐた。

部屋へ來る跡から下女が火を持つて來たから、捉まへて聞くと、今朝殆ど私と入違ひに尋ねて

來たのださうで、何でもお神さんの身寄だとかで、車で手荷物なぞも持つて來たから、地方の人らしいと云ふ。唯其切(それぎり)で、下女の事だから要領を得ない。

「如何(どん)な女だい？」

「あら、今御覽なすつたぢやありませんか？」

「後向きで分らなかつた。」

「別品ですよ。」と莞爾々々(にこにこ)してゐる。

「丸顔かい？」

「いゝえ、細面(ほそおもて)でね……」

「色は如何(どん)なだい？　白いかい？」

下女は默つて私の面(かほ)を見てゐたが、

「大層お氣が揉めますのね。何なら、もう一遍下へ行つて見ていらしッたら……」

誰にでも翫弄されると、途方に暮れる私だから、據(よん)どころなく苦笑(にやり)として默つて了ふと、下女は高笑して出て行つて了つた。

五十一

軈て夕飯時になつた。部屋々々へ膳を運ぶ忙がしさうな足音が廊下に轟いて、何番さんがお急ぎですよ、などと二階から金切聲で聒(かしま)しく喚く中を、バタ／＼と急足(いそぎあし)に二人ばかり來る女の足音

彼が私の部屋の前で止ると、
「此方が一番さんで、夫れから二番さん三番さんと順になるンですから何卒……」
といふのは聞慣れた小女の聲で、然う言棄てゝ例の通り端手なくバタ〳〵と引返して行く。
と、跡に殘つた一人が障子の外に蹲まつた氣色で、スル〳〵と障子が開いたから、見ると、何でも下女だ、彼女に違ひない。私は急いで餘所を向いて了つたから、能くは分らなかつたが、何でも下女の話の通り細面で、蒼白い、淋しい面相の、好い女だ……と思つた。年頃は二十五六……それとも七か……いや、八か……女の歳は私には薩張分らない。もう羽織はなしで、紬だか銘仙だか、夫とも更と好い物だか、其も薩張分らなかつたが、何しても半襟の掛つた柔か物で、前垂を締めて居たやうだつた。障子を明けると、上目でチラと私の面を見て、一寸手を突いて辭儀をしてから、障子の影の膳を取上て、臆した體もなくスル〳〵と内へ入つて來て、「どうもお待せ申しまして、」といひながら、狼狽してゐる私の前へ据ゑた手先を見ると、華奢な青白い手で、薬指に燦と光つてゐたのは本物のゴールド・リングと見た。正可鍍金ぢや有るまい。飯櫃も運び込んでから、
「お湯はございますかしら。」
と火鉢の藥罐を一寸取つて見て、
「まだ御座いますやうですね。ぢや、お後にしませう。御緩くりと……」
と會釋して、スツと起つた所を見ると、スラリとした後姿だ。あゝ、好い風だ、と思つてゐる中に、もう部屋を出て了つて、一寸小腰を屈めて、跡を閉めて、バタ〳〵と廊下を行く。

別段異つた事もない。小娘でないから、少しは物慣れた處もあつたらうが、其は當然だ。風に一寸垢脫のした處が有つたかも知れぬが、夫とても浮氣男の眼を惹く位の價値で、大した女ではなかつたのに、私は非常に感服して了つた。尤も私の不斷接してゐる女は、厭にお澄しだつたり、厭に馴々しかつたりして、一見して如何にも安ッぽい女ばかりだつたから、然ういふのを看慣れた眼には少しは異つて見えたには違ひない。

何者だらうと考へて見たが、分らない。或は黑人上りかとも思つてみたが、下町育ちは山の手の人とは違ふ。此處のお神さんも下町育ちだと云ふ。さういへば、何處か樣子に似た處もある。或は下町育ちかも知れぬとも思つた。

素性は分らないが、兎に角面白さうな女だから、此樣なのを味はつたら、女の眞味が分るかも知れん。今に膳を下げに來たら、今度こそは勇氣を振起して物を言つて見よう、私のやうに默つて居ては、何時迄經つても接近は出來ん、なぞと思つてゐると、隣室で女の笑ひ聲がする。下女の聲ではない。今のに違ひない。隣の俗物め、もう捉まへて戲言でも言つてると見える。

五十二

其晚膳を下げに來るかと心待に待つてゐたら、其には下女が來て、女は顏を見せなかつた。翌朝は女が膳を運んで來たが、卒となると何となく氣怯れがして、今は忙しさうだから、晝の手隙の時にしよう、といふ氣になる。で、言ふべき文句迄拵へて、搔くやうにして晝を待つてゐると、

晝が來て、成程手隙だから、他の者は遊んでゐて小女が膳を運んで來る。

三四日經つた。いつも女の助けるのは朝晩の忙がしい時だけで、晝は顏も出さない。考へて見ると、奉公人でないから其筈だが、私は失望した。顏を度々合せるから漸く分つたが、能く見ると、雀斑が有つて、生際に少し難が有る。髮も更少し濃かつたらと思はれたが、併し何となく締りのあるキリッとした面相で、私は矢張好いと思つた。名はお糸といつてお神さんの姪だとか云ふ。皆下女からの復聞だ。

何とかして一日も早く接近したいが、如何も顏を合せると、物が言へなくなる。晝間廊下で行逢つた時など、女は小腰を屈めて會釋するやうな、せんやうな、曖昧な態度で摺脫けて行く。其樣な時に接近したがつてる事は色にも出さずに、ヒヨイと、輕く、些と話に入らッしやい、とか何とか言つたら、最後には來るやうになるかも知れんとは思ふけれど、然う思ふばかりで、私の口は重たくて、ヒヨイと、輕く、其樣な事が言へない。

度々面を合せても物を言はんから、段々何だか妙に隔てが出來て來て、改めて物を言ふのが最う變になつて來る。此分だと、餘程何か變つた事が、例へば火事とか大地震とかゞあつて、人心の常軌を逸する場合でないと、隔ての關を破つて接近されなくなりさうだ。あゝ、初て部屋へ來た時、何故私は物を言はなかつたらうと、千悔萬悔、それこそ臍を噬むけれど、追付かない。然るに、私は接近が出來ないで此樣なに煩悶してゐるのに、隣の俗物は苦もなく日增しに女に親しむ樣子で、物を言交す五分間がいつか十分二十分になる。何だか知らんが、睦まじさうに密々話

をしてゐるやうな事もある。一度なんぞ女に脊中を叩かれて俗物が莞爾々々してゐる所を見懸けた。私は氣が氣でない……

藻掻いてゐると、確か女が來てから一週間目だつたかと思ふ、朝からのビショ〳〵降りが書過ても未だ止まない事があつた。鬱陶敷て、氣が滅入つて、幾ら書いても思ふ様に書けないから、私はホッとして、頭を抱へて、仰向に倒れて茫然としてゐたが、

「早く如何かせんと不好！」

と判然と獨言をいつて起反つた。獨言は小說に關係した事ではないので、女の事なので。

すると、餘り遠くでない、去迚近くでもない何處かで、ポッン〳〵と意氣な音がする。隣の家で能く琴を浚つてゐるが、三味線を彈いてた事はない。それに隣にしては近過ぎる。家には彈く者は無い筈だが……と耳を澄してゐると、軈て歌ひ出す聲は如何しても家だ。例のに違ひない。

私は起上つてブラリと廊下へ出た。

五十三

廊下へ出て耳を澄して見たが、三味線は聞えても、矢張歌が能く聞えない。が、愈〻例のに違ひないから、私は意を決して裏梯子を降りて、大廻りをして、竊そり臺所近くへ來て見ると、誰も居ない。皆其隣の家の者の住居にしてある座敷に塊まつてゐるらしい。好い鹽梅だと、私は緣側に佇立むで、庭を眺めてゐる風で、歌に耳を傾けてゐた。

好い聲だ。たッぷりと餘裕のある聲ではないが、透徹るやうに清い、何處かに冷たい處のあるやうな、といふと水のやうだが、水のやうに淡くはない、シンミリとした何とも言へぬ旨味のある聲だ。力を入れると、凛と響く。脱くと、スウと細く、果は繭の糸のやうになつて、此世を離れて暗い無限へ消えて行きさうになる時の儚さ便りなさは、聽いてゐる身も一緒に消えて行きさうで、早く何とかして貰ひたいやうな、もう〳〵耐らぬ心持になると、消えかけた聲が又急に盛返して來て、遂にパッと明るみへ出たやうな氣丈夫な聲になる。好い聲だ。節廻しも巧だが、聲を轉がす處に何とも言へぬ妙味がある。ズッと張揚げた聲を急に落して、一轉二轉三轉と急轉して、何かを潛つて來たやうに、パッと又浮上るその面白さは……なぞと生意氣をいふけれど、一體新内をやつてるのだか、清元をやつてるのだか、私は夢中だつた。

俗曲は分らない。が、分らなくても、私は大好きだ。新内でも、清元でも、上手の歌ふのを聽いてゐると、何だか斯う國民の精粹とでもいふやうな物が髣髴として意氣な聲や微妙な節廻しの上に顯はれて、吾心の底に潛む何かに觸れて、何かゞ想ひ出されて、何とも言へぬ懷かしい心持になる。私は之を日本國民の二千年來此生を味ふて得た所のものが、間接の思想の形式に由らず、直に人の肉聲に乘つて、無形の儘で人心に來り逼るのだとか言つて、分明な事を不分明にして其處に深い意味を認めてゐたから、今お糸さんの歌ふのを聽いても、何だか其様なやうに思はれて、人生の粹な味や意氣な味がお糸さんの聲に乘つて、私の耳から心に染込むで、生命の髓に觸れて、全存在を撼がされるやうな氣がする。

お糸さんの顔は緣側からは見えないけれど、屹度少しボッと上氣して、薄目を開いて、恍惚として我か人かの境に迷ひつゝ、歌つてゐるに違ひない。所謂神來の興が中に動いて、歌に現を脱かしてゐるのは歌ふ聲に魂の入つてゐるので分る。恐らくもう側でお神さんや下女の聽いてることも忘れてゐるだらう。お糸さんは最う人間のお糸さんでない。人間のお糸さんは何處へか行つて了つて、體に俗曲の精靈が宿つてゐる、而してお糸さんの美音を透して直接に人間と交渉してゐる。お糸さんは今俗曲の巫女である。薩滿である。平生のお糸さんは知らず、此瞬間のお糸さんはお糸さん以上である、いや、人間以上で神に近い人である。

斯う思ふと、時としては斯うして人間を離れて藝術の神境に出入し得るお糸さんは尋常の人間でないやうに思はれる。お糸さんの人と爲りは知らないが、歌に於て三味線に於てお糸さんは確に一個の藝術家である、事に寄ると、藝術家と自覺せぬ藝術家である。要するに、俗物でない。

私も不肖ながら藝術家の端くれと信ずる。お糸さんの人となりは知らないでも、藝術家の心は唯藝術家のみ能く之を知る。此下宿に客多しと雖も、能くお糸さんを知る者は私の外にあるまい。私の心を解し得る者も、お糸さんの外には無い筈である……と思ふと、まだ碌に物を言た事もないお糸さんだけれど、何だかお糸さんが生れぬ前からの友のやうに思はれて、私は……あゝ、私は……

五十四

私の下宿ではいつも朝飯が濟むで下宿人が皆出拂つた跡で、緩くり掃除や雜巾掛をする事になつてゐた。お糸さんは奉公人でないから雜巾掛には關係しなかつたが、掃除だけは手傳つてゐたので、いつも其時分になると、お掃除致しませうと言つては私の部屋へ來る。私は內々其を心待にしてゐる、來ると急いで部屋を出て緣側を彷徨く。彷徨きながら、見ぬ振をして横目でチョイチョイ見てゐると、お糸さんが赤い襷に白地の手拭を姉樣冠りといふ甲斐々々しい出立で、私の机や本箱へパタ〳〵と拂塵を掛けてゐる。其を此方から見て居ると、お糸さんが何だか斯う私の何かのやうな氣がして、嬉しくなつて、斯うした處も惡くないなと思ふ。

ところが、お糸さんが三味線を彈いた翌朝の事であつた。萬事が常よりも不手廻りで、掃除にもいつも來るお糸さんが來ないで、小女が代りに來たから、私は不平に思つて、如何したのだと詰るやうにいふと、今日はお竹どんが病氣で寢てゐるので、受持なんぞの事を言つてゐられないのだと云ふ。其なら仕方が無いやうなものだけれど、小女のは掃除するのぢやなくて、埃をほだてゝ行くのだから、私が叱り付けてやつたら、小女は何だか沸々言つて出て行つた。

暫くして用を達しに行かうと思つて、ヒヨイと私が部屋を出ると、何時來たのか、お糸さんがツイ其處で、着物の裾をクルッと捲つた下から、華美な長襦袢だか腰卷だかを出し掛けて、倒さになつて切々と雜巾掛けをしてゐた。私の足音に振向いて、身を開いて通して呉れて、お糸さんは何とも思つてゐぬ樣だつたが、私は何だか氣の毒らしくて、急いで二階を降りて了つた。

用を達してから出て來て見ると、手水鉢に水が無い。小女は居ないかと視廻す向ふへお糸さんが、もう雜巾掛も濟むだのか、バケツを提げてやつて來たが、ト見ると、直ぐ氣が附いて、
「おや、さうだツけ……　只今直ぐ持つて參りますよ。」
と駈出して行つて、臺所から手桶を提げて來て、
「お待遠樣。」
とザツと水を覆ける時、何處の部屋から仕掛けたベルだか、帳場で氣短に消魂しくチリヽヽヽリンと鳴る。
お神さんが臺所から面を出して、
「誰も居ないのかい？　十番さんで先刻からお呼なさるぢやないか。」
「へい、只今……」
とお糸さんが矢張下女並の返事をして、
「お三どん新參で大狼狽……」
と私の面を見て微笑しながら、一寸滑稽た手附をしたが、其儘所體崩して駈出して、表梯子をトンヽヽヽと上つて行く。
私が手を洗つて二階へ上つて見たら、お糸さんは既う裾を卸したり、襷を外したりして、整然とした常の姿になつて、突當りの部屋の前で膝を突いて、何か用を聽いてゐた。
私は部屋へ歸つて來て感服して了つた。お糸さんは歌が旨い、三味線も旨い、女ながらも立派

な一個の藝術家だ。その藝術家が今日は如何だらう？　お竹が病氣なら仕方がないやうなもの丶、全で下女同樣に追使はれてゐる。下女同樣に追使はれて、慣れぬ雜巾掛までさせられた上に、無理な小言を言はれても、格別厭な面もせずに、何とか言つたッけ？　然う〳〵、お三どん新參で大狼狽といつて微笑……偉い！　餘程氣の練れた者でなければ、如彼は行かぬ。これがお竹でゞも有らうものなら、直ぐ見たくでもない面を膨らして、沸々口小言を言ふ所だ。それを常談事にして了つて、お三どん新參で大狼狽といつて微笑……。偉い！

五十五

感服の餘り、私は何とかして此自覺せぬ藝術家に敬意を表したいと思つたが、併し奉公人同樣に金など包むでは出されない、何でも品物を呈するに限ると、何故だか獨りで極めて掛つて、慘憺たる苦心の末、雪江一代の智慧を絞り盡して、其翌日の晝過本鄕の一友人を尋ねて、噓八百を陳べ立て、其細君を誘かして半襟を二掛見立て丶買つて來て貰つた。値段の處も私にしては一寸奮むだ積だつた。

早く之をお糸さんに呈して其喜ぶ顏を見たいと、此處らは未來の大文豪も俗物と餘り違はぬ心持になつて、何だか切りに嬉しがつて、莞爾して下宿へ歸つたのは丁度夕飯時分だつたが、火を持つて來たのは小女、膳を運んで來たのはお竹どんで、お糸さんは笑聲が餘所の部屋でするけれど、顏も見せない。私は何となく本意なかつた。

待侘びて獨りで焦れてゐると、軈て目差すお糸さんが膳を下げて來たから、此處ぞと思つて、極りが惡かつたが、思切つて例の品を呈した。大に喜ぶかと思ひの外、お糸さんは左して色を動かさず、輕く禮を言つて、一寸包みを戴いて、膳と一緒に持つて行つて了つた。唯其切で、何だか餘り飽氣なかつた。

何時間經つたか、久らくすると、部屋の障子がスッと開いた。振向いて見ると、思ひがけずお糸さんが入口に蹲まつて、兩手を突いて、先刻の禮を又言つてお辭儀をする。私は何となく嬉しかつた。お床を延べませうかといふから、敷つて呉れといふと、例の通り戸棚から夜具を出す時、昨夜も今朝も手に掛けて知つてゐる筈の枕皮の汚に始めて氣が附いて、明日洗ひませうといふ。なに、洗濯屋に出すから好いと言つても、此樣な物を洗ふのは雜作もないといつて聽かなかつた。私は又嬉しくなつて、此樣な事なら最と早く敬意を表すれば好かつたと思つた。

お糸さんは床を敷つて了ふと、火鉢の側へ膝行り寄つて火を直しながら、

「本當に嘸御不自由でございませうねえ、皆氣の附かない者ばかりの寄合なんですから。どうぞ何なりと御遠慮なく仰有つて下さいまし。然う申しちや何ですけど、他のお客樣は隨分ツケ〳〵お小言を仰しやいますけど、一番さん（私の事だ）は御遠慮深くツて何にも仰しやらないから、あゝいふお客樣は餘計氣を附けて上げなきや不好。本當にお客樣が皆一番さんのやうだと、下宿屋も如何樣に助かるか知れないツてね。始終下でもお噂を申して居るンでございますよ……」

無論半襟二掛の効能とは迂濶の私にも知れた。平生の私の主義から言へば、お糸さんは卑劣だ

と謂はなければならんのに、何故だか私は左程にも思はないで、唯お糸さんの媚びて呉れるのが嬉しかつた。

小女(ちび)がバタ〳〵と駈けて來て、卒然(いきなり)障子をガラッと開けて、

「あの八番さんで、御用が濟むだら、お糸さんに入らッしやいッて。」

「何だい？」

小女(ちび)が生意氣になけ無しの鼻を指して、

「これ……」

「さう。」

お糸さんは挨拶も匆々(そこ〳〵)に私の部屋を出て行つたが、ツイ其處らで立止つた樣子で、

「今お歸り？　大變御緩りでしたね。」

歸つて來たのは隣の俗物らしく、其聲で何だか言ふと、又お糸さんの聲で、

「あら、本當(ほんと)？　本當に買つて來て下すつたの？　まあ、嬉しいこと！　だから、貴方は實が有るッていふンだよ……」

してみると、お糸さんに對つて敬意を表するのは私ばかりでないと見える。

五十六

私がお糸さんに接近する目的は人生研究の爲で、表面上性慾問題とは關係はなかつた。が、お

糸さんも活物、私も死んだ思想に捉はれてゐたけれど、矢張活物だ。活物同志が活きた世界で顔を合せれば、直ぐ其處に人生の諸要素が相轢してハズミといふ物を生ずる。即ち勢だ。此勢を制する人でなければ、人間一疋の通用が出來ぬけれど、私の樣な斗筲輩になると、直ぐ其勢に制せられて了つて、吾は吾の吾でなくなつて、勢の自由になる吾、勢の吾になつて了ふ。困つたものだが、仕方がない。私は人生研究の爲お糸さんに接近しようと思つたのだけれど、接近しようとすると、忽ち妙なハメになつて、二番さんだの八番さんだのといふ番號附けになつてる俗物共の競爭圈内に不覺捲込まれて了つた。又捲込まれざるを得ないのは、半襟二掛ばかりの効能ぢや三日と持たない。直消えて又元の木阿彌になる。二掛の半襟は惜しくはないが、もう斯うなると、勢に乘せられた吾が承知せぬ。憤然となつて二日二晩も考へた末、又一策を案じ出して、今度は晝のお糸さんの手隙の時に、何とか好加減な口實を設けて酒を命じた。酒を命ずればお糸さんが持つて來る、お糸さんが持つて來れば、些との間ならお酌もして呉れる、お糸さんのお酌で、酒を飲むで醉へば、私にだつて些とは思ふ事が言へて打解けられる。思ふ事を言つて打解けて如何する氣だつたか、それは不分明だつたけれども、兎に角打解たかつたので、酒を命じたら、果してお糸さんが來て呉れて、思ふ通りになつた。

「ぢや、何ですね、」と未だ一本も明けぬ中から、私は眞紅になつて、「貴女は一杯喰はされたのだ。」

「大喰はされ！」とお糸さんは烟管を火鉢の角でポンと叩いて、「正可女房子の有る人た思ひま

せんでしたもの。好加減なチヤラツポコを眞に受けて、仙臺くんだり迄引張り出されて、獨身でない事が知れた時にや、如何樣に口惜しかつたでせう。寧そ其時歸ッ了や好かつたんですけど、歸つて來たつて、家が有るンぢや有りませんしさ、人の厄介になつて苦勞する位なら、日蔭者でもまだ其方が勝かと思つたもんですからね、馬鹿されねえ、貴方、言ひなり次第になつて半歲も然うして居たんですよ。さうすると、私の事がいつかお神さんに知れて、死ぬの生るのといふ騷ぎが起つて見ると、元々養子の事だから……」

「養子なんですか？」

「え丶、養子なんですとも。養子だから、ほら、私を棄てなきや、看す〳〵何萬といふ身臺を棒に振らなきやならんでせう？　ですから、出るの引くのと揉め返した擧句が、詰る所私はお金で如何にでもなると見括つたんでせう、人を入て別話を持出したから、私やもう踏むだり蹶たりの目に逢はされて、口惜しくツて〳〵、何だかもうカッと逆上せッ了つて、本當に一時は井戸川へでも飛込んで了はうかと思ひましたよ。」

「御尤です。」

「ですけど、私が死んぢまや、幸手屋の血統は絕えるでせう？　それでは御先祖樣にも、又ね、死んだ親達にも濟まないと思つて、無分別は出しませんでしたけど、餘まり口惜しかつたから、お金も出さうと言つたのを、そんなお金なんぞに目をくれるお糸さんぢやない何か言つて、タンカを切つてね、一文も貰はずに、頭の物なんか賣飛ばして、其を持つて歸つて來たは好かつたけ

ど、其代り今ぢやスッテン〳〵で、髮結錢も伯母さん濟みませんがといふ始末ですのさ。餘程馬鹿ですわねえ。」

「いや、面白い氣象だ。」

「ですから、私は、貴方の前ですけど、もう〳〵男は懲々。そりやねえ、稀には旦那のやうな優しい親切なお方も有りますけど、どうせ私のやうな者の相手になる者ですもの、皆其樣な薄情な碌でなしばかしですわ。」

「いや、御尤もです。」

「まあ、自分の勝手なお饒舌ばかしてゐて、お燗が全然冷め了つた、一寸直して參りませう。」

「御尤もです……」

五十七

お糸さんがお燗を直しに起つた隙に、爰で一寸國元の事情を吹聽して置く。嘗て私が學校を除籍せられた時、父が學資の仕送りを絶つたのは、斯もしたら或は歸つて來るかと思つたからだ。ところが、私が如何にか斯うにか取續いて歸らなかつたので、兩親は獨息子を玉なしにしたやうに歎いて、父の白髮も其時分僅の間に滅切り殖えたと云ふ。伯父が見兼ねて、態々上京して、もう小說家になるなとは言はぬ、唯是非一度歸省して兩親の心を安めろと懇に諭して吳れた。さう言はれて見ると、夫でもとも言兼ねて、私は其時伯父に連れられて久振で歸省したが、父の面を

見るより、心配を掛けた詫をする所か、卒然先づ文學の貴い所以を說いて聽かせて、私は墮落したのぢやない、文學に於て向上の一路を看出したのだ、墮落なんぞと思はれては心外だと喰つて懸ると、氣の練れた父は敢て逆らずに、昔者の己には然ういふ六かしい事は分らぬから、己はもう何にも言はぬ、お前の思ふ通りにしろ。だが、東京へ出てから二年許りの間に遣つた金は、地所を抵當に入れて借りた金だ。己は無學で働きがないから、己の手では到底も返せない。何とかしてお前の手で償却の道を立て吳れ。之を償却せん時には、先祖の遺產を人手に渡さねばならぬ。それではどうもお位牌に對しても濟まぬから、己は始終其が苦になつての……と眼を瞬かれた時には、私も妙な心持がした。で、何にも當はなかつたけれど、其式の負債は直き償却して見せるやうに廣言を吐き、月々なし崩しの金額をも極めて再び出京したが、出京して見ると、物價騰貴に付き下宿料は上る、小遣も餘計に入る、負債償却の約束は不知空約束になつて了つた。その稍實行の緖に就いたのは當り作が出來てからで、夫からは原稿料の手に入る度に多少の送金はしてゐたけれど、夫とても殘らず負債の方へ入れて了ふので、少しも家計の足しにはならなかつた。父は疾うに縣廳の方も罷められて、其後一寸學校の事務員のやうな事もしてゐたが、それも直き又罷められて全く收入の道が絕えたので、父も母も近頃は心細さの餘り、遂に內職に觀世撚を撚り出したと云ふ。私は其頃新進作家で多少賣出した頃だつたから、急に氣が大きくなり、それに天性の見榮坊も手傳つて、矢張某大家のやうに、假令襟垢の附いた物にもせよ、兎に角羽織も着物も對の飛白の銘仙物で、縮緬の兵兒帶をグル／＼巻にし、左程惡くもない眼に金緣眼鏡を掛け、

原稿料を手に入れた時だけ、急に下宿の飯を不味がつて、晩飯には近所の西洋料理店へ行き、髭の先に麥酒の泡を着けて、萬丈の氣燄を吐いてゐたのだから、兩親が內職に觀世撚を撚るといふ手紙を覽た時には、又一寸妙な心持がした。若し此事が夫の六號活字子の耳に入つて、雪江の親達は觀世撚を撚つてゐるさうだ、一寸珍だね、なぞと素破拔かれては餘り名譽でないと、名譽心も手傳つて、急に始末氣を出し、夫からは原稿料が手に入ると、直ぐ多少餘分の送金もして、他の物を撚つても、觀世撚だけは撚つて呉れるなと言つて遣つた。

で、此時もつい二三日前に聊かばかり原稿料が入つた。先月は都合が惡くて送金しなかつたから、責て此內十圓だけは送らうと、紙入の奥に別に紙に包むで入れて置いたのが、お糸さんの事や何や角やに取紛れてまだ其儘になつてゐる。それをお糸さんの身上話を聽くと、ふと想ひ出して、國への送金は此次に延期し、寧そ之をお糸さんに呈して又敬意を表さうかと思つた。が、何だか其では聊か相濟まぬやうな氣もして何となく躊躇せられる一方で、矢張何だか切に……から……敬意を表したくて耐らない。で、お糸さんが軈てお燗を直して持つて來て、さ、旦那、お熱い所を、と德利の口を向けた時だつた、私は到頭耐らなくなつて、しかし何故だか節儉して、十圓の半額金五圓也を呈して、不覺又敬意を表して了つた。

五十八

お糸さんに敬意を表して見ると、もう半端になつたから、國への送金は見合せてゐると、母か

ら催促の手紙が來た。其中に何だか父が加減が惡くて醫者に掛つてゐるとかで、物入が多くて困るとかいふやうな事も書いてあつたが、例の愚癡だと思つて、其内に都合して送ると返事を出して置いた。其時は眞に其積りで強ち氣休めではなかつたのだが、彼此取紛れて不覺其儘になつてゐる一方では、五圓の金は半襟二掛より効能があつて、夫以來お糸さんが非常に優待して呉れるが嬉しい。追々馴染も重なつて常談の一つも言ふやうになる。もう少しで如何にかなりさうに思へるけど、何時迄經つても如何にもならんので、少し焦れ出して、又欲しさうな物を買つて遣つたり、連出して甘い物を食べさせたり、種々してみたが、矢張同じ事で手が出せない。お糸さんといふ人は滅多に手を出せば、屹度甚い恥を搔かすけれど、一度手に入れたら、命懸けになる女だと、何故だか私は獨りで極めてゐたから、危險で手が出せなかつたが、傍から觀れば、もう餘程妙に見えたと見えて、他の客はワイ〳〵いつて騷ぐ。下女迄が私の部屋を覗込んでお糸さんが見えないと、奧樣は、なぞといつて調戯ふやうになる。かうなると、お神さんも目に餘つて、或時何だか厭な事をお糸さんに言つたとかで、お糸さんが憤つてゐた事もある。私は何だか面白いやうな焦心たいやうな妙な心持がする。それで夢中になつて金ばかり遣つてゐたから、一度中譯に聊かばかり送金した限で、不覺國へは無沙汰になつてゐる中に、父の病氣が矢張好くないとて母からは又送金を求めて來る。遂に伯父からも注意が來た。其時だけは私も少し氣が附いて、急いで、書掛けた小說を書上げて若干かの原稿料を受取つたから、明日は早速送金しようと思つてゐた晩に、お糸さんが切りに新富座の當り狂言の噂をして觀たさうな事を言ふ。と、私も何だか

觀せてやり度なつて、芝居だつて觀やうに出つては幾何掛るもんかと、不覺口を滑らせると、お糸さんが例になく大層喜んだ。お糸さんは何を貰つても、澄して禮を言つて、其場では左程嬉しさうな面もせぬ女だつたが、此時ばかりは餘程嬉しかつたと見えて、大層喜んだ。

もう後悔しても取反しが附かなくなつて、止むことを得ず好加減な口實を設けて別々に内を出て、新富座を見物した其夜の事。お糸さんを一足先へ還し、私一人後から漫然と下宿へ歸つたのは、夜の彼此十二時近くであつたらう。もう雨戸を引寄せて、入口の大ランプも消してあつた。跡仕舞をしてゐるお竹が睡たさうな聲でお歸ンなさいと言つたが、お糸さんの姿は見えなかつた。

部屋へ來て見ると、ランプを細くしてもう床も敷つてある。私は桝でお糸さんと膝を列べてゐる時から、妙に氣が燥つて、今夜こそは日頃の望をと、芝居も碌に身に染みなかつた。時々ふと氣が變つて、此樣な女に關係しては結果が面白くあるまいと危ぶむ。其側から直ぐ又今夜こそは是が非でもといふ氣になる。で、今我部屋へ來て床の敷つてあるのを見ると、もう氣も坐ろになつて、餘の事なぞは考へられん。今にも屹度來るに違ひない、來たら……と其事ばかりを考へながら急いで、寢衣に着易へて床へ入らうとして、ふと机の上を見ると、手紙が載せてある。手に取つて見ると、國からの手紙だ。心は狂つてゐても、流石に父の事は氣になるから、手早く封を切つて讀むと、まづ驚いた。

五十九

此手紙で見ると、大した事ではないと思つてゐた父の病氣は其後甚だ宜しくない。まだ醫者が見放したのではないけれど、自分は最う到底も直らぬと覺悟して、切りに私に會ひたがつてゐるさうだ。此手紙御覽次第直樣歸國待入申候と母の手で狼狽へた文體だ。

私は孝行だの何だのといふ事を、道學先生の世迷言のやうに思つて、鼻で遇らつてゐた男だが、不思議な事には、此時此手紙を讀むで吃驚すると同時に、今夜こそはと奮り立つてゐた氣が忽ち萎えて、父母が切りに懷かしく、何だか泣きたいやうな氣持になつて、儘になるなら直にも發ちたかつたが、かうなると當惑するのは、今日の觀劇の費用が思つたよりも嵩むで、元より幾何もなかつた懷中が甚だ輕くなつてゐる事だ。父が病氣に掛つてから、度々送金を迫られても、不覺怠つてゐたのだから、家の都合も嘸ぞ惡からう。今度こそは多少の金を持つて歸らんでは、如何に親子の間でも、母に對しても面目ない。といつて、お糸さんに迷つてから、散々無理を仕盡した今日此頃、もう一文の融通の餘地もなく、又餘裕もない。明日の朝二番か三番で是非發たなきやならんがと、當惑の眼を閉ぢて床の中で凝と考へてゐると、スウと音を偸むで障子を明ける者が有るから、眼を開いて見ると、先刻迄待憧れて今は忘れてゐるお糸さんだ。窃と覗込んで、小聲で、「もうお休みなすつたの?」といひながら、中へ入つて又窃と跡を閉めたのは、十二時過で遠慮するのだつたかも知れぬが、私は一寸妙に思つた。

「どうも有難うございました、」とのめるやうに私の床の側に坐りながら、「好かつたわねえ、」と私と顏を看合せて微笑した。

今日は風呂日だから、歸つてから湯へ入つたと見えて、目立たぬ程に薄りと化粧つてゐる。寢衣か何か、袷に白地の浴衣を襲ねたのを着て、扱をグル〳〵巻にし、上に不斷の羽織をはおつてゐる秩序ない姿も艶めかしくて、此人には調和が好い。

「一本頂戴よ。」といひながら、枕元の机の上の巻烟草を取らうとして、袂を啣へて及腰に手を伸ばす時、仰向きに臥てゐる私の眼の前に、雪を欺く二の腕が近々と見えて、懐かしい女の香が芬とする。

「何だかまだ芝居に居るやうな氣がして相濟まないけど、」とお糸さんが烟草を吸付けてフウと烟を吹きながら、「伯母さんの小言が臺詞に聞えたり何かして、如何なに可笑しいでせう、」と微笑した所は、美しいといふよりは仇ッぽくて、男殺しといふのは斯ういふ人を謂ふのかと思はれた。

一つ二つ芝居の話をしてゐると、下のボン〳〵時計が肝積を起したやうにジリ〳〵ボンといふ。一時だ、一時を打つても、お糸さんは一向平氣で咽喉が乾くとかいつて、私の湯呑で白湯を飲むだり何かして落着いてゐる所は、何だか私が如何かするのを待つてるやうにも思はれる。と、母の手紙で一時萎えた氣が又振起つて、今朝からの今夜こそは卽ち今が其時だと思ふと、漫心になつて、「泊つてかないか？」と私が常談らしくいふと、「さうですねえ。家が遠方だから泊つてきませうか」と、お糸さんも矢張常談らしく言つたけれど、もう讀めた。卒然手を執つて引寄せると、お糸さんは引寄られる儘に、私の着てゐる夜着の上に凭れ懸つて、「如何するのさ？」と、私

の面を見て笑つてゐる……　其時思ひ掛けず「親が大病だのに……」といふ事が、鳥影のやうに私の頭を掠めると、急に何とも言へぬ厭な心持になつて、私は胸の痛むやうに顔を顰めたけれど、影になつてゐたから分らなかつたのだらう、お糸さんは執られた手を窃と離して、「貴方は今夜は餘程如何かしてらツしやるよ」と笑つてゐたが、私が何時迄經つても眼を瞑つてゐるので、「本當にお眠いのにお邪魔ですわねえ。どれ、もう行つて寢ませう。お休みなさいまし」と、會釋して起上つた樣子で、「燈火を消してきますよ」といふ聲と共に、ふツと火を吹く息の音がした。と、何物か私の面の上に覆さつたやうで、暖かな息が微かに頬に觸れ、「憎らしいよ！」と笑を含むだ小聲が耳元でするより早く、夜着の上に投出してゐた二の腕を痛か抓られた時、私はクラ〳〵として前後を忘れ、人間の道義畢竟何物ぞと、嗚呼父は大病で死にかゝつて居たのに……

六十

翌朝は夙く發つ積だつたが、發てなくなつた。尾籠な事には自ら尾籠な法則が有るから、既に一種の關係が成立つた以上は、女に多少の手當をして行かなきやならん――と、さ、私は思はざるを得なかつた。見榮坊だから、金が無くても金の有る風をして、紙入を叩いて遣つて了ふと、もう汽車賃も殘らない。なに、父はまだ危篤といふのぢやなし、一時間や二時間發つのが後れたつて仔細は無からうと、自分で勝手な理窟を附けて、女には内々で朝から金策に歩いたが、出來なかつた。晝前に一寸下宿へ歸ると、留守に國から電報が着いてゐた。胸を轟かして、狼狽てゝ

封を切つて見ると、「父危篤直戻れ」だ。之を讀むと私はわな〳〵と震へ出した。卒然下宿を飛出して、血眼になつて奔走して、辛うじて聊かの金を手に入れたから、下宿へも歸らず、其足で直ぐ東京を發つて、汽車の幾時間を藻搔き通して、國へ着いたのは其晚八時頃であつた。

停車場で車を僦つて家へ急ぐ途中も、何だか氣が燥つて、何事も落着いて考へられなかつたが、片々の思想が頭の中で狂ひ廻る中でも、唯息のある中に一目父に逢ひたい逢ひたいと其ばかりを祈つてゐた。時々ふツと旣う駄目だらうと思ふと、錐でも刺されたやうに、急に胸がキリ〳〵と痛む。何とも言へず苦しい。馴染の町々を通つても、何處を如何車が走るのか分らない。唯車上で身を揉むで、無暗に車夫を急立てた。車夫が何だか腹を立てゝ言つたが、何を言つてるのか、分らない。唯無暗に急立てるばかりだ。

漸くの想で家へ着くと、狼狽てゝ車を飛降りて、車賃も拂つたか、拂はなかつたか、卒然門内へ驅込んで格子戸を引明けると、パッと燈火が射して、其光の中に人影がチラ〳〵と見え、家内は何だか取込んでゐて話聲が諜然と聞える中で、誰だか作さん——私の名だ——作さんが着いた、作さんが、と喚く。何處からか母が駈出して來たから、私が卒然、「阿父さんは？……」と如何やら人の聲のやうな皺嗄聲で聞くと、母は妙な面をしたが、「到頭不好つたよ……」といふより早く泣き出した。私はハッと思ふと、氣が遠くなつて、茫然として母が袖を顏に當て泣くのを視てゐたが、ふと何だか胸が一杯になつて泣かうとしたら、「まあ、彼方へお出でなさい、」と誰だか袖を引張るから、見ると從弟だ。何處へ何しに行くのだか、分つてゐるやうな、分つてゐないやう

な、變な鹽梅だつたが、私は何だか分つてる積で、從弟の跟に從いて行くと、人が大勢車座になつてゐる明かるい座敷へ來た。と、急に私は何か母に聞きたい事が有るのを忘れてゐたやうな氣持がして、母は如何したらうと後を振向く途端に、「おゝ、作か、」といふ聲が俄に寂然となつた座敷の中に聞えたから、又此方を振向くと、其處に伯父が居るやうだ。夫から私は其處に坐つて、何でも漫に其處に居る人達に辭儀をしたやうだつたが、其中に如何いふ譯だつたか、伯父の側へ行く事になつて、側へ行くと、伯父が、「阿父さんも到頭此樣になられた、」といひながら、側に臥てゐる人の面に掛けた白い物を取除けたから、見ると、臥て居る人は父で、何だか目を瞑つてゐる。私は其面を凝と視てゐた。すると、何時の間にか母が側へ來てゐて、泣聲で、「息を引取る迄ね、お前に逢ひたがりなすつてね……」といふのが聞えた。私はふッと目が覺めた、目が覺めたやうな心持がした。あゝ、父は死んでゐる……つい其處に死んでゐる……骨と皮ばかりの瘦果てた其死顏がつい目の前に見える。之を見ると、私は卒然として、「あゝ濟なかつた……」と思つた。此刹那に理窟はない、非凡も、平凡も、何もない。文士といふ肩書の無い白地の尋常の人間に戻り、あゝ、濟なかつた、といふ一念になり、我を忘れ、世間を忘れて、私は……私は泣に泣いた……

六十一

後で段々聞いて見ると、父は殆ど碌な療養もせずに死んだのだ。事情を知らん人は壽命だから

仕方がないと言つて慰めて呉れたけれど、私には如何しても然う思へなかつた。全く私の不心得で、まだ三年や四年は生延びられる所をむざ〳〵殺して了つたやうに思はれてならなかつたから、深く年來の不幸を悔いて、責て跡に殘つた母だけには最う苦勞を掛けたくないと思ひ、父の葬式を濟せてから、母を奉じて上京して、東京で一戶を成した。もう斯う心機が一轉しては、彼樣な女に關係してゐる氣も無くなつたから、女とは金で手を切つて了つた。其時女の素性も始めて知つたが、當人の言ふ所は皆虛構だつた。しかし其樣な事を爰で言ふ必要もない。止めて置く。

で、生來始て稍眞面目になつて再び筆硯に親しまうとしたが、もう小說も何だか馬鹿らしくて些とも書けない。泰西の名家の作を讀むで見ても、矢張馬鹿らしい。此樣な心持で碌な物が出來る筈もないから、評判も段々落ちる、生活も困難になつて來る。もう私もシユン外れだ。此處らが思切り時だらうと思つて、或年意を決して文壇を去つて、人の周旋で今の役所へ勤めるやうになつたが、其後母の希望を容れて、妻を迎へ、子を生ませると、間もなく母も父の跡を追つて彼世へ逝つた。

これが私の今日迄の經驗だ。

つく〴〵考へて見ると、夢のやうな一生だつた。私は元來實感の人で、始終實感で心を苛めてゐないと空疎になる男だ。實感で試驗をせんと自分の性質すら能く分らぬ男だ。それだのに早くから文學に陷つて始終空想の中に漬つてゐたから、人間がふやけて、秩序がなくなつて、眞面目になれなかつたのだ。今稍眞面目になれ得たと思ふのは、全く父の死んだ時に經驗した痛切な實

感のお庇で、即ち亡父の賜だと思ふ。彼實感を經驗しなかつたら、私は何處迄だらけて行つたか、分らない。

文學は一體如何いふ物だか、私には分らない。人の噂で聞くと、どうやら空想を性命とするものゝやうに思はれる。文學上の作品に現はれる自然や人生は、假令へば作家が直接に人生に觸れ自然に觸れて實感し得た所にもせよ、空想で之を再現させるからは、本物でない。寫し得て眞に逼つても、本物でない。本物の影で、空想の分子を含む。之に接して得る所の感じには何處にか遊びがある、即ち文學上の作品にはどうしても遊戯分子を含む。現實の人生や自然に接したやうな切實な感じの得られんのは當然だ。私が始終斯ういふ感じにばかり漬つてゐて、實感で心を引締めなかつたから、人間がだらけて、ふやけて、やくざが愈どやくざになつたのは、或は必然の結果ではなかつたか？　然らば高尚な純正な文學でも、こればかりに溺れては人の子も戕はれる。況んやだらしのない人間が、だらしのない物を書いてゐるのが古今の文壇の、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

（終）

二葉亭が申します。此稿本は夜店を冷かして手に入れたものでございますが、跡は千切れてござりません。一寸お話中に電話が切れた恰好でございますが、致方がございません。

出　産

一大事！　家内が産の氣が附いたやうだといふ。豫て期してゐた事で、今更驚くべき筋ではないが、矢張り驚く。胸がドキ〳〵する。早鐘を撞くとは好く言つたものだと、忙しない中で無駄を思ふ。

斯うなつて見ると、里の阿母さんに泊に來てゐて貰つて好かつた。阿母さんは三人も産だ經驗家だ。謙遜して、もう餘程昔の事で勝手を忘れたと言はれるけれど、それにしても初ての者とは違ふ。萬事此人の差圖を仰いでゐれば、大した間違は有るまいといふ腹があるから、安心はしてゐるやうなものゝ、夫でも卒となると矢張驚く。

早く産婆を迎へにと、老練家の阿母さんも矢張狼狽ると見えて、わな〳〵して急き立てられる。産婆を迎へには下女が行く事と思つてゐたら、下女は湯を沸したり、何や角や家に澤山用が有るから僕に行けと言はれる。さら〳〵行くのを厭ふではないが、一寸妙な氣がした。平生は役所への出入りには、屹度家内が玄關まで送迎する、下女も其後に蹲踞つてお辭儀をする。役所へ行つて課長の前へ出たら、から頭は擧らんが、これでも家では立派な旦那様だ。その旦那様が今や尻引揚げて産婆の所へ駈付けなければならんといふ。何しても一大事に相違ない。

あたふたと家を出た。戸外は眞の闇で、それこそ鼻を抓まれても分らない。何の氣なしに駒下

駄で出て、グチヤリと泥濘へ踏込でから、失敗つた、雨あがりだつけと氣が附いたが、引返して足駄と穿替へる隙も惜しい。えい、どうせ泥れた足だと、其儘遮二無二泥を蹴散して大急ぎで行く。正に是れ大童の體だ。かうなると尻引揚げが尋常の形容詞ばかりではなくなるが、今は其樣な見榮坊を言つてられない。

もう夜も十一時過だから、場末の此處らは商家さん疾に戸を鎖して、往來は人ッ子一人通らぬ。處々の暗黑から突然に犬が吠付て吃驚させられる。忌々しいが、今は犬なんぞを相手に喧嘩してゐる場合ではない。

切々と歩くので、少し汗ばむ。眼鏡がボッと曇つて、先が見えなくなる。氣が急くから歩きながら、外して拭いて又掛けると、直ぐ又ボッとなる。眼鏡にまで馬鹿にされるやうで腹が立つにつけても、隣の細君が恨めしい。産婆は近くにないではないのを、擇りに擇つて態々此樣な遠方のを教へて吳れた其心持が分らぬ。

辛と目指す産婆の家へ來て、倉皇しく戸を敲く。寢入ばなと見えて中々起きない。又敲いたが、矢張り音沙汰がない。怪しからん！　此稼業で世を渡るからは、夜夜中でも攪眠れる事のあるは知れ切た事だに、不覺悟千萬なと、大に憤激して、拳を固めて此度は遠慮會釋なく敲き立てると、漸う睡氣た聲で誰方といふ。しか〳〵のものだが、今にも生れさうだから、直ぐ、大急ぎで、只た今來て吳れと大聲に喚く。まだ目が覺め切らぬかして、不承々々に畏まりましたといふ。それからヤットゴサと起きた氣色で、何かゴト〳〵やつてゐるのは聞えるが、容易に出て來んから、

堪りかねて催促すると、今直き跡から行くから、一歩先へ歸つて吳れといふ。いや、夜道だから待てゐると、居催促の態度を取ると、何かぶつ〳〵言つたが、それは聞えなかつた。

待つ身につらき何とやらと、曾て小謠で聞いたことがある。眞に其通り、待つ身は辛いものだ。後から考へて見ると、なに十分も經たなかつたかも知れぬが、其時は小一時間も待つたかと思ふ頃、潜り戸をガラ〳〵と內から開けて、お待遠さまと面を出したのは、豫て見覺えのある梅干婆。卒然提燈はございませんかといふ。えゝ、つい、持つて來ませんだつたと、成程是は此方の脫かりだから、少し悄ると、婆さん後を振反つて、あの、何や、其處のぶら提燈を出してお吳れ、蠟燭は確か簞笥の抽斗にあつた筈だといふ。此場合提燈なんぞは如何でも好いではないかと思つたが、明けて然うとも言はれず、不服な面を膨らして默つてゐると、やがて睡毫けた若い女の聲で蠟燭がないと云ふ。なに、無い筈はないと言ひながら、婆さん奧へ引込むで了つた。小焦れッたくツて堪らんから、泥溝板を下駄でゴト〳〵踏み鳴らして待つてゐると、蠟燭は矢張り有つて、辛と婆さんが提燈を提げて出て來た。これで兎も角も一段落付いたやうな氣がして、少し安心する。

婆さんと肩を比べて泥濘を辿りながら、出て來る時の光景を話して、もう生れてゐはすまいかと訊くと、婆さんは微笑して、潮時が何とやらして、如何とやらだから、いづれ曉方だと、高を括つて落着いてゐる。妙なことを言ふと思つたが、然う聞くと如何やら此方も幾分か落着いて、少しはお世辭を言つて見る氣になる。なに、稼業の事ですもの、夜中だつて何だつて其樣な事に

厭ひは有りませんと、此婆さん感心だ、斯う見えて中々分曉つてゐる。

　歸つて見ると、成程まだ生れぬと見えて呱々といふ聲はせぬが、其代産婦が呍々唸つてゐる。如何にも苦しさうで、阿母さんの面を見ても心配さうだ。もう斯うなると、頼むは産婆ばかり、何分宜しくと只管頼んで、取敢ず産所へ案内して自分も其處へ坐り込まうとすると、阿母さんが彼方へ行つとれといふ。何故かと訊くと、男が産所に居るものでないといふ。分らん事をいふ、家内にしても連添ふ夫が側に附添つてゐた方が氣丈夫で好さゝうなものだにと思つたが、昔はお産の時は旦那樣は講釋を聽きに行つたり何かして避けたものだとて、産婆も合槌を打つので、不服ではあつたが、茶の間へ引下つて蔭ながら經過に注意してゐると、家内の呍々といふ聲は刻一刻烈しくなる。その聲を聽いてゐると、何だか相濟まぬやうな氣がして、居堪らなくなる。何かの用で出て來られた阿母さんを捉まへて光景を訊くと、面を顰めて、どうも眠産でね、困りましたよ、と言つたまゝ又倉皇と産所へ引返される。

　さあ、眠産といふ事が分らぬ、眠りながら産をするのなら樂でありさうなものを、困りましたよと言はれるからは、困るのに違ひない。難産の事か知ら。若し難産であつたら、何とせう？難産で死ぬことも世にある例、若し然ういふ事にでもなつたら、差詰め此方は準解死人だ。胎兒を殺さねば親の助からぬといふこともある。止むを得ぬ事で、法律上は不論罪でも、道德上では如何ならう？　それもこれも幸ひに免かれたとした所で、まだ心配なは、不具の兒が生れぬとも限らぬ。隻眼であつたり、跛であつたりしては、産むだ親も、生れた兒も、一生泣きを見ねばな

らぬ。あゝ、何卒滿足に産ませたいが、こればかりは人間業には協はぬ事と思ふと、何とやら神佛を拜むで頼みたいやうな氣になる。

餘り心配なので、又出掛けて行つて窃と樣子を訊いて見ると、なに、些とも御心配な事はございません、最う直きお生れなさいますと、婆さんは平氣でゐる。その落着いた面を觀て卒と安心して又茶の間へ引下つては來たが、考へて見ると、どうも不思議でならぬ。もう直き自分に似た者が一人此世へヒヨツコリ出て來るといふ。固より妻を娶つたからは、強ちそれを豫期せんではなかつたが、それでも卒となると矢張り妙な氣がする。必ずしも希望した譯ではなかつたのに、いつの間にか自然と子といふものが出來て、僕は人の親になる、出來た子がいつか又子を持て旋次に人の親になる、かくて生々して人の種は盡きぬと思ふと、天地の妙理が犇と心に應へて、昨日迄は何とも思はなかつた身にも、つく〴〵有神論の確かな踏へ處の有ることを思ふ時、忽ち産所が騷がしくなつて、おぎやアと一聲！

それツと跳起きてうろ〳〵すると、また續けざまにおぎやア〳〵と聞える。もう堪まらなくなつて、前後を忘れて驅附けると、婆さんは僕の面を見るより、お目出度うございます、男のお子さんでございますよ、と吹聽する。男ですよと、阿母さんも莞爾して同じ事をいふ。男でも女でも、そんな事は構はない、無事に生れたのが何よりだと思つてゐる中に、婆さんは商賣柄とて巧に赤ン坊を扱つて、産湯を使はせてゐたが、やがて、まあ、一寸抱して御覽遊ばせと、何やら赤い物に包んだ赤い物を突付けたから、受取つて見ると、ぽか〳〵と生溫かで、むず〳〵と蠢めく。

氣味が惡くなつて早速阿母さんに渡す。阿母さんは受取ると、早速之を其時は最う橫になつてゐた母親に密と抱かせて、男の子でお手柄〳〵と無性に褒めそやす。疲れた面の母親もこれに莞爾して竊と赤ン坊の面を見た。

彼は何と感じたか知らぬが、僕は樂天家ではない。この苦の世の中へ苦を嘗めさせに頼まれもせぬに產ませた我子と思ふと、何とやら誰やらに濟まぬやうな氣もする。これの生先は如何なる事かと思ふと、心細くも感ぜられる。責て滿足に生れた兒なら、我力の及ぶ限り保護を加へて滿足に一人前に育て上げねばならぬと思ふと、我子ながら預り物のやうな氣がして、肅然として頓に責任の重きを感ずる。

お目出度い〳〵と里の阿母さんは妄に目出度がる。

成程生れべきものが恙なく生れたは目出度もあらう。が、生れぬ先の先へ遡つて考へて見ると、人生の意義も分らず、その歸趣も知らず、漫然生殖慾に任せて、己に齊しきものを出來したのは、果して之を目出度い事として慶すべきであらうか、如何か？

此問題は十人の子を持つた中老の今になつても、まだ、解決が附かぬ。

雜　談

文學雜誌宗教雜誌などを見ると、いつも世間の墮落を罵つてゐる。而も其罵り方を見ると中には公憤の餘りとも聞けば聞かれるものも有らうが、多くは同情も何もない、嗚呼とか嗟矣とかうるさい程に疊みかけて歎息の呻聲を揚げながら、其癖少しも熱誠の籠つたとは見えぬ聲、親が子を叱る眞情の聲ではなくて、罵るのを賣物にしたやうな情ない聲だ。人を罵れば何となく自分の位を高めるやうな心地がする、我と我を賞めれば直ぐ己惚の誹を招くけれど、人の非を數へて罵つてゐる分には、盲千人の世の中だから、どうやら罵る者をえらい樣に思ふ者もあらうし、又自分にしても少くも罵つてゐる中だけは、いつもの自分よりもえらいやうな氣がして、己惚心を滿足させるに至極無難の法である。それで其樣に罵るのではないか、トサ餘り罵り方が上調子なので、痛い腹か痛くない腹かは知らぬが探りたくなる位だ。

かういふ罵り聲を聞くたびに、眼の前に浮ぶ人物は、相應の身分のある又は親讓りの財產のある家の息子さんで、子供の時から餘り生活の苦い味を嘗めたことのない、有るに任せて好きな書物を買つて讀み散らした、ト言つてこれと纏つた專門的知識は無いが、兎も角も書物を讀み散らした爲にいつとなく、心を書物に蝕れて了つて、物を見る眼に癖が付いて、我から世間を狹くし、多く人に接せぬから、浮世の事は多く人の噂に聞くばかり、親兄弟に叔父さんに叔母さんにそれ

に朋友二三人と、かういふ境界を浮世と見て、そこに前人未發なら結構だが、餘り珍らしくもないあやふやな理想界を開き、自らは其中に立籠つて人生を超脱してゐたのが、何かの拍子で人間に墜ち來つて、果は雜誌に投書するに至つた人、トかう一息に言つて了はれぬ人が目の前に浮ぶ。

まだ他にも種々のがあらう、が概してかういふ人々の特色は人生の苦い味を知らぬ、隨つて迂濶だ、想遣がない。強ち惡人ではないが、浮世の荒い浪風に浮きつ沈みつ藻騷いてゐる人の腹が分らぬ、分らぬからとてそれを知らうとするでもなく、唯譯もなく大聲あげて嗟憐むべき者よと來る。それで子供かといへば、當人もう三十幾つで、鬢に白髮の五六本は見えるといふ年配、おもへば無殘なやうな心持がする。

しかしこれ等は品の下つた方で、も少し立勝つたのになると、かうばかりでもない。其憤慨する所には至極尤なところもある。なれども、かうした人の癖として偏癖を免れぬ。

天性深く物に感ずる方であるから、隨つて深く考へ入る。深く考へ入つてかうと思ひ得る所があれば、之に心を据ゑるからさして苦痛を覺えぬが、多くはさうはゆかぬ。深く考へれば考へるほど分らなくなる。人は何の爲に此世へ生れたものか、人生の意味は如何であるか、これさへ分れば如何なる苦辛にも耐へようと思ふが、これが分らぬから、心に便る所がなく苦痛が益々苦痛となる。多少精神修養を修めた者は皆覺えのある事であるが、此時が尤も辛い。疑惑が影の如く身に添つて一寸も離れぬ。眠ても覺めてもこれに責められて心の休まる暇がないから、現にも夢の心地、何を食つても甘くなく、何を見ても面白うない。當もない浮世にこんな思をして生きて

ゐるよりは寧そ一思にと思ふことは幾度もある、けれどもさうもならぬは何かこれには仔細があると思はれる。それさへ明らめて了へば、人間はかうまで果敢ないものではあるまいと思はれる、そこで古聖の遺書にしがみ付くやうに縋つて、之に眼を曝す。書いてある事がヒシ〳〵と胸に應へて、此處だ、此處だと思ふ事が何度となくあるけれど、それは一時の事で、能く考へて見ると、どうも其處でもない。また迷ひ出して、藻掻く、のたうち廻る。いや、目も當てられぬ有樣。此間にいろ〳〵の事もあらうが、それは略して、さて此境界をぬけ出すといふ一段が尤も禍機の伏する所で、或は何かの拍子でフッと夜が明けたやうに暗黑の中から光明界に躍り出してたゞもう譯もなく嬉しがる人もある、所謂頓悟といふやつであらう。かと思ふと、又一歩々々と進んで行く中に、次第々々に明るくなつて、遂に全く光明界に出る人もある。これも矢張大歡喜に遭ふ。佛敎から入る人、基督敎から入る人、乃至一種の哲理に宗敎味を加へたものを便つて入つた人と、それ〴〵の境遇に準じて形式を異にするけれど、其光明界に出るまでの順序は大抵こんなものであらうと思ふ。之を心理學的に見たら、錯亂した觀念が比較的十分に整理せられて、其處に一種の心調を得て心的作用に調和が出來たものとでも謂はうか、兎も角も當人は蘇生したやうな心持になつて、大歡喜を得て、安心する。さて身外の物に撞着つてみる、チョイと旨く行く、そこでもう是なら大丈夫と愈々安心して益々厚く信じて了ふが、此處で更に一と工夫を要しはせぬかと思はれるのは、比較的に調和した心になつてゐても、其心には既に癖が着いてはゐぬかと思はれる。喩へば、工夫中に佛敎の感化を多く受けた人は、解脫し得たと思つた後でも、側から其心の

働き樣を見れば、何處か佛教臭い。工夫中に基督敎の感化を多く受けた人も其通り、復活後も何處か基督臭い。雙方を比べてみると、それが殊に能く分る。大に似た處もあるし、又大に似ぬ處もある。何でこんな臭味が着いて來たか、之は大に工夫を要する所であらうと思ふに、誰も餘り之に心を留めぬ。皆安心してゐる、自ら是として他を非とする氣味がある。が、それも強ち無理とばかり言へないのは、銘々の今仕してゐる境涯は容易な事で達し得た境涯でない。殆ど一命を賭して拓き得た境涯であるから必ずしも我執で自是他非と觀ずるのではなく、何ら公平に心を以つて見ても、自然と自是他非と感ぜられるから、觀ぜられる儘に觀じてゐるといふ姿である。雙方の關係は研究すれば面白い點が幾らも有るが、之を研究するは問題外になるから、姑らく他日の事として置いて、さて種々の臭味はあるけれど、兎も角も雙方とも精神家で、精神上の問題には一ト通り苦勞して來たものであるので、世間を見渡すと、非常に墮落してゐる、と見える。此處で自分を顧みて、己の心には癖がある、また不完全である、隨て己の尺度は必ずしも曲つてゐぬとも限らぬ、曲つてゐるかも知れぬ尺度を以て世間を量るには斟酌を要する、墮落したと見たに違はなくとも、果して己の見たやうに墮落してゐるか如何だかと考へ直すものは、まづ千人に一人とあるまい。墮落の原因を研究する段になつてもさうで、十九世紀傳來の物質的文明とか、物質界が精神界を壓倒してゐるのとか、理想の缺乏とか、何とか彼とか、心の癖にひかされて輕率に考へて了つて、墮落の事情を審にせぬ、一ト通りの想像でかうと定めて、もう其儘動かぬものにして了ふ。側から見れば誠に不親切なものであるが、如何いふものか、かうした人はどうも

然うである。で、誰も彼も、意識してゞはなく無意識に、かういふドグマを持つてゐる、皆の墮落したのは薄志弱行からだと。之を敷衍してみれば、墮落すまいと思へば墮落せずとも濟むものを己が心の持ちやう一つで勝手に墮落してゐるといふことになる。明らかに意識してかうと思はなくとも、何となくこんな氣味で、そんなことは餘り深く研究せずして、打棄てゝは置けぬ、匡正せねばならぬとなる。そこで演説ともなれば雜誌ともなつて世間に觸れてみる。觸れて見ると相應に手應はあるやうだけれど、其癖世間は一向頓着せず、ズン／＼と墮落して行くやうに、サ見える。それも其筈で、かうして演説を聞き、雜誌を讀んで感服するのは、現實界と餘り關係のない、多くは同臭味の人で、現實界に出頭沒臥してゐる、現實界を經營して行く實業家、政治家などといふ連中はテンで振顧いてもみぬ。そこで此方は憤激して益々其聲を大にするが、其聲を大にすれば大にする程、自是他非の聲になるばかりで、シンミリと心に沁みるやうな情合は薄れて行く。即ち聽かせようと思ふ世間の耳には益々疎くなつて行くばかりで、偶々其聲が屆くことがあつても、ヘン氣樂な言を言つてゐると、向ふ向いて了ふ。詰りかういふ説法を聽いて感服するものは、まだ浮世の鹽を踏まぬ無垢の青年か、さもなくば現實界の隅に小さくなつてゐる謂はば現實界からは寄生蟲のやうに扱はれる無勢力の人々で、精神界と現實界とはいつまでも相離して、沒交渉で、我は我たり汝は汝たりでサッさと推移つて行く。

　さて果敢ないのは一旦精神界へ足を踏み入れた人の末路で、初の心は大層皆さん氣樂さうに見える。多くは銘々に讀んだ書物の感化を受けて、それ／＼理想を作り上げて、それにあこがれて

騷いでござるやうであるが、しかしそれは一時で、永い目で見てゐると、終まで理想に憧れ通す人は澤山はない。大抵はひどく輕蔑してござる生活の條件といふやつに、からめられて、も少し具體的に言へば、金に困つて自滅して了ふか、さもなければいつの間にか現實界の人となつて終に露命を繫いでござる。すると又後から同じやうな人が何處からともなく出て來て、同じやうな順序を踏んで、所謂精神界を形作つて、同じやうな末路に凋落するから、いつまでも精神界の消滅することもあるまい。又仔細に觀ればいろ〳〵の事情で其間に一盛一衰もあらうけれど、要するに精神界はいつまでも精神界、物質界は何處までも物質界で、其間に何の交渉もなく、喩へば有つても無いに等しい程のものであるとすれば、文學界も宗教界も實業界と無關係で進むとすれば、これで好いものであるか。

僕の見る所では、今日の實世間を動かして行くものは、普通に精神界といふ文學界でもなければ宗教界でもなく、今日の實世間と表裏して存する所の別の精神界である。この精神界こそ今日の社會の原動力で、皆之に由つて活動してゐるので、我々の謂ふ精神界のやうに高尙でないかも知れぬが、其代り佛臭くも哲學臭くもなく、極めて活潑な、生氣の充滿したものである。此精神界を支配する傾向は卽ち時代思潮で、非常な勢力を有つてゐる。それを學者批評家達が精神界とさへ云へば直ぐ藝術とか哲學とか云ふのは間違つてゐる。實世間を動かして行く精神は時代の好尙を示す藝術、形而上問題を扱ふ哲學以外に儼として存してゐる、少くも今の日本ではさうである。

で、今日の此活精神界を支配する傾向は何であるかと云ふと、學者批評家達は直ぐ金力だといふ。しかしそれは皮相の見だ。金力は實力の標號として崇拜するので、金力を崇拜するのは實力を崇拜する所以である。實力は個人に在つては個人の慾、社會に在つては社會の要求を滿足せしむる所以のものである。然らば個人の慾、社會の要求といふものは何であるかといふと畢竟幸福に外ならぬ。社會に在つては矢張最多數の最大幸福、個人に在つては出來るだけ多くの幸福といふのが標準である。而して其幸福といふのは物質上の滿足と謂つてもよいが、詳しく言へば物質の充實に關聯する精神の滿足である。唯物質の充實を喜ぶのではない、物質充實せざれば精神上の滿足を得られないが普通の事で、物質不足に拘らず精神上の滿足を得られるのは寧ろ例外に屬するから、それで物質の充實に對して精神の滿足を求めるので、此希望の要求する人物は高尙でないでもよいが、着實で、理氣なんどは乏しくとも活氣に富んで、理を辨析する智はなくとも、事を處する才幹と膽氣とに富んだ人物、要するに行爲の人として適當な人物を求むるのである。エマーソンの言つたやうに英雄には思想の雄と情感の雄と行爲の雄との區別があるから、行爲を生命とする今日の活動社會は行爲の雄を求むること急であるが、それを求むる標準こそは卽ち時代精神を結晶したもので、尤も研究に價するものであるのに、文學家批評家等の之を等閑に付するは甚だ心得ぬ。

余が言文一致の由來

言文一致に就いての意見、と、そんな大した研究はまだしてないから、寧ろ一つ懺悔話をしよう。それは、自分が初めて言文一致を書いた由來——も凄まじいが、つまり、文章が書けないから始まつたといふ一伍一什の顚末さ。

もう何年ばかりになるか知らん、餘程前のことだ。何か一つ書いて見たいとは思つたが、元來の文章下手で皆目方角が分らぬ。そこで、坪內先生の許へ行つて、何うしたらよからうかと話して見ると、君は圓朝の落語を知つてゐよう、あの圓朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ。

で、仰せの儘にやつて見た。所が自分は東京者であるからいふ迄もなく東京辯だ。即ち東京辯の作物が一つ出來た譯だ。早速、先生の許へ持つて行くと、篤と目を通して居られたが、忽ち礑と膝を打つて、これでいゝ、その儘でいゝ、生じつか直したりなんぞせぬ方がいゝ、とかう仰有る。

自分は少し氣味が惡かつたが、いゝと云ふのを怒る譯にも行かず、と云ふものゝ、內心少しは嬉しくもあつたさ。それは兎に角、圓朝ばりであるから無論言文一致體にはなつてゐるが、茲にまだ問題がある。それは「私が……で厶います」調にしたものか、それとも、「俺はいやだ」調で行つたものかと云ふことだ。坪內先生は敬語のない方がいゝと云ふお說である。自分は不服の

點もないではなかつたが、直して貰はうとまで思つてゐる先生の仰有る事ではあり、先づ兎も角もと、敬語なしでやつて見た。これが自分の言文一致を書き初めた抑もである。

暫くすると、山田美妙君の言文一致が發表された。見ると、「私は……です」の敬語調で、自分とは別派である。卽ち自分は「だ」主義、山田君は「です」主義だ。後で聞いて見ると、山田君は始め敬語なしの「だ」調を試みて見たが、どうも旨く行かぬと云ふので「です」調に定めたといふ。自分は始め、「です」調でやらうかと思つて、遂に「だ」調にした。卽ち行き方が全然反對であつたのだ。

けれども、自分には元來文章の素養がないから、動もすれば俗になる、突拍子もねえことを云やあがる的になる。坪内先生は、も少し上品にしなくちやいけぬといふ。德富さんは(其の頃『國民之友』に書いたことがあつたから)文章にした方がよいと云ふけれども、自分は兩先輩の說に不服であつた、と云ふのは、自分の規則が、國民語の資格を得てゐない漢語は使はない、例へば、行儀作法といふ語は、もとは漢語であつたらうが、今は日本語だ、これはいゝ。併し擧止閑雅といふ語は、まだ日本語の洗禮を受けてゐないから、これはいけない。磊落といふ語も、さつぱりしたといふ意味ならば、日本語だが、石が轉つてゐるといふ意味ならば日本語ではない。日本語にならぬ漢語は、すべて使はないといふのが自分の規則であつた。日本語でも、侍る的のものは已に一生涯の役目を終つたものであるから使はない。どこまでも今の言葉を使つて、自然の發達に任せ、やがて花の咲き、實の結ぶのを待つとする。支那文や和文を强ひてこね合せよう

とするのは無駄である、人間の私意でどうなるもんかといふ考であつたから、さあ馬鹿な苦しみをやつた。

成語、熟語、凡て取らない。僅に參考にしたものは、式亭三馬の作中にある所謂深川言葉といふ奴だ。「べらぼうめ、南瓜畑に落こちた凧ぢやあるめえし、乙うひつからんだことを云ひなさんな」とか、「井戸の釣瓶ぢやあるめえし、上げたり下げたりして貰ふめえぜえ」とか、「紙幟(のぼり)の鍾馗といふもめッけへした中揚底で折がわりい」とか、乃至は「腹は北山しぐれ」の、「何で有馬の人形筆」のといつた類で、いかにも下品であるが、併しポエチカルだ。俗語の精神は玆に存するのだと信じたので、これだけは多少便りにしたが、外には何にもない。尤も西洋の文法を取りこまうといふ氣はあつたのだが、それは言葉の使ひざまとは違ふ。

當時、坪內先生は少し美文素を取り込めといはれたが、自分はそれが嫌ひであつた。否寧ろ美文素の入つて來るのを排斥しようと力めたといつた方が適切かも知れぬ。そして自分は、有り觸れた言葉をエラボレートしようとかゝつたのだが、併しこれは遂(と)う／＼不成功に終つた。恐らく誰がやつても不成功に終るであらうと思ふ、中々困難だからね。自分はかうして詰らぬ無駄骨を折つたものだが……。

思へばそれも或る時期以前のことだ。今かい、今はね、坪內先生の主義に降參して、和文にも漢文にも留學中だよ。

余が飜譯の標準

飜譯は如何様にすべきものか、其の標準は人に依つて各異ならうから、もとより一概に云ふことは出來ぬ。されば、自分は、自分が從來やつて來た方法について述べることゝする。一體、歐文は唯だ讀むと何でもないが、よく味うて見ると、自ら一種の音調があつて、聲を出して讀むと抑揚が整うてゐる。卽ち音樂的(ミユージカル)である。だから、人が讀むのを聞いてゐても中々に面白い。實際文章の意味は、默讀した方がよく分るけれど、自分の覺束ない知識で充分に分らぬ所も、聲を出して讀むと面白く感ぜられる。これは確かに歐文の一特質である。

處が、日本の文章にはこの調子がない。一體にだら〳〵して、默讀するには差支へないが、聲を出して讀むと頗る單調(モノトナス)だ。啻に抑揚などが明らかでないのみか、元來讀み方が出來てゐないのだから、聲を出して讀むには不適當である。

けれども、苟くも外國文を飜譯しようとするからには、必ずやその文調をも移さねばならぬと、これが自分が飜譯するについて、先づ形の上の標準とした一つであつた。

そこで、コンマやピリオドの切り方などを研究すると、早速目に着いたのは、句を重ねて同じことを云ふことである。一例を擧ぐれば、マコーレーの文章などによくある in spite of の如きはそれだ。意味から云へば、二つとか三つとか、もしくは四つとかで十分であるものを、音調の

關係からもう一つ云ひ添へるといふことがある。併し意味は既に云ひ盡してあるし、もとより意味の違つたことを書く譯には行かぬから、仕方なしに重複した餘計のことを云ふ。

これは語の上にもあることで、日本語の「やたらむしやう」などはその一例である。或は「強く嚴しく彼を責めた」とか、或は、「優しく角立たぬやうに說得した」とか云ふ類は、屢々歐文に見る同一例である。これらは凡て文章の意味を明らかにする以外、音調の關係からして、副詞を入れたいから入れたり、二つで充分に足りてゐる形容詞を、も一つ加へて三つとしたりするのである。コンマの切り方なども、單に意味の上から切るばかりでなく、文調の關係から切る場合が少くない。

されば、外國文を飜譯する場合に、意味ばかりを考へて、これに重きを置くと原文をこはす虞がある。須らく原文の音調を呑み込んで、それを移すやうにせねばならぬと、から自分は信じたので、コンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、譯文にも亦ピリオドが一つコンマが三つといふ風にして、原文の調子を移さうとした。殊に飜譯を爲始めた頃は、語數も原文と同じくし、形をも崩すことなく、偏へに原文の音調を移すのを目的として、形の上に大變苦勞したのだが、さて實際はなか〳〵思ふやうに行かぬ。中にはどうしても自分の標準に合はすことの出來ぬものもあつた。で、自分は自分の標準に依つて譯する丈けの手腕がないものと諦らめても見たが、併しそれは決して本意ではなかつたので、其後とても長く形の上には、此の方針を取つてをつた。

處で出來上つた結果はどうか、自分の譯文を取つて見ると、いや實に讀みづらい、佶倔聱牙だ。ぎくしやくして如何にとも出來榮えが惡い。從つて世間の評判も惡い。偶々賞美して吳れた者もあつたけれど、おしなべて非難の聲が多かつた。併し私が苦心をした結果、出來損つたといふ心持を呑み込んで、此處が失敗してゐると指摘した者はなく、また、此處は何の位まで成功したと見て吳れた者もなかつた。だから、譽められても標準に無交涉なので嬉しくもなければ、譏られても見當違ひだから、何の啓發される所もなかつた。いはゞ、自分で獨り角力を取つてゐたので、實際毀譽褒貶以外に超然として、唯だ或る點に目を着けて苦勞をしてゐるのである。といふのは、文學に對する尊敬の念が强かつたので、例へばツルゲーネフが其の作をする時の心持は、非常に神聖なものであるから、これを飜譯するにも同樣に神聖でなければならぬ。就ては、一字一句と雖も、大切にせなければならぬやうに信じたのである。

併し乍ら、元來文章の形は自ら其の人の詩想に依つて異なるので、ツルゲーネフにはツルゲーネフの文體があり、トルストイにはトルストイの文體がある。其他凡そ一家をなせる者には各獨特の文體がある。この事は日本でも支那でも同じことで、文體は其の人の詩想と密着の關係を有し、文調は各自に異つてゐる。從つてこれを飜譯するに方つても或る一種の文體を以て何人にでも當て嵌める譯には行かぬ。ツルゲーネフはツルゲーネフ、ゴルキーはゴルキーと、各別にその詩想を會得して、嚴しく云へば、行住座臥、心身を原作者の儘にして、忠實に其の詩想を移す位でなければならぬ。是れ實に飜譯における根本的必要條件である。

今、實例をツルゲーネフに取つてこれを云へば、彼の詩想は秋や冬の相ではない、春の相である。春も初春でもなければ中春でもない、晩春の相である。丁度櫻花が爛熳と咲き亂れて、稍々散り初めようといふ所だ。遠く霞んだ中空に、美しくおぼろ〳〵とした春の月が照つてゐる晩を、兩側に櫻の植ゑられた細い路を辿るやうな趣がある。約言すれば、艷麗の中にどつか寂しい所のあるのが、ツルゲーネフの詩想である。そして、其の當然の結果として、彼の小說には全體に其の氣が行き渡つてゐるのだから、これを飜譯するには其の心持を失はないやうに、常に其の人になつて書いて行かぬと、往々にして文調にそぐはなくなる。此の際に在つては、徒らにコンマやピリオド、又は其の他の形にばかり拘泥してゐてはいけない。先づ根本たる詩想をよく呑み込んで、然る後、詩形を崩さずに飜譯するやうにせなければならぬ。

實際自分がツルゲーネフを飜譯する時は、力めて其の詩想を忘れず、眞に自分自身其の詩想に同化してやる心算であつたのだが、どうも旨く成功しなかつた。成功しなかつたとは云へ、標準は矢張り其處にあつたのである。唯だ、自分が其の間に種々と考へて見ると、一體、自分の立てた標準に法つて飜譯することは、必ずしも出來ぬと斷言はされぬかも知れぬが、少くとも自分に取つては六ケ敷いやり方であると思つた。何故といふに、第一自分には日本の文章がよく書けない、日本の文章よりはロシヤの文章の方がよく分るやうな氣がする位で、即ち原文を味ひ得る力はあるが、これをリプロヂュースする力が伴うてをらないのだ。

で、外に飜譯の方法はないものかと種々研究して見ると、ジュコーフスキー一流のやり方が面

白いと思はれた。ジュコーフスキーはロシアの詩人であるが、寧ろ飜譯家として名を成してゐる。バイロンを多く譯してゐるが、それが妙に巧い。尤も當時のロシアは、其の社會狀態が小バイロンを盛んに生んだ時代で、殊にジュコーフスキーの如きは、鐵中錚々たるものであつたから、求めずしてバイロンの詩想と合致するを得て、大に成功したのかも知れぬが、兎に角其の譯文は立派なロシア文となつてゐる。

けれども、これをバイロンの原詩と比べて見ると、其の言ひ方が大變違ふ、原文の仄起を平起としたり、平起を仄起としたり、原文の韻のあるのを無韻にしたり、或は原文にない形容詞や副詞を附けて、勝手に剪裁してゐる。卽ち多くは原文を全く崩して、自分勝手の詩形とし、唯だ意味だけを譯してゐる。處が其の兩者を讀み比べて見るとどうであらう。英文は元來自分には少しおかつたるい方だから、餘り大口を利く譯には行かぬが、兎に角原詩よりも譯の方が、趣味も詩想もよく分る、原文では十遍讀んでも分らぬのが、譯の方では一度で種々の美所が分つて來る。しかも其のイムプレッションを考へて見ると、如何にもバイロン的だ。卽ちこれを要するに、覺束ない英語でバイロンを味ふよりは、ジュコーフスキーの譯を讀む方が勞少くして得る所が多いのである。

其處で自分は考へた、飜譯はかうせねば成功せまい、自分のやり方では、形に拘泥するの結果筆力が形に縛られるから、讀みづらく窮屈になる。これは宜しくジュコーフスキーの如く、形は全く別にして、唯だ原作に含まれたる詩想を發揮する方がよい。とかうは思つたものゝ、さて自

分は臆病だ、そんならと云うてこれを決行する事が出來なかつた。何故かと云ふに、ジュコーフスキー流にやるには、自分に充分の筆力があつて、よしや原詩を崩しても、その詩想に新詩形を附することが出來なくてはならぬのだが、自分にはこの筆力が覺束ないと思はれたからだ。從來やり來つた飜譯法で見ると、よし成功はしない乍らも、形は原文に捉つてゐるのだから、非常にやり損ふことがない。けれども、ジュコーフスキー流にやると、成功すれば光彩燦然たる者であるが、もし失敗したが最後、これほど見じめなものはないのだから、餘程自分の手腕を信ずる念がないとやりきれぬ。自分はさすがにそれほど大膽ではなかつたので、どうも險呑に思はれて斷行し得なかつた。で、依然舊飜譯法でやつてゐたが……

併しそれは以前自分が眞面目な頭で、飜譯に從事した頃のことである。近頃のは、いやもうお話しにならない。

私は懐疑派だ

私は筆を執つても一向氣乘りが爲ぬ。どうもくだらなくて仕方がない。「平凡」なんて、あれは試驗をやつて見たのだね。ところが題材の取り方が不充分だつたから、試驗もとう〱達しなくつて了つた。充分に達しなかつたといふのは、サタイアになつたからだ。その意ではなかつたのが、どうしても諷刺になつて了つた。

「其面影」の時には生人形を拵へるといふのが自分で付けた註文で、もと〱人間を活かさうといふのだから、自然、性格に重きを置いたんだが、今度の「平凡」と來ちや、人間そのものゝ性格なんざ眼中に無いんさ、丸ッきり無い譯ではないが、性格はまア第二義に落ちて、それ以外に睨んでゐたものがある。一言すれば、それは色々の人が人生に對する態度だな……人間そのものではなくて、人間が人生に對する態度……といふと何だか言葉を弄するやうな嫌ひがあるが、つまり具體的の一箇の人ぢやなくて、ある一種の人が人生に對する態度だ、而してその一種の人とは卽ち文學者……必ずしも今の文學者ばかりぢやなく、凡そ人間在つて以來の文學者といふ意味も幾らか含ませたつもりだ。だから今度の作では那樣關係ばかりを眼に見てゐて、人間を活躍させようなんぞといふ氣もなけりや、從つて活躍もしなかつた。これが「其面影」と「平凡」とを創作した時の、私の態度の運ひさ。

だが、要するに、書いてゐてまことにくだらない。子供の戰爭ごッこをやッたり、飯事をやる、丁度さう云つた心持だ。そりや私の技倆が不足な故もあらうが、併しどんなに技倆が優れてゐたからつて、眞實の事は書ける筈がないよ。よし自分の頭には解つてゐても、それを口にし文にする時にはどうしても間違つて來る、眞實の事はなか／＼出ない、髣髴として解るのは、各自の一生涯を見たらばその上に幾らか現はれて來るので、小說の上ぢや到底僞ッぱちより外書けん、と斯う頭から極めて掛つてゐる所があるから、私にや彌々眞劍にやなれない。

併しながら、斯う云ふと、私一人を以て凡ての人を律するやうに取られるかも知らんが、さう云ふ心持でもないんだ。私一人がいけないんだね。たゞ自分がさういふ心持で、筆を持つちやどうしても眞劍になれんから、なれるといふ人の心持が想像されない。眞の文學者の心持が解らん。だから眞劍になれるといふ人があれば私は疑ふ。が、單に疑ふだけで、決してその心持にやなれぬと斷定するまでの信念を持つてゐる譯でもない。雖然どう考へても、例へば此間盜賊に白刃を持つて追掛けられて怖かつたと云ふ時にや、其人は眞實に怖くはないのだ。怖いのは眞實に追掛けられてゐる最中なので、追想して話す時にや旣に怖さは餘程失せてゐる。こりや誰でもさうなきやならんやうに思ふ。私も同じ事で、直接の實感でなけりや眞劍になるわけには行かん。ところが小說を書いたり何かする時にや、この直接の實感といふ奴が起つて來ない。人生に對するのが盜賊に追はれた時の心持になつて了ふ。議論から考へて見ると、人生といふものが何も具體的にそこに轉がつてゐる譯ぢやない。斯うやつて御互に坐つてゐるのも亦人生に漬かつてゐるのだ

から、人生に對する感を持たれぬといふ筈もない。だから追想とか空想とかで作の出來る人ならば兎も角、私にやどうしても書きながら實感が起らぬから眞劍になれない。古い說かも知らんが私の知つてる限りぢや、今迄の美學者も實感を藝術の眞髓とはせず、空想が卽ち本態であるとしてゐる。この空想とは、例の賊に追はれたことを後から追懷する奴なんだ。さうすると小說は第二義のもので、第一義のものぢやなくなつて來る。否、小說ばかりぢやない、一體の人生觀といふ奴が私にや然う思へるんだよ……思へると云ふと語弊があるが、那樣氣がするのだ。どうも莫迦莫迦しくてね。だから作をする時にや、精神は非常に緊張させるけれども、心には遊びがある。丁度、擊劍で丁々と擊合つては居るが、つまり眞劍勝負ぢやない、その心持と同なじ事だ。こんな風だから、他人は作をしてゐねば生活が無意味だといふが、私は作をしてゐれば無意味だ、して居らんと大に有意味になる。この相違を來すにや何か相當の原因が無くばなるまい。

私は二十世紀の文明は皆な無意義になるんぢやないかと思ふ。何と云つても今はまだレフレクションの影響を免がれてゐない。十九世紀で暴威を逞くした思索の奴隷になつてゐたんで、それを彌々脫却する機會に近づいてゐるらしく見える。新理想とか何とか云ひ出すな、まだレフレクションに捉はれてる證據さ。併しさすがに以前の理想では滿足出來ん所から、新理想主義になつて來たんだ。文學の方で最近の傾向はシムボリズムとか、ミスチシズムとか云ふのだが、イズムの中に彷徨いてる間や未だ駄目だね。象徵主義で云ふ靈肉一致も思想だけで、眞實一致はして居らんぢやないか。で、私は露語の所謂ストリヤッフヌスト(身震ひする)と云つたやうな時代・

…つまりこびり着いて居る思想の血を沸つて、新たな清い生活に入らうとする過渡の時代のやうに今を思ふ。思想ぢや人生の意義は解らんといふ結論までにや疾くに達してゐるくせに、まだまだ思想に未練を殘して、やはり其から蟬脱することが出來ずに居るのが今の有様だ。文學が精神的の人物の活動だといふが、その「精神」が何となく有難く見えるのは、その餘弊を受けて居るんで、靈肉一致どころぢやない、よほど靈が勝つてる證據だ。だからシムボリストでも、思想では靈肉一致だらうが、自分の存在では未だ其處までは行つて居らんよ。そんなら行き着いた先きは何うなるかと云ふに、そりや想像は一寸付かん。第二義から第一義に行つて靈も肉も無い……文學が高尙でも何でも無くなる境涯に入れば偖てどうなるかと云ふに、それは私だけにや大概の見當は付いてゐるやうにも思はれるが、ま、ま、殆ど想像が出來んと云つて可いな。――たゞ何だか遠方の地平線に薄ぼんやりとあかるく夜が明けかゝつてゐるやうな所が見えるばかりだ。

未知の神（アンノーン・ゴッド）、未知の幸福（アンノーン・ハッピネス）――これは象徴派（シンボリスト）のよく口にする所だが、あすこいらは私と同じ傾向に來て居るんぢやないかと思ふね。併し彼等はまるで今迄とは性質の變つた思ひもかけぬ神様や幸福が先きにあるやうに考へてるらしいが、私はさうは思はん。我々が斯うして生きてるのは卽ち「アンノーン・ハッピネス」ぢやないか。たゞ氣が付かずに迷つてるだけだ。聖人は赤兒の如しといふ言葉が其に幾らか似た事情で、かねて成り度いと望んでた聖人に彌々成つて見れば、やはり子供の心持に還る。これ變つたと云へば大に變り、變らんと云へば大に變らん所ぢやないか。だから先きへばかり眼を向けるのが抑の迷ひ、偶には足許も見ては何うか。すると「いや、此儘

で幸福だ」といふやうな事がありはせんか、と、まア思ふんだな。

私は何も佛を信じてる譯ぢやないが、禪で悟を開くとか、見性成佛とかいつた趣きが心の中には有る。そんなら今が幸福だと滿足して、此上に社會改良も何も不必要かと云ふに然うでもない、大變パラドクサルになつて了つて……ある意味ぢや此儘幸福だが、他の意味ぢや不幸福だ。一見矛盾してゐるやうだが私の心では爲て居らん。こゝが象徵派（シムボリスト）と同じ所へ來てゐる證據ぢやないかと思ふ。だから人が文學や哲學を有難がるのは餘程後れてゐやせんかと考へられる。第一其等が有難いと云ふな、僞の有難いんだ。何となれば、文學哲學の價値を一旦根底から疑つて掛らんけりや、眞の價値は解らんぢやないか。ところが日本の文學の發達を考へて見るに、果してさう云ふモーメントが有つたか、有るまい。今の文學者なざ殊に西洋の影響を受けて、いきなり文學は有難いものとして擔ぎ廻つて居る。これぢや未だ〳〵途中だ。何にしても、文學を尊ぶ氣風を一旦壞して見るんだね。すると其敗滅（ルーインス）の上に築かれて來る文學に對する態度は「文學も惡くはないな！」ぐらゐな處（とこ）になる。心持ちは第一義に居ても、人間の行爲は第二義になつて現はれるんだから、ま、文學でも仕方がないと云ふやうに、價値が定（き）まつて來るんぢやないかと思ふ。

一寸親子の愛情に譬へて見れば、自分の兒は他所の兒より賢くて行儀が可いと云ふ心持は、濁つて垢拔けのしない心持である。然るに垢拔けのした精美（リファインド）された心持で考へると、自分の兒は可愛いには違ひないが、缺點も仲々ある、どうしても他所の兒の方が可い、併し可愛いとなる。これと同じ事で、文學にしがみ付いて、其でなきや夜も日も明けぬと云ふな、眞に文學を愛するも

んぢやないね。今の文學者が文學に對する態度は眞面目になつたと云ふが、眞面目ぢやなくて熱心になつただけだらう。法華信者が偏頗心で法華に執着する熱心、碁客が碁に對する凝り方、那樣(そんな)のと同樣で、自分の存在は九分九厘は遊んでゐるのさ。眞面目と云ふならば、今迄の文學を破壞する心が、一度はどうしても出て來なくちやならん。

だから私の態度は……私は到底文學者ぢやない。併し文學が兒戲に類すると云ふ話と、今の話は別だよ。たゞ批評をしてみると、一寸そんな事を云つて見度くなるのだね。

私は、まア、懷疑派(スケプチスト)だ。第一論理(ロジック)といふ事が馬鹿々々しい。思想之法則(ロー・オブ・ソート)は人間の頭に上る思想を整理(アドヂャスト)するだけで、其が人間の眞生活とどれだけの關係があるか、心理學上人間は思想だけぢやない。精神活動力(メンタル・エナージー)の現はれ方には情もあれば知もあり意もある。それを思想だけ整理しても駄目ぢやないか。成程、相等しき物は同一なりは尤もの次第で、他に考へやうもないが、併し「何故(ホワイ)」といふ觀念が出て來ると、私はそれに依賴されなくなる。心理學上の識覺(コンシアスネス)について云つて見ても、識覺に上らぬ動き（アンダー・コンシアス・ウオーク）が幾らあるか知れぬ。反射的動作(レフレクチブ・アクション)なぞは其卑近の一例で、斯んな心持がする……云々と云ふ事も亦其働きだ。だから識覺の上にのぼつて來る思想だけぢや、到底人間全體の型は付けられない。ぢや、何うすりや好いかと云ふに、矢張りそりや解らんよ。たゞ手探りでやつて見るんだ。要するに人間生きてる以上は思想を使ふけれども、それは便宜の爲に使ふばかり。と云ふ考へだから、私の主義は思想の爲の思想(シンキング・フオーワ・シンキング)でもなけりや藝術の爲の藝術(アート・フオーワ・アート)でもなく、また科學の爲の科學(サイアンス・フオーワ・サイアンス)でもない。人生の爲の思想、人生の爲の藝

術、將た人生の爲の科學なのだ。

人生(ライフ)、々々(ライフ)といふが、人生(ライフ)た一體何だ。一個の想念(ノーション)ぢやないか。今の文學者連中に聞き度いのは、よく人生に觸れなきや不可と云ふ、其人生だ。作物を讀んで、こりや何となく身に浸みるとか、これや何となく急所に當らぬとかの區別はある。併しそれが直ちに人生に觸れる觸れぬの標準となるんなら、大變輕率のわけぢやないか。引緊つた感を起させる、起させぬの別と、人生に觸れる觸れぬとの間にや、大なるギヤップが有りやせんか。私はどうも那樣(そんな)氣がするね。觸れる云々は形容詞に過ぎんやうに思ふ。哲學上の見解から小說と人生との接觸を見たんではないらしい。にも係らず其無意味のことに意味をつけて、やれ觸れたの、やれ人生の眞髓は斯うだのと云ふ、一片の形容詞が何時の間にか人生觀と早變りをするのは、これ何とも以て不思議の至りさ。

いや、何時のまにか私も大氣焰を吐いて了つて。先づこゝらで御免を蒙らう。

予が半生の懺悔

私の文學上の經歷――なんていつても、別に光彩のあることもないから、話すんなら、寧そ私の昔からの思想の變遷とでもいふことにしよう。いはゞ、半生の懺悔談だね……いや、この方が罪滅しになつて結句いゝかも知れん。

そこでと、第一になぜ私が文學好きなぞになつたかといふ問題だが、それには先づロシア語を學んだいはれから話さねばならぬ。それはかうだ――何でも露國との間に、かの樺太千島交換事件といふ奴が起つて、だいぶ世間がやかましくなつてから後、『內外交際雜誌』なんてのでは、盛んに敵愾心を鼓吹する。從つて世間の輿論は沸騰するといふ時代があつた。すると、私がずつと子供の時分からもつてゐた思想の傾向――維新の志士肌ともいふべき傾向が、頭を擡げ出して來て、卽ち、慷慨愛國といふやうな輿論と、私のそんな思想とがぶつかり合つて、其の結果、將來日本の深憂大患となるのはロシアに極つてる。こいつ今の間にどうにか禦いで置かなきやいかんわい――それにはロシア語が一番に必要だ。と、まあ、こんな考からして外國語學校の露語科に入學することゝなつた。

で、文學物を見るやうになつたのは、語學校へ入つて、右のやうな一種の帝國主義に浮かされて、語學を研究してゐる內に自らその必要が起つて來たので。といふのは、當時の語學校はロシ

アの中學校同樣の課目で、物理、化學、數學などの普通學を露語で教へる傍、修辭學や露文學史などもやる。所が、この文學史の教授が露國の代表的作家の代表的作物を讀まねばならぬやうな組織であつたからである。

する中に、知らず識らず文學の影響を受けて來た。尤もそれには無論下地があつたので、いはば、子供の時からある一種の藝術上の趣味が、露文學に依つて油をさゝれて自然に發展して來たので、それと一方、志士肌の瘤した慷慨熱――この二つの傾向が、當初のうちはどちらに傾くともなく、殆ど平行して進んでゐた。が、漸く帝國主義の熱が醒めて、文學熱のみ獨り熾んになつて來た。

併し、これは少しく說明を要する。

私のは、普通の文學者的に文學を愛好したといふんぢやない。寧ろロシアの文學者が取扱ふ問題、卽ち社會現象――これに對しては、東洋豪傑流の肌ではまるで頭に無かつたことなんだが――を文學上から觀察し、解剖し、豫見したりするのが非常に趣味のあることゝなつたのである。で、面白いといふことは唯だ趣味の話に止まるが、その趣味が思想となつて來たのが卽ち社會主義(ソシアリズム)である。

だから、早く云つて見れば、文學と接觸して孵れ〳〵になつて來るけれども、それが始めは文學に入らないで、先づ社會主義に入つて來た。つまり文學趣味に激成されて社會主義になつたのだ。で、社會主義といふことは、實社會に對する態度をいふのだが、同時にまた、一方において、

人生に對する態度、乃至は人間の運命とか何とか彼とかいふ哲學的趣味も起つて來た。が、最初の頃は純粋に哲學的では無かつた――寧ろ文明批評とでもいふやうなもので、それが一方に在る。そして、現世の組織、制度に對しては社會主義が他方に在る。と、まあ、源は一つだけれども、こんな風に別れて來てゐたんだ。

社會主義を抱かせるに關係のあつた露國の作家は、それは幾つもあつた。ツルゲーネフの作物、就中「ファーザース・エンド・チルドレン」中のバザーロフなんて男の性格は、今でも頭に染み込んでゐる。その他チェルヌイシェーフスキー、ヘルッエン、それから露國の作家ぢやないがラッサール、これらはよく讀んだものだ。

勿論、社會主義といつたところで、當時は大眞面目であつたのだが、今考へると、頗る幼稚なものだつたのだ。例へば、政府の施政が氣に喰はなんだり、親達の干渉をうるさがつたり、無暗に自由々々と絶叫したり――まアすべての調子がこんな風であつたから、無論官立の學校も蟲が好かん。處へ、語學校が廢されて商業學校の語學部になる。それに僅かの間で、語學部もなくなつて、その生徒は全然商業學校の生徒にされて了ふ。と、私はぷいと飛出して了つた。その時、親達は大學に入れと頻りに勸めたが、官立の商業學校に止まらなかつたと同樣に、官立の大學にも入らなかつた。で、終には、親の世話になるのも自由を拘束されるんだといふので、全く其の手を離れて獨立獨行で勉强しようといふつもりになつた。

が、かうなると、自分で働いて金を取らなきやならん。そこであの「浮雲」も書いたんだ。尤

も「浮雲」以前にも飜譯などはある。今もいつたツルゲーネフの「ファーザース・エンド・チルドレン」の冒頭を、少々ばかり譯したことなどもあるが、坪内さんに見せたばかりで物にはならなかつた。「浮雲」にはモデルがあつたかといふのか？　それは無いぢやないが、モデルはほんの參考で、引寫しにはせん。いきなりモデルを見附けてこいつは面白いといふやうなのでは勿論無い。さうぢやなくて、自分の頭に、當時の日本の青年男女の傾向をぼんやりと抽象的に有つてゐて、それを具體化して行くには、どういふ風の形を取つたらよからうか。といろ〳〵工夫をする場合に、誰か餘所で會つた人とか、自分の豫て知つてる者とかの中で、稍々自分の有つてる抽象的觀念に脈の通ふやうな人があるものだ。するとその人を先づ土臺にしてタイプに仕上げる。勿論、その人の個性（インディビデュアリティ）はあるが、それを捨てゝ了つて、その人を純化してタイプにして行くと、タイプはノーションぢやなくて、具體的のものだから、それ、最初の目的が達せられるといふ譯だ。この意味からだと「浮雲」にもモデルが無いぢやないが、私のいふモデルと、世間のそれとは或は意味が違つてるかも知れん。

兎に角、作の上の思想に、露文學の影響をうけた事は拒まれん。ベーリンスキーの批評文などを愛讀してゐた時代だから、日本文明の裏面を描き出してやらうと云ふ樣な意氣込みもあつたので、あの作が、議論が土臺になつてるのも、つまりそんな譯からである。文章は、上卷の方は、三馬、風來、全交、饗庭さんなぞがごちや混ぜになつてる。中卷は最早日本人を離れて、西洋文を取つて來た。つまり西洋文を輸入しようといふ考へからで、先づドストエフスキー、ガンチャ

ロフ等を學び、主にドストエフスキーの書方に傾いた。それから下卷になると、矢張多少はそれ等の人々の影響もあるが、一番多く眞似たのはガンチャロフの文章であつた。

さて「浮雲」の話の序でだが、前に金を取りたい爲にあれを作つたと云つた。然う云つて了へば生優しい事だが、實はあれに就いては人の知らない苦悶をした事がある。

私は當時「正直」の二字を理想として、俯仰天地に愧ぢざる生活をしたいといふ考へを有つてゐた。この「正直」なる思想は露文學から養はれた點もあるが、もつと大關係のあるのは、私が受けた儒教の感化である。話は少し以前に遡るが、私は帝國主義（インペリアリズム）の感化を受けたと同時に、儒教の感化をも餘程蒙つた。だから一方に於ては、孔子の實踐躬行といふ思想がなかなか深く頭に入つてる。……いはゞまあ、上つ面の浮かれに過ぎないのだけれど、兎に角上つ面で熱心になつてゐた。一寸、一例を擧げれば、先生の講義を聽く時に私は兩手を突かないぢや聽かなんだものだ。これは先生の人格よりか「道」その物に對して敬意を拂つたので。かういふ宗教的傾向、哲學的傾向は私には早くからあつた。つまり東洋の儒教的感化と、露文學やら西洋哲學やらの感化とが結合つて、それに社會主義（ソシアリズム）の影響もあつて、こゝに、私の道德的の中心觀念、卽ち俯仰天下に愧ぢざる「正直」が形づくられたのだ。

併しこれは思想上の事だ。これが文學的勞作と關係のある點はどうか。第一「浮雲」から御話するが、あの作は公平に見て多少好評であつたに係らず、私は非常に卑下してゐた。今でも無い如く、其當時も自信といふものが少しも無かつた。然るに一方には正直といふ理想がある。藝術

に對する尊敬心もある。この卑下、正直、藝術尊敬の三つのエレメントが飽和した結果はどうかと云ふに、まあ、こんな事を考へる樣になつたんだ――將來は知らず、當時の自分が文壇に立つなどは僭越至極、藝術を辱しむる所以である。正直の理想にも叶つて居らん……と思ふものゝ、また一方では、同じく「正直」から出立して、親の臑を噛つてゐるのは不可、獨立獨行、誰の恩も被ては不可、となる。すると勢ひ金が欲しくなる。欲しくなると小說でも書かなければならんがそいつは藝術に對して濟まない。剩へ、最初は自分の名では出版さへ出來ずに、坪内さんの名を借りて、漸と本屋を納得させるやうな有樣であつたから、是れ取りも直さず利のために坪内さんをして心にもない不正な事を爲せるんだ。卽ち私が利用するも同然である。のみならず、讀者に對してはどうかと云ふに、これまた相濟まぬ譯である――所謂羊頭を揭げて狗肉を賣るに類する所業、嚴しくいへば詐欺である。

之は甚だ進退維谷(ヂレンマ)だ。實際的(プラクチカル)と理想的(アイデアル)との衝突だ。で、そのヂレンマを頭で解く事は出來ぬが、併し一方生活上の必要は益々迫つて來るので、よんどころなくも『浮雲』を作(こしら)へて金を取らなきやならんことゝなつた。で、自分の理想からいへば、不埒な〳〵人間となつて、錢を取りは取つたが、どうも自分ながら情ない、愛想の盡きた下らない人間だと熟々自覺する。そこで苦悶の極、自ら放つた聲が、くたばつて仕舞へ（二葉亭四迷）！

世間では私の號に就ていろんな臆說を傳へてゐるが、實際は今云つた通りなんだ。いや、「仕舞へ！」と云つて命令した時には、全く仕舞ふ時節(じき)が有るだらうと思つたね。――その解決が付

けば、まづそのライフだけは收まりが付くんだから。で、私の身にとると「くたばつて仕舞へ!」といふ事は、今でも有意味に響く。そこでこの心持ちが作の上にはどう現れてゐるかと云ふと、實に骨を彫り、肉を刻むといふ有様で、非常な苦勞で殆ど油汗をしぼる。が、油汗を搾るのは責めては自分の罪を輕め度いといふ考へからで、羊頭を掲げて狗肉を賣る所なら、まア、豚の肉ぐらゐにして、人間の口に入れられるものを作へ度い、といふ極く小心な「正直」から刻苦するやうになつたんだ。飜譯になると、もう一倍輪をかけて斯ういふ苦勞がある。――その時はツルゲーネフに非常な尊敬をもつてた時だから、あゝいふ大家の苦心の作を、私共の手にかけて滅茶滅茶にして了ふのは相濟まん譯だ、だから、とても精神は傳へる事が出來んとしても、せめて形なと、原形のまゝ日本へ移したら、露語を讀めぬ人も幾分は原文の妙を想像する事が出來やせんか、と斯う思つて、コンマも、ピリオドも、果ては字數までも原文の通りにしようといふ苦心までした。今考へると隨分馬鹿げた話さ。併し斯う云つて來ると、一圖に「正直」に忠實だつたやうだが、一方には實に大矛盾があつたんだ。卽ち大名譽心さ。……文壇の覇權手に唾して取るべしなぞと意氣込んでね……いやはや、陋態を極めて居たんだ。

その中に、人生問題に就て大苦悶に陷つた事がある。それは例の「正直」が段々崩されてゆくから起つたので、先づ小說を書くことで「正直」が崩される、その他種々のことで崩される。つまり生活が次第に崩してゆくんだ。そして、こんな心持で文學上の製作に從事するから捗のゆかんこと夥しい。とても原稿料なぞぢや私一身すら持耐へられん。況や家道は日に傾いて、心細い

位置に落ちてゆく。老人共は始終愁眉を開いた例が無い。其他種々の苦痛がある。苦痛と云ふのは畢竟金のない事だ。冗い様だが金が欲しい。併し金を取るとすれば例の不徳をやらなければならん。やつた所で、どうせ足りつこは無い。

デレンマ！　デレンマ！　こいつでまた幾ら苦められたか知れん。これが人生觀についての苦悶を呼起した大動機になつてるんだ。即ちこんな苦痛の中に住んでゝ、人生はどうなるだらう、人生の目的は何だらうなぞといふ問題に、思想上から自然に走つてゆく。實に苦しい。從つてゆつくりと其問題を研究する餘裕がなく、たゞ斷腸の思ばかりしてゐた。腹に據る所がない、たゞ苦痛を免れん爲の人生問題研究であるのだ。だから隙があつて道樂に人生を研究するんでなくて、苦悶しながら遣つてゐたんだ。私が盛に哲學書を獵つたのも此時で、基督教を覗き、佛典を調べ、神學までも手を出したのも、また此時だ。

全く厭世と極つて了へば寧そ樂だらうが、其時は矛盾だつたから苦しんだ。世の中が何となく面白くない。と云つた所で、捨てる譯にはゆかん。何となく懷しい所もある。理論から云つても、人生は生活の價値あるものやら無いものやら解らん。感情上から云つても同じく解らん――つまる所、こんな萎え切らぬ感情があるから、苦しい境涯に居たのは事實だ。が、これは「厭世」と名くべきものぢや無からうと思ふ。

其時の苦悶の一端を話さうか。――當時、最も博く讀まれた基督教の一雜誌があつた。この雜誌では例の基督教的に何でも斷言して了ふ。たとへば、此世は神樣が作つたのだとか、やれ何だ

とか、平氣で「斷言」して憚らない。その態度が私の癪に觸る。……よくも考へないで生意氣が云へたもんだ。儚い自分、はかない制限された頭腦で、よくも己惚れて、あんな斷言が出來たものだ、と斯う思ふと、賤しいとも淺猿しいとも云ひやうなく腹が立つ。で、ある時小川町を散歩したと思ひ給へ。すると一軒の繪雙紙屋の店前で、ひよつと眼に付いたのは、今の雜誌のビラだ。さア、其奴の垂れてるのを一寸瞥見したゞけなんだが、私は胸がむかついて來た。形容詞ぢやなく、眞實に何か吐出しさうになつた。だから急いで顏を背けて、足早に通り拔け、漸と小間物屋の開店だけは免れたが、このくらゐにも神經的になつてゐた。思想が狂つてると同時に、神經までが變調になつたので、そして其擧句が……無茶さ！

で、非常な亂暴をやッ了つた。かうなると人間は獸的嗜慾だけだから、喰ふか、飲むか、女でも弄ぶか、そんな事よりしかしない。――一滴もいけなかつた私が酒を飲み出す、子供の時には輕薄な江戸ッ兒風に染まつて、近所の女のあとなんか追廻したが、中年になつて眞面目になつたその私が再び女に手を出す――全く獸的生活に落ちて、終には盜賊だつて關はないとまで思つた。いや、眞實なんだ。

が、そこまでは豈夫に思ひ切れなかつた。人生は無意味だとは感じながらも、俺のやつてる事は僞だ、何か光明の來る時期がありさうだとも思ふ。要するに無茶さ。だから惡い事をしては苦悶する。……爲は爲ても極端にまでやる事も出來ずに迷つてる。

そこでかれこれする間に、ごく下等な女に出會つた事がある。私とは正反對に、非常に快活な

奴で、鼻唄で世の中を渡つてるやうな女だつた。無論淺薄ぢやあるけれども、其處にまた活々とした處がある。私の樣に死んぢや居ない。で、其女の大口開いてアハヽヽヽと笑ふやうな態度が、實に不思議な一種の引力(アトラクション)を起させる。あながち惚れたといふ譯でも無い。が、何だか自分に缺乏してる生命の泉といふものが、彼女には沸々と湧いてる樣な感じがする。そこはまア、自然かも知れんね——日蔭の冷たい、死といふものに摑まれさうになつてる人間が、日向の明るい、生氣潑剌たる陽氣な所を求めて、得られんで煩悶してゐる。すると、議論ぢや一向始末におへない奴が、淺墓ぢやあるが、具體的に一寸眼前に現れて來てゐる。——私の心といふものは、その女に惹き付けられた。

これが併し動機になつたんだ。勢ひ極まつて其處まで行つたんだが、……これが畢竟一轉する動機となつたんだ。

で、私はこんな事を考へた。——斯ういふ風に實例を眼前に見て、苦しいとか、樂しいとか云ふ事は、人によつて大變違ふ。例へば私が苦しいと思ふ事も、其女は何とも思はんかも知らん。それはまア淺薄で何とも思はないんだが、淺薄でなくてしかも何にも思はん人もある。それは誰かと云ふに、孔子さんだらうと思ふ。悠々として天命を樂むのは實に豪い。例へば「死」なる問題は、今の所到底理論の解決以外だ。が、解決が出來たとした所で、死は矢張り可厭(いや)だらう。ただ解決が出來れば幾分か諦が付き易い所はあるが、元來「死」が可厭(いや)といふ理由があるんぢや無いから——たゞ可厭だから可厭なんだ——意味が解つた所で、矢張り何時迄も可厭なんだ。する

と知識で「死」の恐怖を去る事は出來ん。死を怖れるのも怖れぬのも共に理由のない事だ。換言すれば其人の心持（メンタルトーン）にある。即ち孔子の如き仁者の「氣象」にある。あゝ云ふ聖人の様な心持で居たならば、死を怖れて取亂す事もあるまい。人生の苦痛に對しても然り、聖人だつて苦痛は有る。が、その間に一分の餘裕があつて取亂さん。悠々として迫らぬ氣象、即ち「仁」がある。だから思想上で人生問題の解決が付くか否か解らんが、一方で人間に「仁」の氣象を養つたら、何となく人生を超絶して、一段上に出る懺悔で、苦痛にも何にも捉へられん、佛者の所謂自在天に入りはすまいかと考へた。

そこで、心理學の研究に入つた。

古人は精神的（メンタリー）に「仁」を養つたが、我々新時代の人は物理的（フイジカリー）に養ふべきではなからうかといふ考になつた。

心理學、醫學に次いで、生理心理學を研究し始めた。是等に關する英書は隨分蒐（あつ）めたもので、殆ど十何年間、三十歳を越すまで研究した。吳博士と往復したのも、參考書類を讀破しようといふ熱心から、獨逸語を獨修したのも此時だ。けれども其結果、どうも個人の力ぢや到底やり切れんと悟つた。ヴントの實驗室（ラボラトリー）、ヂェームスの實驗室、其等が無ければ、何時迄經つても眞の研究は覺束ないと思ひ出した。そんなら錢の費（かゝ）らん研究法をしなくてはならんが、其には自分を犧牲にして解剖壇上に乘せて、解剖學を研究するより外仕方がない。當時は、醫學上の大發見の爲に毒藥を仰いだりした人の話が頭にあつたから、そんな犧牲心も起したんだ。即ち私の心的要素（マインドスタツフ）を

種々の事情の下に置いて、揉み散らし、苦め散らし、散々な實驗(エクスプリメント)を加へてやらう。そしたら、學術的に心持(メンタルトーン)を培養する學理は解らんでも、その技術(アート)を獲ることは出來やせんか、と云ふので、最初は方面を選んで、實業が最も良からうと見當を付けた。それで、實業家と成らうと大變焦つた。が併し私の露語を離れ〴〵にしては實業に入れぬから、露國貿易と云ふやうな所から段々入らうと思つた。そして國際的關係に首を突込んで、志士肌と商賣肌を混ぜてそれにまた道德的のことも加へたり何かして見ると、かのセシルローヅなぞが面白い人物と思はれるやうになつた。單に金持が羨しいんぢやない。形は違ふが、一つあゝいふ風の事業をやらうと云ふのを見當としてそんな方面にも走つた事がある。で、私の職業の變遷を述べれば、官報局の飜譯係、陸軍大學の語學教師、海軍省の編輯書記、外國語學校の露語教師なぞといふ順序だが、今云つた國際問題等に興味を有つに至つて浦鹽から滿洲に入り、更に蒙古に入らうとして、暫時警務學堂に奉職してゐた事なんぞがある。

が、これは外面に現れた事實上の事だ。その心的方面を云ふと、この無益な心的要素(マインドスタッフ)が何れ程まで修練を加へたらものになるか、人生に捉はれずに、其を超絶する樣な所まで行くか、一つやつて見よう、といふ心持で、幾多の活動上の方面に接觸してゐると、自然に、人生問題なぞは苦にせずに濟む。で、この方面の活動だと、ピタッと人生にはまつて了つて、苦痛は苦痛だが、それに堪へられんことは無い。一層奮鬪する事が出來るやうになるので、私は、奮鬪さへすれば何となく生き甲斐があるやうな心持がするんだ。

明治三十六年の七月、日露戰爭が始まると云ふので私は日本に歸つて、今の朝日新聞社に入社した。そして奉公として「其面影」や「平凡」なぞを書いて、大分また文壇に近付いては來たが、さりとて文學者に成り濟ました氣ではない。矢張り例の大活動、大奮闘の野心はある――今でもある。

解說

中村光夫

『平凡』は明治四十年十月から十二月にわたつて「東京朝日新聞」に連載され、翌年三月單行本にまとめられた。二葉亭が遺したわづか三篇の小說中、最後の作品である。
その年の六月彼は朝日新聞社のロシア特派員としてペテルスブルグに赴任し、翌明治四十二年二月、嚴寒の露都で、重い肺患を病み、海路を經て歸朝の途次、五月十日に印度洋上に歿した。ペテルスブルグの病院から、彼はその病氣を次のやうに、妻に知らせてゐる。
「病症はどの醫者の診斷も皆一樣で卽ち肺炎だ、慢性だちの肺炎だから萬事ジリジリと取詰めて來る。咯痰には結核菌もある……。此儘この彼得堡の土になる事やら、それとも再び日本の土が踏める事やら、まだ疑問だと思ふけれど、兎に角每日三十八九度の熱に責められるので、身體は非常に疲勞した。鏡をのぞいて見ると心細くなるほど瘦せた。醫者のいふには熱さへ取れたら直ぐ彼得堡を立退いて何處か溫い空氣の好い處で療養しなさいといふ。何でも彼得堡を立退きさへすれば私の命は助かるやうにいふけれど、熱のある間はこのいやな彼得堡にいやでもおうでもかゞむでゐねばならぬ。かゞむでゐた果末はどうなる事やら今では更に見當か附かぬけれど、爰に仕合せな事か一つある、それはこれほと疲勞しても胃は一向弱らぬ、病院の晝

晩二度の食事が待遠しい位だ、胃がから丈夫な中は滅多死ぬものでない。或はこの丈夫な胃の(原)お蔭で死ぬ處を助かつて日本へ歸り再ひお前方の面も見られるかも知らぬ、成るべくさういふ(原)都合にしたいと思つて一生懸命に胃の保護をしてゐる」(明治四十二年三月二十一日附書簡)

異境に病む心細さはこの穩やかな愛情を籠めた手紙の言外に溢れてゐる。三月末醫者に「もてあまされて」歸朝を勸められた彼は、便器で用を足してゐた高熱の身體を押してアムステルダムからロンドンに行き、郵船の賀茂丸に擔架で運び込まれて、歸朝の途についた。船長以下の手厚い看護に拘らず、病氣は恢復の徵もなく、發熱はたえず三十八九度より下らず、ことにポートサイドからは熱帶の暑氣のため病勢は更に惡化し、朝夕の四十度近い熱を記錄した當時の體溫日記は、彼が酷熱の洋上を一日一日死と闘つて運ばれて行つた跡を痛ましく語つてゐる。五月六日、コロンボについたときはすでに絕望狀態であり、それから四日後の五月十日、シンガポールに向ふ途中ベンガル灣の洋上に歿した。臨終は午後五時十五分と傳へられてゐるから、印度洋の陽が西に傾き、甲板に吹き始める爽やかな涼風が、苦熱の一日の終りを告げる夕暮時のことである。

窓外に蒼く擴がる海上には、朱を撒いたやうな熱帶特有の美しい夕燒雲が輝き、その餘光は狹い船室の白い壁を薄赤く染め、そこに瞑目して横たはる二葉亭の病み衰へた横顏も微かに彩つたことであらう。享年四十六歲。遺骸は船の慣例に反して水葬を行はれず、五月十三日に賀茂丸シンガポール着と同時に郊外で茶毘に附せられた。

かうした晩年を見れば『平凡』は二葉亭の最後の文學的活動の現はれであると云つてよい。彼はこの後には二三の談話と短い飜譯を雜誌に發表してゐるにすぎない。

ではこの作品は二葉亭の文學的遺言と云ひ得るか、すなはち彼の晩年の思想はこゝに十分表現されてゐるか、といふことになると問題は非常に複雜であるが、少なくも僕はこゝに現はれたものは彼の思想の全幅を蔽ふものではないと信じてゐる。

二葉亭自身も、當時非常な好評を博したに拘らず、この小說の不十分さを認めて次のやうに云つてゐる。

「『平凡』なんて、あれは試驗をやつて見たのだね。ところが題材の取り方が不充分だつたから、試驗もとう〳〵達しなくて了つた。十分に達しなかつたといふのはサタイアになつたからだ。その意ではなかつたのが、どうしても諷刺になつて了つた。」（私は懷疑派だ）

彼がこゝで「諷刺」の對象としたのは「或る一種の人、即ち文學者」の「人生に對する態度」であり、こゝに洩らされた彼の文學否定的口吻をめぐつて種々論戰の花が咲いたのは周知のことであるが、かうした批判はすべて作品の言葉の末に捕へられたもので、二葉亭の思想を人間的な形で理解する上に何の足しにもならないと僕は信じてゐる。作者が『平凡』の主人公の口を藉りて述べてゐるのは、文學に對する一種の懷疑論であるが、二葉亭自身の經た文學上思想上の懷疑が決して『平凡』の主人公のやうな生易しいものでなかつたことは「予が半生の懺悔」を一讀してみれば明かである。內田魯庵氏が「二葉亭四迷の一生」のなかで不滿を述べてゐるやうに、『平

凡』には日本文學史上最初に「近代人」たる宿命を擔つた作者が半生の間、文學に對し、また人生に對して味つて來た苦惱は決して十分現はれてゐないので、彼自身が「題材の取り方が不充分だつた」といふのも、讀者が讀後になんとなく物足りぬ感じを受けるのもそのためであらう。

もともと『平凡』はその制作の事情から見れば、二葉亭は當時朝日新聞社に勤務してゐた關係上、池邊三山氏らの先輩友人の勸めによつて、義理合上やむを得ず筆を執つたので、當時彼の「第一義的」興味は遠く文學を去つてゐたとする內田氏の說を僕は正しいと信じてゐる。

明治四十年と云へば丁度文壇では自然主義の興隆期であつた。明治二十年に『浮雲』を發表し、ついでツルゲーネフの『あひびき』『めぐりあひ』を紹介した二葉亭にとつて、新文學の先覺をもつて自任することは恐らく容易であつたであらう。だがベリンスキーへの心醉から出發し、ミル、コントの思想を遍歷した彼に、やがて大正期の私小說に爛熟する運命にあつた我國の自然主義運動が信じられたわけはなかつた。こゝにこの偉大な先驅者の强ひられた奇怪な不幸がある。この點から見れば、『平凡』は彼の思想の表現であるといふより、むしろかうした彼に獨自な不幸の現れとする方が正しいのである。

ではこの小說の價値はどういふ點にあるか、當時勃興の機運にあつた自然主義への諷刺とも見られる『平凡』が一般讀者には勿論、當の自然主義の作家達からさへ非常な賞讚を博した理由はどこにあるか、といふとそれはこの小說が當時において最も文學臭を脫した文學であつたからだと僕は信じてゐる。花袋、獨步、藤村または白鳥などの新作家によつて代表される明治末期の自

然主義文學は、その新鮮な技法と題材によつては優に新しい流派を形成するには足りたが、彼等の制作理論の根柢に素朴な文學に對する陶醉が横たはつてゐる點では前時代の硯友社作家と何等選ぶところのない浪漫派であつた。西歐の大家に對する彼等の心醉もただその素朴な文學的熱情を掻きたてただけであつて、「今の文學者なざ、殊に西洋の影響を受けていきなり文學を難有いものとして擔ぎ廻つてゐる」と二葉亭が苦が苦がしげに云つてゐるのもかうした時代相を指すものであつた。

したがつて當時の自然派作品はいづれも多少の文學青年臭と云はぬまでも強い文學臭は免れなかつたのであつて、「法華信者が偏頗心で法華に執着する熱心」で明けても暮れても文學に凝り固まりながら、「自分の存在の九分九厘は遊んでゐる」當代新文學の青臭さに對して、二葉亭はその談話のなかで激しい嫌惡を洩らしてゐる。

したがつて『平凡』は作者の企圖如何に拘らず、かうした當時の文壇の氣風に對する鋭い諷刺たらざるを得なかつた。そしてこの小說は今日から讀み返して見ると、當時の文學者一般の風潮であつた文學に對する安易な陶醉を全く脫してゐる點で、おそらく明治文學史上に類例のない價値を持つものである。

新文學の黎明期に『浮雲』の制作に苦しんだ彼は、「文學の毒」が如何なるものかおそらく身にこたへて知つてゐた。當代文壇の風潮を嘲笑するに彼はただ自己の青年期を戲畫化して表現すれば足りた。もともとこの自嘲は彼の誠實な性格の底を絕えず蝕んでゐたので、文學に對する懷

疑を文學者の懺悔として表現するこの小說の着想は彼の內生活の必然の所產であつた。

したがつて『平凡』は二葉亭にとつて實に自然な作品であつた。彼はただこの題材に生地のまゝぶつかればよかつた。その結果、この小說は彼の三篇の創作中もつとも直接に彼の心の滲み出た作品になつてゐる。この意味で「平凡」は工夫を凝らした文學作品といふより、むしろ作者の打ち解けた座談に近い小說である。その獨特な名文を辿つて讀者は沈痛かつ謙抑な二葉亭の晩年の風貌に觸れる思ひがするであらう。

彼が『平凡』に驅使した文章は一切の裝飾を嫌つた完璧な口語文であるが、この平易な名文はたんに當時の自然主義作品の影響によるものではなく、むしろ二十年前の『浮雲』に大膽な文章改革を試みた經驗が爛熟し完成したものと見るべきであらう。彼が『浮雲』當時理想とした「俗語の精神」はこゝによく生かされてこの一篇の小說は全く「喋る言葉」によつてのみ書かれ、しかもそこには、作者の毫も虛飾のない生活感情が暖かく隅々まで流れてゐる。

言文一致を標榜しながら、多くは文飾をことゝした當時の小說家の思ひも及ばぬ境地である。『平凡』の文章を名文と呼ぶことには今日もなほ異議のある人が多いであらう。だがたとへ彼に「創作の才」があつたにせよなかつたにせよ、この小說の人眼につかぬ、だが尊い獨創性は以上の諸點にあつたと僕は考へる。

當時の自然派小說の多數がすでに塵に埋れた今日、ひとり『平凡』の一篇が長い生命を保つ所以もこゝに存するのであらう。かうした作者の微妙な獨創の性格はこれまでこの小說を生かして

來た多くの讀者が胸に感じ胸に納得して來た所に違ひない。

ここではただこの名文らしからぬ名文は作者の非常な苦心の所產であり、徹夜で仕事をする習慣のあつた作者が、この頃すでに肺患の徵候があつたのか、深更机に向つて咳入りながら苦吟する有樣は家人の見るに堪へなかつたといふ痛ましい挿話を誌しておく。

要するに『平凡』には『浮雲』の潑剌たる文學的野心もなく、『其面影』に現はれた人間造型の苦心も見られないが、二葉亭の最後の作品として見れば不滿な點もある反面、その飾り氣ない文面に彼の晩年の風格が親しくうかがへる點でほかのどの創作より懷かしい感じのする小說である。

またこれは明治末期の自然主義を基調として發達し來つた現代文學に對する銳い反省の書とも云へるであらう。

なほ『平凡』のほか彼の談話その他數篇を收めたが、これらはすべて彼の晩年の思想を知る上に重要なものであり、それによつて僕等は『平凡』に語られた思想が必ずしも二葉亭のすべてでなかつたことを知り得るのである。

昭和十五年二月

昭和十五年五月七日 第一刷発行
昭和三十六年九月二十日 第十九刷発行

定価★★

作者 二葉亭四迷

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
発行者 岩波雄二郎

東京都新宿区市ケ谷加賀町一丁目十二番地
印刷者 高橋武夫

発行所 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三 株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

大日本印刷・永井製本

読書子に寄す

——岩波文庫発刊に際して——

岩波茂雄

真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。かつては民を愚昧ならしめるために学芸が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあった。今や知識と美とを特権階級の独占より奪い返すことはつねに進取的なる民衆の切実なる要求である。岩波文庫はこの要求に応じそれに励まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少数者の書斎と研究室とより解放して街頭にくまなく立たしめ民衆に伍せしめるであろう。近時大量生産予約出版の流行を見る。その広告宣伝の狂態はしばらくおくも、後代にのこすと誇称する全集がその編集に万全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻訳企図に敬虔の態度を欠かざりしか。さらに分売を許さず読者を繫縛して数十冊を強うるがごとき、はたしてその揚言する学芸解放のゆえんなりや。吾人は天下の名士の声に和してこれを推挙するに躊躇するものである。このときにあたって、岩波書店は自己の責務のいよいよ重大なるを思い、従来の方針の徹底を期するため、すでに十数年以前より志して来た計画を慎重審議この際断然実行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西にわたって文芸・哲学・社会科学・自然科学等種類のいかんを問わず、いやしくも万人の必読すべき真に古典的価値ある書をきわめて簡易なる形式において逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は予約出版の方法を排したるがゆえに、読者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選択することができる。携帯に便にして価格の低きを最主とするがゆえに、外観を顧みざるも内容に至っては厳選最も力を尽くし、従来の岩波出版物の特色をますます発揮せしめようとする。この計画たるや世間の一時の投機的なるものと異なり、永遠の事業として吾人は微力を傾倒し、あらゆる犠牲を忍んで今後永久に継続発展せしめ、もって文庫の使命を遺憾なく果たさしめることを期する。芸術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの挙に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上経済的には最も困難多きこの事業にあえて当たらんとする吾人の志を諒として、その達成のため世の読書子とのうるわしき共同を期待する。

昭和二年七月

現代日本文学

西洋道中膝栗毛 全二冊	仮名垣魯文 小林智賀平校訂	全二〇〇
真景累ヶ淵	三遊亭円朝	一二〇
怪談牡丹燈籠	三遊亭円朝	八〇
塩原多助一代記	三遊亭円朝	八〇
当世書生気質	坪内逍遙	一二〇
小説神髄	坪内逍遙	八〇
うたかたの記 他三篇	森鷗外	八〇
鷗外即興詩人 全二冊	アンデルセン 森鷗外訳	各八〇
ウィタ・セクスアリス	森鷗外	四〇
青年	森鷗外	八〇
妄想 他三篇	森鷗外	四〇
雁	森鷗外	四〇
阿部一族 他二篇	森鷗外	四〇
護持院原の敵討 他二篇	森鷗外	四〇
大塩平八郎・堺事件	森鷗外	四〇
山椒大夫・高瀬舟 他四篇	森鷗外	八〇
浮雲	二葉亭四迷	八〇
其面影	二葉亭四迷	八〇
平凡 他六篇	二葉亭四迷	八〇
あひびき・片恋・奇遇 他一篇	二葉亭四迷訳	八〇
野菊の墓 他四篇	伊藤左千夫	八〇
増補 左千夫歌集	斎藤茂吉 土屋文明 選	四〇
初すがた	小杉天外	八〇
魔風恋風 全二冊	小杉天外	全二〇〇
吾輩は猫である 全二冊	夏目漱石	各一二〇
坊っちゃん	夏目漱石	四〇
倫敦塔・幻影の盾 他五篇	夏目漱石	八〇
草枕	夏目漱石	四〇
二百十日・野分	夏目漱石	一二〇
虞美人草	夏目漱石	一六〇
坑夫	夏目漱石	一二〇
三四郎	夏目漱石	一二〇
それから	夏目漱石	一二〇
門	夏目漱石	八〇
思ひ出す事など 修善寺日記	夏目漱石	八〇
彼岸過迄	夏目漱石	一二〇
行人	夏目漱石	一六〇
こゝろ	夏目漱石	一二〇
硝子戸の中	夏目漱石	四〇
道草	夏目漱石	一二〇
明暗 全二冊	夏目漱石	各一二〇
漱石小品集	夏目漱石	一二〇
風流仏・一口剣	幸田露伴	四〇
辻浄瑠璃・寝耳鉄砲 他一篇	幸田露伴	八〇
五重塔	幸田露伴	四〇
運命 他一篇	幸田露伴	八〇
連環記 他三篇	幸田露伴	八〇
歌よみに与ふる書	正岡子規	四〇
子規句集	高浜虚子選	一二〇

子規歌集	土屋文明編	四〇
病牀六尺	正岡子規	八〇
二人女房	尾崎紅葉	四〇
多情多恨	尾崎紅葉	一二〇
金色夜叉 全二冊	尾崎紅葉	全二〇〇
小説 不如帰	徳冨蘆花	一二〇
自然と人生	徳冨蘆花	八〇
小説 思出の記 全二冊	徳冨健次郎	全二〇〇
黒潮	徳冨健次郎	一二〇
みみずのたはこと 全二冊	徳冨健次郎	全二〇〇
黒い眼と茶色の目	徳冨健次郎	一二〇
新春	徳冨健次郎	八〇
くれの廿八日 他一篇	内田魯庵	四〇
火の柱	木下尚江	八〇
良人の自白 全四冊	木下尚江	全三六〇
滝口入道	高山樗牛	四〇
愛弟通信	国木田独歩	八〇

武蔵野	国木田独歩	八〇
牛肉と馬鈴薯 他三篇	国木田独歩	四〇
運命	国木田独歩	八〇
号外・少年の悲哀 他六篇	国木田独歩	四〇
晩翠詩抄	土井晩翠	八〇
蒲団・一兵卒	田山花袋	四〇
生	田山花袋	八〇
妻	田山花袋	一二〇
田舎教師	田山花袋	八〇
時は過ぎゆく	田山花袋	一二〇
一兵卒の銃殺	田山花袋	八〇
足跡	徳田秋声	八〇
黴	徳田秋声	八〇
爛	徳田秋声	八〇
あらくれ	徳田秋声	一二〇
縮図	徳田秋声	一二〇
藤村詩抄	島崎藤村自選	八〇

破戒	島崎藤村	一二〇
千曲川のスケッチ	島崎藤村	八〇
生ひ立ちの記 他一篇	島崎藤村	八〇
桜の実の熟する時	島崎藤村	八〇
新生 全二冊	島崎藤村	全二〇〇
嵐 他二篇	島崎藤村	四〇
春を待ちつつ	島崎藤村	四〇
大つごもり・ゆく雲 他二篇	樋口一葉	四〇
にごりえ・たけくらべ	樋口一葉	四〇
十三夜 われから 他三篇	樋口一葉	四〇
修禅寺物語 正雪の二代目 他四篇	岡本綺堂	八〇
耽溺	岩野泡鳴	四〇
断橋	岩野泡鳴	八〇
夜行巡査 外科室 他五篇	泉鏡花	八〇
照葉狂言	泉鏡花	四〇
高野聖・眉かくしの霊	泉鏡花	四〇
註文帳・白鷺	泉鏡花	一二〇

婦系図 全二冊	泉鏡花	各八〇
歌行燈	泉鏡花	四〇
日本橋	泉鏡花	八〇
鴛鴦帳	泉鏡花	八〇
風流懺法 他三篇	高浜虚子	四〇
虚子句集	高浜虚子自選	一六〇
上田敏詩抄	茅野蕭々編	八〇
鱧の皮 他五篇	上司小剣	八〇
青春 全三冊	小栗風葉	各八〇
有明詩抄	蒲原有明	八〇
黒髪 他二篇	近松秋江	八〇
赤彦歌集	斎藤茂吉 久保田不二子選	八〇
泣菫詩抄	薄田泣菫	八〇
或る女 全二冊	有島武郎	全二〇〇
小さき者へ・生れ出づる悩み	有島武郎	四〇
カインの末裔・クララの出家	有島武郎	四〇
一房の葡萄 他五篇	有島武郎	四〇
ドモ又の死・断橋	有島武郎	四〇
宣言	有島武郎	四〇
惜みなく愛は奪ふ	有島武郎	四〇
寺田寅彦随筆集 全五冊	小宮豊隆編	各一二〇
与謝野晶子歌集	与謝野晶子自選	一二〇
何処へ・泥人形 他二篇	正宗白鳥	八〇
生まざりしならば 他一篇	正宗白鳥	四〇
土 全二冊	長塚節	各八〇
炭焼の娘	長塚節	一六〇
長塚節歌集	斎藤茂吉選	八〇
地獄の花	永井荷風	四〇
ふらんす物語	永井荷風	一二〇
すみだ川 他三篇	永井荷風	四〇
冷笑	永井荷風	八〇
日和下駄 他四篇	永井荷風	四〇
腕くらべ	永井荷風	八〇
おかめ笹	永井荷風	八〇
雪解 他六篇	永井荷風	四〇
花火・雨瀟瀟 他二篇	永井荷風	四〇
つゆのあとさき	永井荷風	四〇
濹東綺譚	永井荷風	四〇
踊子・勲章・問はずがたり	永井荷風	四〇
煤煙	森田草平	一二〇
赤光	斎藤茂吉	八〇
斎藤茂吉歌集	山口・柴生田・佐藤編	一二〇
千鳥 他四篇	鈴木三重吉	八〇
桑の実	鈴木三重吉	八〇
大津順吉・和解・ある男、その姉の死	志賀直哉	一二〇
網走まで 他十八篇	志賀直哉	八〇
小僧の神様 他十篇	志賀直哉	八〇
暗夜行路 全二冊	志賀直哉	各一二〇
高村光太郎詩集	高村光太郎	八〇
あきらめ・木乃伊の口紅 他四篇	田村俊子	一二〇
白秋詩抄	北原白秋	八〇

白秋抒情詩抄	北原白秋	八〇
北原白秋歌集	木俣修選	一二〇
真知子 全二冊	野上弥生子	各八〇
迷路 全四冊	野上弥生子	各一二〇
お目出たき人 世間知らず	武者小路実篤	八〇
わしも知らない 他十篇	武者小路実篤	八〇
その妹	武者小路実篤	四〇
幸福者	武者小路実篤	八〇
愛慾	武者小路実篤	四〇
人間万歳	武者小路実篤	四〇
友情	武者小路実篤	四〇
銀の匙	中勘助	八〇
若山牧水歌集	若山喜志子選	一二〇
啄木歌集	石川啄木	一二〇
卍（まんじ）	谷崎潤一郎	八〇
蓼喰ふ虫	谷崎潤一郎	八〇
吉野葛・蘆刈	谷崎潤一郎	四〇
盲目物語・春琴抄	谷崎潤一郎	八〇
古泉千樫歌集	土屋文明 橋本徳寿編	四〇
吉井勇歌集	吉井勇自選	八〇
子をつれて 他八篇	葛西善蔵	八〇
同志の人々 他四篇	山本有三	八〇
波	山本有三	一六〇
大阪の宿	水上滝太郎	一二〇
善心悪心 他三篇	里見弴	四〇
多情仏心 全三冊	里見弴	各一二〇
安城家の兄弟 全三冊	里見弴	全三二〇
項羽と劉邦	長与善郎	八〇
青銅の基督	長与善郎	四〇
竹沢先生という人	長与善郎	一六〇
萩原朔太郎詩集	三好達治選	一二〇
恩讐の彼方に 忠直卿行状記 他八篇	菊池寛	八〇
無名作家の日記 他九篇	菊池寛	八〇
或る少女の死まで 他二篇	室生犀星	八〇
室生犀星詩集	室生犀星自選	八〇
末枯・続末枯・露芝	久保田万太郎	八〇
大寺学校・ゆく年	久保田万太郎	八〇
古い玩具 他五篇	岸田国士	八〇
出家とその弟子	倉田百三	八〇
蔵の中・子を貸し屋 他三篇	宇野浩二	八〇
苦の世界	宇野浩二	一二〇
神経病時代・若き日	広津和郎	八〇
風雨強かるべし 全二冊	広津和郎	各八〇
羅生門・鼻・芋粥・偸盗	芥川竜之介	八〇
地獄変・邪宗門・好色・藪の中 他七篇	芥川竜之介	八〇
河童	芥川竜之介	四〇
侏儒の言葉	芥川竜之介	四〇
西方の人・続西方の人 他二篇	芥川竜之介	四〇
奉教人の死 他十三篇	芥川竜之介	八〇
歯車 他二篇	芥川竜之介	四〇
田園の憂鬱	佐藤春夫	四〇

増補 春夫詩鈔	佐藤春夫	一二〇
何が彼女をそうさせたか	藤森成吉	四〇
海に生くる人々	葉山嘉樹	一二〇
無限抱擁	滝井孝作	八〇
宮沢賢治詩集	谷川徹三編	一二〇
童話集 風の又三郎 他十八篇	宮沢賢治 谷川徹三編	一二〇
童話集 銀河鉄道の夜 他十四篇	宮沢賢治 谷川徹三編	一二〇
秋立つまで 他三篇	嘉村礒多	四〇
山椒魚・遙拝隊長 他七篇	井伏鱒二	四〇
日輪	横光利一	四〇
機械 他九篇	横光利一	八〇
貧しき人々の群 他二篇	宮本百合子	八〇
伸子 全二冊	宮本百合子	全二〇〇
二つの庭	宮本百合子	一二〇
道標 全五冊	宮本百合子	全四四〇
太陽のない街	徳永直	一二〇
渦巻ける烏の群 他三篇	黒島伝治	四〇
伊豆の踊子・温泉宿 他四篇	川端康成	八〇
抒情歌・禽獣 他五篇	川端康成	八〇
雪国	川端康成	八〇
山の音	川端康成	一二〇
中野重治詩集	中野重治自選	四〇
檸檬・冬の日 他九篇	梶井基次郎	八〇
冬の宿 他一篇	阿部知二	八〇
蟹工船、一九二八・三・一五	小林多喜二	八〇
防雪林・不在地主	小林多喜二	八〇
党生活者・独房	小林多喜二	八〇
風立ちぬ・美しい村	堀辰雄	四〇
富嶽百景 走れメロス 他八篇	太宰治	八〇
ヴィヨンの妻・桜桃 他八篇	太宰治	八〇
落城・霧の中 他四篇	田宮虎彦	八〇
真空地帯 全二冊	野間宏	各八〇
日本唱歌集	堀内敬三 井上武士 編	一二〇
日本童謡集	与田凖一編	一二〇
文明論之概略	福沢諭吉	八〇
改訂版 福翁自伝	福沢諭吉	一二〇

国文学

岩波文庫選

イーリアス 全三冊　ホメーロス　呉茂一訳　全四四〇
女の平和　アリストパネース　高津春繁訳　八〇
プルターク英雄伝 全十二冊　河野与一訳　全一〇八〇
アベラールとエロイーズ　畠中尚志訳　一六〇
エラスムス 痴愚神礼讃　渡辺一夫訳　一二〇
改訳 ギリシア・ローマ神話 全二冊　ブルフィンチ　野上弥生子訳　各八〇
ヴェニスの商人　シェイクスピア　中野好夫訳　八〇
ロミオとジュリエットの悲劇　シェイクスピア　本多顕彰訳　八〇
ハムレット　シェイクスピア　市河・松浦訳　八〇
ミルトン 楽園喪失 全三冊　藤井武訳　各八〇
天路歴程 全二冊　ジョン・バニヤン　竹友藻風訳　各一二〇
トム・ジョウンズ 全四冊　フィールディング　朱牟田夏雄訳　各一二〇
高慢と偏見 全二冊　オースティン　富田彬訳　各一二〇
イン・メモリアム　テニスン　入江直祐訳　八〇
虚栄の市 全六冊　サッカレ　三宅幾三郎訳　全五二〇

デイヴィド・コパフィールド 全六冊　ディケンズ　市川又彦訳　各一二〇
二都物語 全三冊　ディケンズ　佐々木直次郎訳　各一二〇
ペーター 文芸復興　田部重治訳　一二〇
ジーキル博士とハイド氏　スティーヴンスン　岩田良吉訳　四〇
サロメ　ワイルド　福田恆存訳　四〇
人と超人　バーナド・ショー　市川又彦訳　一二〇
息子たちと恋人たち 全四冊　ロレンス　本多顕彰訳　各八〇
フランクリン自伝　松本慎一・西川正身訳　一二〇
黒猫 他三篇　ポオ　中野好夫訳　四〇
ホイットマン詩集 草の葉　有島武郎選訳　一二〇
ハックルベリィ・フィンの冒険 全二冊　マーク・トウェーン　中村為治訳　全二〇〇
オー・ヘンリー短編集　清野暢一郎訳　四〇
荒野の呼び声　ジャック・ロンドン　岩田欣三訳　四〇
楡の木蔭の慾情　オニール　井上宗次訳　四〇
武器よさらば 全二冊　ヘミングウェイ　谷口陸男訳　各八〇
怒りのぶどう 全三冊　スタインベック　大橋健三郎訳　各一二〇
若きウェルテルの悩み　ゲーテ　竹山道雄訳　八〇

ファウスト 全二冊　ゲーテ　相良守峯訳　各一六〇
ヴィルヘルム・テル　シラー　桜井政隆・国隆訳　八〇
青い花　ノヴァーリス　小牧健夫訳　八〇
改訳 グリム童話集 全七冊　金田鬼一訳　各八〇
ハイネ 歌の本 全二冊　井上正蔵訳　全二〇〇
みずうみ 他四篇　シュトルム　関泰祐訳　四〇
マルテの手記　リルケ　望月市恵訳　一二〇
水と原生林のはざまで　シュヴァイツェル　野村実訳　八〇
魔の山 全六冊　トオマス・マン　関・望月訳　各八〇
漂泊の魂　ヘルマン・ヘッセ　相良守峯訳　四〇
美しき惑いの年　カロッサ　手塚富雄訳　一二〇
箴言と考察　ラ・ロシュフコオ　内藤濯訳　八〇
タルチュフ　モリエール　鈴木力衛訳　四〇
クレーヴの奥方 他二篇　ラファイエット夫人　生島遼一訳　一二〇
マノン・レスコー　アベ・プレヴオ　河盛好蔵訳　八〇
フィガロの結婚　ボーマルシェ　辰野隆訳　八〇
アドルフ　コンスタン　大塚幸男訳　四〇

恋愛論 全二冊 スタンダール 前川堅市訳 全二〇〇
赤と黒 全二冊 スタンダール 桑原・生島訳 全二八〇
従妹ベット 全二冊 バルザック 水野亮訳 各一六〇
レ・ミゼラブル 全七冊 ヴィクトル・ユーゴー 豊島与志雄訳 全八四〇
モンテ・クリスト伯 全七冊 アレクサンドル・デュマ 山内義雄訳 各一二〇
カルメン メリメ 杉捷夫訳 四〇
愛の妖精 ジョルジュ・サンド 宮崎嶺雄訳 一二〇
戯れに恋はすまじ ミュッセ 進藤誠一訳 四〇
ボオドレール 悪の華 鈴木信太郎訳 二〇〇
ボヴァリー夫人 全二冊 フローベール 伊吹武彦訳 全二〇〇
椿姫 デュマ・フィス 吉村正一郎訳 一二〇
風車小屋だより ドーデー 桜田佐訳 八〇
ナナ 全二冊 エミール・ゾラ 田辺・河内訳 各一二〇
ヴェルレエヌ詩集 鈴木信太郎訳 八〇
お菊さん ピエル・ロティ 野上豊一郎訳 八〇
女の一生 モーパッサン 杉捷夫訳 一二〇
弟子 全二冊 ブールジェ 内藤濯訳 各八〇

にんじん ルナアル 岸田国士訳 一二〇
ジャン・クリストフ 全八冊 ロマン・ロラン 豊島与志雄訳 全八四〇
改訳 魅せられたる魂 全十冊 ロマン・ロラン 宮本正清訳 全九二〇
狭き門 アンドレ・ジイド 川口篤訳 八〇
田園交響楽 アンドレ・ジイド 川口篤訳 四〇
シラノ・ド・ベルジュラック ロスタン 辰野・鈴木訳 一二〇
人はすべて死す 全二冊 ボーヴォワール 川口・田中訳 各一二〇
プーシキン詩集 金子幸彦訳 一二〇
大尉の娘 プーシキン 神西清訳 八〇
死せる魂 全三冊 ゴーゴリ 平井肇訳 各八〇
猟人日記 全二冊 ツルゲーネフ 佐々木彰訳 各一二〇
父と子 ツルゲーネフ 金子幸彦訳 一二〇
罪と罰 全三冊 ドストエーフスキー 中村白葉訳 全三二〇
カラマーゾフの兄弟 全四冊 ドストエーフスキー 米川正夫訳 全五六〇
戦争と平和 全八冊 トルストイ 米川正夫訳 全八八〇
アンナ・カレーニナ 全六冊 トルストイ 中村白葉訳 全六〇〇
あかい花 他四篇 ガルシン 神西清訳 四〇

かもめ チェーホフ 湯浅芳子訳 四〇
三人姉妹 チェーホフ 湯浅芳子訳 四〇
どん底 ゴーリキイ 中村白葉訳 八〇
静かなドン 全八冊 ショーロホフ 横田瑞穂訳 全一〇〇〇
ダンテ神曲 全三冊 山川丙三郎訳 全四〇〇
デカメロン 全六冊 ボッカチオ 野上素一訳 六〇〇
セルバンテス ドン・キホーテ（正篇）全三冊 永田寛定訳 全四〇〇
三角帽子 他二篇 アラルコン 会田由訳 八〇
アンデルセン童話集 全十冊 大畑末吉訳 全八四〇
人形の家 イプセン 竹山道雄訳 八〇
クォ ヴァディス 全三冊 シェンキエヴィチ 河野与一訳 全三二〇
千一夜物語 全二六冊 豊島・佐藤・渡辺・岡部訳 全二二八〇
唐詩選 全三冊 前野直彬注解 既一冊 八〇
三国志 全十冊 小川環樹訳 既七冊 六四〇
水滸伝 全十五冊 吉川幸次郎訳 既六冊 四八〇
紅楼夢 全十四冊 曹雪芹・高蘭墅 松枝茂夫訳 全一三二〇
阿Q正伝・狂人日記 他十二篇 魯迅 竹内好訳 八〇

岩波文庫選

プラトン ソクラテスの弁明 クリトン　久保勉訳　四〇
プラトン 饗宴　久保勉訳注　八〇
アリストテレス 形而上学 全二冊　出隆訳　各一六〇
人間悟性論 全二冊　ジョン・ロック 加藤卯一郎訳　全二〇〇
方法序説　デカルト 落合太郎訳　八〇
省察　デカルト 三木清訳　八〇
スピノザ エチカ（倫理学） 全二冊　畠中尚志訳　全二〇〇
ヒューム 人性論 全四冊　大槻春彦訳　全四八〇
エミイル 全五冊　ルソー 平林初之輔訳　全四〇〇
純粋理性批判 全三冊　カント 篠田英雄訳　既一冊 一六〇
カント 実践理性批判　波多野精一 宮本和吉訳　八〇
小論理学 全二冊　ヘーゲル 松村一人訳　各一二〇
人間的自由の本質　シェリング 西谷啓治訳　八〇
読書について 他二篇　ショウペンハウエル 斎藤忍随訳　四〇
キリスト教の本質 全二冊　フォイエルバッハ 船山信一訳　各一二〇

不安の概念　キェルケゴール 斎藤信治訳　一二〇
死に至る病　キェルケゴール 斎藤信治訳　八〇
西洋哲学史 全二冊　シュヴェーグラー 谷川・松村訳　各一二〇
眠られぬ夜のために 全四冊　ヒルティ 草間平作訳　全三二〇
幸福論　ヒルティ 草間平作訳　八〇
道徳の系譜　ニーチェ 木場深定訳　八〇
プラグマティズム　W・ジェイムス 桝田啓三郎訳　八〇
隠者の夕暮 シュタンツだより　ペスタロッチー 長田新訳　八〇
学校と社会　デューイ 宮原誠一訳　八〇
旧約聖書 創世記　関根正雄訳　八〇
聖アウグスティヌス 告白 全三冊　服部英次郎訳　各八〇
基督教の本質　ハルナック 山谷省吾訳　一二〇
新訳 キリスト者の自由 聖書への助言　マルティン・ルター 石原謙訳　四〇
イエスの生涯　シュヴァイツェル 波木居斉二訳　八〇
コーラン 全三冊　井筒俊彦訳　各一二〇
魏志倭人伝・後漢書倭伝 宋書倭国伝・隋書倭国伝　和田清 石原道博 編訳　四〇
ローマ帝国衰亡史 全十冊　ギボン 村山勇三訳　全一五二〇

ランケ 世界史概観　鈴木成高 相原信作訳　一二〇
一外交官の見た明治維新 全二冊　アーネスト・サトウ 坂田精一訳　各一二〇
ブッダのことば　中村元訳　一二〇
法句経　荻原雲来訳注　四〇
臨済録　朝比奈宗源訳注　四〇
碧巌録 全三冊　朝比奈宗源訳注　各一二〇
歎異抄　金子大栄校訂　四〇
正法眼蔵 全三冊　道元禅師 衛藤即応校注　全五二〇
正法眼蔵随聞記　懐奘編 和辻哲郎校訂　四〇
レオナルド・ダ・ヴィンチの手記 全二冊　杉浦明平訳　各一二〇
ベートーヴェン 書簡集　小松雄一郎訳　一二〇
改訳 科学と方法　ポアンカレ 吉田洋一訳　一二〇
コペルニクス 天体の回転について　矢島祐利訳　八〇
ガリレオ・ガリレイ 新科学対話 全二冊　今野武雄 日田節次訳　各八〇
ロウソクの科学　ファラデー 矢島祐利訳　四〇
ビーグル号航海記 全三冊　チャールズ・ダーウィン 島地威雄訳　全三六〇
ファーブル 昆虫記 全二十冊　山田吉彦 林達夫訳　全一六八〇

人権宣言集	高木・末延・宮沢編	一六〇
世界憲法集	宮沢俊義編	一六〇
君主論	マキアヴェッリ 黒田正利訳	八〇
リヴァイアサン 全四冊	ホッブズ 水田洋訳	既一冊 一二〇
人間不平等起原論	ルソー 本田・平岡訳	八〇
社会契約論	ルソー 桑原・前川訳	八〇
リンカーン演説集	高木八尺 斎藤光訳	八〇
権利のための闘争	イエーリング 日沖憲郎訳	四〇
コモン・センス	トーマス・ペイン 小松春雄訳	四〇
諸国民の富 全五冊	アダム・スミス 大内・松川訳	既二冊 三六〇
ロバート・マルサス 初版人口の原理	高野岩三郎 大内兵衛訳	一二〇
改訂 経済学及び課税の原理 全二冊	リカアドオ 小泉信三訳	全二〇〇
女性の解放	J・S・ミル 大内兵衛・節子訳	八〇
ミル自伝	朱牟田夏雄訳	一二〇
哲学の貧困	カール・マルクス 山村喬訳	一二〇
共産党宣言	マルクス・エンゲルス 大内・向坂訳	四〇
賃労働と資本	マルクス 長谷部文雄訳	四〇

賃銀・価格および利潤	マルクス 長谷部文雄訳	四〇
カール・マルクス 資本論 全十二冊	エンゲルス編 向坂逸郎訳	全一五二〇
反デューリング論 全二冊	エンゲルス 粟田賢三訳	既一冊 一二〇
空想より科学へ	エンゲルス 大内兵衛訳	四〇
フォイエルバッハ論	エンゲルス 松村一人訳	四〇
自然の弁証法 全二冊	エンゲルス 田辺振太郎訳	全二八〇
改訳 婦人論 全二冊	ベーベル 草間平作訳	全二八〇
ローザ・ルクセンブルグ 経済学入門	佐野文夫訳	一六〇
農業問題 全二冊	カール・カウツキー 向坂逸郎訳	各一六〇
レーニン 唯物論と経験批判論 全三冊	佐野文夫訳	各八〇
帝国主義	レーニン 宇高基輔訳	八〇
国家と革命	レーニン 宇高基輔訳	八〇
金融資本論 全三冊	ヒルファアディング 岡崎次郎訳	全二八〇
世界をゆるがした十日間 全二冊	ジョン・リード 原光雄訳	全二〇〇
古代社会 全二冊	L・H・モルガン 青山道夫訳	全三二〇
マックス・ウエーバー 社会科学方法論	恒藤恭校閲 富永・立野訳	四〇
プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 全二冊	マックス・ウエーバー 梶山・大塚訳	既一冊 八〇

有閑階級の理論	ヴェブレン 小原敬士訳	一六〇
風姿花伝（花伝書）	世阿弥 野上・西尾校訂	四〇
自由党史 全三冊	板垣退助監修 遠山・佐藤校訂	全四四〇
日本の下層社会	横山源之助	一二〇
茶の本	岡倉覚三 村岡博訳	四〇
余は如何にして基督信徒となりし乎	内村鑑三 鈴木俊郎訳	一二〇
後世への最大遺物 デンマルク国の話	内村鑑三	四〇
善の研究	西田幾多郎	八〇
兆民先生・兆民先生行状記	幸徳秋水	四〇
社会主義神髄	幸徳秋水	四〇
貧乏物語	河上肇 大内兵衛解題	八〇
女工哀史	細井和喜蔵	一二〇
日本資本主義発達史	野呂栄太郎	一二〇
易経	高田真治訳注	一六〇
論語	武内義雄訳注	八〇
三民主義 全二冊	孫文 安藤彦太郎訳	各八〇
実践論・矛盾論	毛沢東 松村・竹内訳	四〇

岩波文庫選

当世書生気質	坪内逍遙	一二〇
ウィタ・セクスアリス	森鷗外	四〇
雁	森鷗外	四〇
山椒大夫・高瀬舟 他四篇	森鷗外	八〇
浮雲	二葉亭四迷	八〇
野菊の墓 他四篇	伊藤左千夫	八〇
吾輩は猫である 全二冊	夏目漱石	各一二〇
坊っちゃん	夏目漱石	四〇
草枕	夏目漱石	四〇
三四郎	夏目漱石	一二〇
それから	夏目漱石	一二〇
門	夏目漱石	八〇
こゝろ	夏目漱石	一二〇
明暗 全二冊	夏目漱石	各一二〇
五重塔	幸田露伴	四〇
運命 他一篇	幸田露伴	八〇
子規句集	高浜虚子選	一二〇
金色夜叉 全二冊	尾崎紅葉	全二〇〇
自然と人生	徳冨蘆花	八〇
小説 思出の記 全二冊	徳冨健次郎	全二〇〇
火の柱	木下尚江	八〇
武蔵野	国木田独歩	八〇
号外・少年の悲哀 他六篇	国木田独歩	四〇
蒲団・一兵卒	田山花袋	四〇
田舎教師	田山花袋	八〇
あらくれ	徳田秋声	一二〇
縮図	徳田秋声	一二〇
藤村詩抄	島崎藤村自選	八〇
破戒	島崎藤村	一二〇
千曲川のスケッチ	島崎藤村	八〇
にごりえ・たけくらべ	樋口一葉	四〇
修禅寺物語 正雪の二代目 他四篇	岡本綺堂	八〇
照葉狂言	泉鏡花	四〇
婦系図 全二冊	泉鏡花	各八〇
歌行燈	泉鏡花	四〇
虚子句集	高浜虚子自選	一六〇
上田敏詩抄	茅野蕭々編	八〇
黒髪 他二篇	近松秋江	八〇
赤彦歌集	斎藤茂吉 久保田不二子選	八〇
或る女 全二冊	有島武郎	全二〇〇
小さき者へ・生れ出づる悩み	有島武郎	四〇
宣言	有島武郎	四〇
寺田寅彦随筆集 全五冊	小宮豊隆編	各一二〇
与謝野晶子歌集	与謝野晶子自選	一二〇
何処へ・泥人形 他二篇	正宗白鳥	八〇
土 全二冊	長塚節	各八〇
すみだ川 他三篇	永井荷風	四〇
冷笑	永井荷風	八〇
腕くらべ	永井荷風	八〇

濹東綺譚	永井荷風	四〇
斎藤茂吉歌集	山口・柴生田・佐藤編	一二〇
桑の実	鈴木三重吉	八〇
大津順吉・和解・ある男、その姉の死	志賀直哉	一二〇
小僧の神様 他十篇	志賀直哉	八〇
暗夜行路 全二冊	志賀直哉	各一二〇
高村光太郎詩集	高村光太郎	八〇
白秋抒情詩抄	北原白秋	八〇
迷路 全四冊	野上弥生子	各一二〇
その妹	武者小路実篤	四〇
友情	武者小路実篤	四〇
銀の匙	中勘助	八〇
若山牧水歌集	若山喜志子選	一二〇
啄木歌集	石川啄木	一二〇
蓼喰ふ虫	谷崎潤一郎	八〇
盲目物語・春琴抄	谷崎潤一郎	八〇
吉井勇歌集	吉井勇自選	八〇

波	山本有三	一六〇
大阪の宿	水上滝太郎	一二〇
多情仏心 全二冊	里見弴	各一二〇
青銅の基督	長与善郎	四〇
萩原朔太郎詩集	三好達治選	一二〇
恩讐の彼方に・忠直卿行状記 他八篇	菊池寛	八〇
或る少女の死まで 他二篇	室生犀星	八〇
末枯・続末枯・露芝	久保田万太郎	八〇
出家とその弟子	倉田百三	八〇
蔵の中・子を貸し屋 他三篇	宇野浩二	八〇
神経病時代・若き日	広津和郎	八〇
羅生門・鼻・芋粥・偸盗	芥川竜之介	八〇
河童	芥川竜之介	四〇
奉教人の死 他十三篇	芥川竜之介	八〇
田園の憂鬱	佐藤春夫	四〇
増補 春夫詩鈔	佐藤春夫	一二〇
海に生くる人々	葉山嘉樹	一二〇

宮沢賢治詩集	谷川徹三編	一二〇
童話集 風の又三郎 他十八篇	宮沢賢治 谷川徹三編	一二〇
山椒魚・遙拝隊長 他七篇	井伏鱒二	四〇
機械 他九篇	横光利一	八〇
伸子 全二冊	宮本百合子	全二〇〇
太陽のない街	徳永直	一二〇
伊豆の踊子・温泉宿 他四篇	川端康成	八〇
雪国	川端康成	八〇
山の音	川端康成	一二〇
中野重治詩集	中野重治自選	四〇
蟹工船、一九二八・三・一五	小林多喜二	八〇
風立ちぬ・美しい村	堀辰雄	四〇
ヴィヨンの妻・桜桃 他八篇	太宰治	八〇
落城・霧の中 他四篇	田宮虎彦	八〇
真空地帯 全二冊	野間宏	各八〇
日本唱歌集	堀内敬三 井上武士編	一二〇
日本童謡集	与田準一編	一二〇

哲学・宗教・教育

- プラトン　ソクラテスの弁明　クリトン　久保勉訳　四〇
- プラトン　饗宴　久保勉訳注　八〇
- クセノフォーン　ソークラテースの思い出　佐々木理訳　一二〇
- アリストテレス　形而上学　全二冊　出隆訳　各一六〇
- アリストテレス　政治学　山本光雄訳　二〇〇
- エピクロス　出隆・岩崎允胤訳　八〇
- セネカ　幸福なる生活について　他一篇　樋口勝彦訳　四〇
- エピクテートス　人生談義　全二冊　鹿野治助訳　各一二〇
- マルクス・アウレーリウス　自省録　神谷美恵子訳　八〇
- ボエティウス　哲学の慰め　畠中尚志訳　八〇
- ジョン・ロック　人間悟性論　全二冊　加藤卯一郎訳　全二〇〇
- デカルト　方法序説　落合太郎訳　八〇
- デカルト　省察　三木清訳　八〇
- デカルト　精神指導の規則　野田又夫訳　四〇
- スピノザ　神・人間及び人間の幸福に関する短論文　畠中尚志訳　一二〇
- スピノザ　デカルトの哲学原理　畠中尚志訳　一二〇
- スピノザ　知性改善論　畠中尚志訳　四〇
- スピノザ　神学・政治論　全二冊　畠中尚志訳　各一二〇
- スピノザ　エチカ（倫理学）　全二冊　畠中尚志訳　全二〇〇
- スピノザ　往復書簡集　畠中尚志訳　一六〇
- ライプニッツ　形而上学叙説　河野与一訳　一六〇
- ライプニッツ　単子論　河野与一訳　一六〇
- バークリ　人知原理論　大槻春彦訳　一二〇
- ヒューム　人性論　全四冊　大槻春彦訳　全四八〇
- ヴォルテール　哲学書簡　林達夫訳　一二〇
- ド・ラ・メトリ　人間機械論　杉捷夫訳　四〇
- ルソー　エミイル　全五冊　平林初之輔訳　全四〇〇
- ディドロ　ダランベールの夢　他四篇　新村猛訳　八〇
- ディドロ　哲学断想　他二篇　新村・大賀訳　一二〇
- ハイネ　ドイツ古典哲学の本質　伊東勉訳　八〇
- カント　プロレゴーメナ　桑木厳翼・天野貞祐訳　八〇
- カント　道徳形而上学原論　篠田英雄訳　八〇
- カント　啓蒙とは何か　他三篇　篠田英雄訳　四〇
- カント　純粋理性批判　全三冊　篠田英雄訳　既一冊　一六〇
- カント　実践理性批判　波多野精一・宮本和吉訳　八〇
- カント　永遠平和の為に　高坂正顕訳　四〇
- カント　美と崇高との感情性に関する観察　上野直昭訳　四〇
- カント　道徳哲学　白井・小倉訳　八〇
- カント　人間学　坂田徳男訳　一六〇
- フィヒテ　人間の使命　宮崎洋三訳　八〇
- フィヒテ　全知識学の基礎　全二冊　木村素衛訳　全二〇〇
- シュライエルマッヘル　宗教論　佐野勝也・石井次郎訳　一二〇
- ヘーゲル　小論理学　全二冊　松村一人訳　各一二〇
- ヘーゲル　哲学入門　武市健人訳　一六〇
- シェリング　学問論　勝田守一訳　八〇
- シェリング　人間的自由の本質　西谷啓治訳　八〇
- ショウペンハウエル　自殺について　他四篇　斎藤信治訳　四〇
- ショウペンハウエル　読書について　他四篇　斎藤忍随訳　四〇
- ショウペンハウエル　知性について　他四篇　細谷貞雄訳　八〇

ヘーゲル哲学の批判 他一篇	フォイエルバッハ 佐野文夫訳	四〇
キリスト教の本質 全二冊	フォイエルバッハ 船山信一訳	各一二〇
唯心論と唯物論	フォイエルバッハ 船山信一訳	八〇
唯一者とその所有 全二冊	スティルネル 草間平作訳	全二〇〇
反復	キェルケゴール 桝田啓三郎訳	八〇
不安の概念	キェルケゴール 斎藤信治訳	一二〇
死に至る病	キェルケゴール 斎藤信治訳	八〇
西洋哲学史 全二冊	シュヴェーグラー 谷川・松村訳	各一二〇
哲学の人間学的原理	チエルヌイシエフスキー 松田道雄訳	八〇
哲学の本質	ディルタイ 戸田三郎訳	四〇
近代美学史	ディルタイ 沢柳大五郎訳	四〇
体験と創作 全二冊	ディルタイ 小牧・柴田訳	各一二〇
世界観の研究	ディルタイ 山本英一訳	四〇
眠られぬ夜のために 全四冊	ヒルテイ 草間平作訳	全三二〇
幸福論	ヒルテイ 草間平作訳	八〇
道徳の系譜	ニーチエ 木場深定訳	八〇
この人を見よ	ニーチエ 安倍能成訳	八〇
心理学 全二冊	ウイリアム・ジエイムス 今田恵訳	各一二〇
プラグマティズム	W・ジエイムズ 桝田啓三郎訳	八〇
ケーベル博士随筆集	久保勉訳編	八〇
ヴィンデルバント 哲学概論 全二冊	速水・高桑 山本訳	各八〇
日常生活に於ける精神病理	フロイド 丸井清泰訳	一六〇
芸術哲学	ジンメル 斎藤栄治訳	八〇
断想（日記抄）	ジンメル 清水幾太郎訳	四〇
純粋現象学及現象学的哲学考案 全二冊	フッセル 池上鎌三訳	全二〇〇
時間と自由	ベルグソン 服部紀訳	八〇
物質と記憶	ベルグソン 高橋里美訳	一二〇
創造的進化 全二冊	ベルグソン 真方敬道訳	全二〇〇
笑	ベルグソン 林達夫訳	八〇
哲学入門・変化の知覚	ベルグソン 河野与一訳	四〇
哲学的直観 他四篇	ベルグソン 河野与一訳	四〇
哲学の方法	ベルグソン 河野与一訳	四〇
道徳と宗教の二源泉	ベルグソン 平山高次訳	一六〇
プラトン哲学	バーネット 出・宮崎訳	八〇
リッケルト 文化科学と自然科学	佐竹哲雄 豊川昇訳	八〇
レーニン 唯物論と経験批判論 全三冊	佐野文夫訳	各八〇
レーニン 哲学ノート 全三冊	松村一人訳	既二冊 二〇〇
数理哲学序説	ラッセル 平野智治訳	一二〇
抽象と感情移入	ヴォリンゲル 草薙正夫訳	八〇
存在と時間 全三冊	ハイデガー 桑木務訳	既一冊 一二〇
隠者の夕暮 シュタンツだより	ペスタロッチー 長田新訳	八〇
フレーベル自伝	長田新訳	八〇
学校と社会	デューイ 宮原誠一訳	八〇
国民教育と民主主義	クループスカヤ 勝田昌二訳	八〇
旧約聖書 創世記	関根正雄訳	八〇
旧約聖書 サムエル記	関根正雄訳	八〇
旧約聖書 エレミヤ書	関根正雄訳	一六〇
旧約聖書 イザヤ書 全二冊	関根正雄訳	既一冊 一二〇
聖アウグスティヌス 告白 全三冊	服部英次郎訳	各八〇
トマス・ア・ケンピス キリストにならいて	大沢章 呉茂一訳	一二〇
基督教の本質	ハルナック 山谷省吾訳	一二〇

新訳キリスト者の自由・聖書への序言　マルティン・ルター　石原謙訳　四〇
マリヤの讃歌他一篇　マルティン・ルター　石原・吉村訳　八〇
信仰要義　マルティン・ルター　石原謙訳　八〇
聖テレジア完徳の道　カルメル会訳　一二〇
イエス伝　ルナン　津田穣訳　一六〇
イエス　ブーセ　林達夫訳　四〇
イエスの生涯　シュヴァイツェル　波木居斉二訳　八〇
キリスト教と世界宗教　シュヴァイツェル　鈴木俊郎訳　四〇
コーラン　全三冊　井筒俊彦訳　各一二〇

仏教

ブッダのことば　中村元訳　一二〇
法句経　荻原雲来訳注　四〇
般若心経・金剛般若経　中村元・紀野一義訳注　八〇
臨済録　朝比奈宗源訳注　四〇
碧巌録　全三冊　朝比奈宗源訳注　各一二〇
教行信証　親鸞　金子大栄校訂　一六〇
歎異抄　金子大栄校訂　四〇
日蓮上人文抄　姉崎正治校注　八〇
正法眼蔵　全三冊　道元禅師　衛藤即応校注　全五二〇
正法眼蔵随聞記　懐奘編　和辻哲郎校訂　四〇

歴史

魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝　和田清・石原道博編訳　四〇
旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝　和田清・石原道博編訳　八〇
タキトゥス　ゲルマーニア　田中秀央・泉井久之助訳　八〇
フィレンツェ史　全二冊　マキアヴェルリ　大岩誠訳　各一二〇
ルイ十四世の世紀　全四冊　ヴォルテール　丸山熊雄訳　既一冊　一二〇
ローマ帝国衰亡史　全十冊　ギボン　村山勇三訳　全一五二〇
人間精神進歩史　全二冊　コンドルセ　渡辺誠訳　全二八〇
ランケ　世界史概観　鈴木成高・相原信作訳　一二〇
ベルンハイム　歴史とは何ぞや　坂口昂・小野鉄二訳　八〇
歴史における個人の役割　プレハーノフ　木原正雄訳　四〇
ルネサンスと宗教改革　トレルチ　内田芳明訳　八〇
歴史の理論と歴史　クローチェ　羽仁五郎訳　一六〇
フランス大革命　全三冊　マチエ　ねづ・市原訳　既二冊　二四〇
古代への情熱　シュリーマン　村田数之亮訳　八〇
日本幽囚記　全三冊　ゴロヴニン　井上満訳　全四四〇
ペルリ提督日本遠征記　全四冊　土屋喬雄・玉城肇訳　各一二〇
ハリス日本滞在記　全三冊　坂田精一訳　全三二〇
日本渡航記　ゴンチャロフ　井上満訳　一六〇
日本切支丹宗門史　全三冊　レオン・パジェス　吉田小五郎訳　各一六〇
アーネスト・サトウ　一外交官の見た明治維新　全二冊　坂田精一訳　各一二〇
ベルツの日記　全四冊　トク・ベルツ編　菅沼竜太郎訳　全三二〇

日本思想・東洋思想

- 養生訓・和俗童子訓　貝原益軒　石川謙校訂　一二〇
- 三浦梅園集　三枝博音編　四〇
- 蘭学事始　杉田玄白　緒方富雄校注　四〇
- 鳩翁道話　石川謙校訂　八〇
- 学問のすゝめ　福沢諭吉　八〇
- 兆民選集　中江篤介　嘉治隆一編校　一二〇
- 日本開化小史　田口卯吉　嘉治隆一校注　八〇
- 茶の本　岡倉覚三　村岡博訳　四〇
- 基督信徒のなぐさめ　内村鑑三　四〇
- 内村鑑三随筆集　内村鑑三　一二〇
- 余は如何にして基督信徒となりし乎　内村鑑三　鈴木俊郎訳　一二〇
- 代表的日本人　内村鑑三　鈴木俊郎訳　八〇
- 後世への最大遺物・デンマルク国の話　内村鑑三　四〇
- 善の研究　西田幾多郎　八〇
- 兆民先生・兆民先生行状記　幸徳秋水　四〇
- 易経　高田真治訳注　一六〇
- 論語　武内義雄訳注　八〇
- 荀子　全二冊　金谷治訳注　既一冊　一六〇
- 実践論・矛盾論　毛沢東　松村・竹内訳　四〇

音楽・美術

- ベートーヴェン書簡集　小松雄一郎訳　一二〇
- ベートーヴェン 音楽ノート　小松雄一郎訳編　四〇
- ベートーヴェンの生涯　ロマン・ロラン　片山敏彦訳　八〇
- 音楽と音楽家　シューマン　吉田秀和訳　八〇
- 音楽美論　ハンスリック　渡辺護訳　八〇
- レオナルド・ダ・ヴィンチの手記　全二冊　杉浦明平訳　各一二〇
- ミレー　ロマン・ロラン　蛯原徳夫訳　八〇
- ゴッホの手紙　全三冊　エミル・ベルナール　硲伊之助訳　既二冊　二〇〇
- ロダン　リルケ　高安国世訳　八〇
- ロダンの言葉抄　高村光太郎訳　高田・菊池編　一六〇

自然科学

- 科学と仮説　ポアンカレ　河野伊三郎訳　一二〇
- 改訳 科学と方法　ポアンカレ　吉田洋一訳　一二〇
- エネルギー　オストヴァルド　山県春次訳　八〇
- 化学の学校　全三冊　オストヴァルド　都築洋次郎訳　全三二〇
- コペルニクス 天体の回転について　矢島祐利訳　八〇
- 天文対話　全二冊　ガリレオ・ガリレイ　青木靖三訳　全二八〇
- ガリレオ・ガリレイ 新科学対話　全二冊　今野武雄　日田節次訳　各八〇
- ロウソクの科学　ファラデー　矢島祐利訳　四〇
- リービッヒ 化学通信　全四冊　柏木肇訳　既二冊　一六〇
- ビーグル号航海記　全三冊　チャールズ・ダーウィン　島地威雄訳　各一二〇
- 動物哲学　ラマルク　小泉・山田訳　一六〇
- ファーブル 昆虫記　全二十冊　山田吉彦　林達夫訳　全一六八〇
- 栽培植物の起原　全三冊　ドゥ・カンドル　加茂儀一訳　全四〇〇
- 植物の育成　全八冊　バーバンク　中村為治訳　既七冊　八八〇
- 人文地理学原理　全二冊　ブラーシュ　飯塚浩二訳　各一二〇


岩波